

## **Oracle® Warehouse Builder**

インストールおよび構成ガイド

10g リリース 1 (10.1)

部品番号 : B13519-02

2007 年 11 月

Oracle Warehouse Builder インストールおよび構成ガイド, 10g リリース 1 (10.1)

部品番号 : B13519-02

原本名 : Oracle Warehouse Builder Installation and Configuration Guide, 10g Release 1 (10.1)

原本部品番号 : B12150-02

原本著者 : Julia M. Stein

原本協力者 : Srinivasa Ganti, Adrian Scott, Ron Gonzalez, Dick Whittington, Geoff Watters, Edwin Meijer, Yu Gong, Mark Van De Wiel, John Potter, Barry Cook, Mark Rovers, Elina Sternik, Adrian Scott, Anil Menon, Bojana Simova, Julie Curdo, Michelle Bird

Copyright © 2007, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

<b>はじめに</b> .....	v
目的 .....	vi
対象読者 .....	vi
このマニュアルの構成 .....	vi
10g リリース 1 (10.1) の新機能 .....	vii
表記規則 .....	ix
関連ドキュメント .....	ix
<b>1 Warehouse Builder インストール要件</b>	
1.1 Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ .....	1-2
1.2 ハードウェア要件 .....	1-3
1.3 ソフトウェア要件 .....	1-3
1.3.1 オペレーティング・システムの要件 .....	1-3
1.3.1.1 サポートしているオペレーティング・システム・プラットフォーム .....	1-3
1.3.1.2 UNIX オペレーティング・システム .....	1-3
1.3.1.3 Microsoft Windows オペレーティング・システム .....	1-3
1.3.2 必要な製品 .....	1-4
1.3.2.1 Oracle Database (必須) .....	1-5
1.3.2.2 Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェア (必須) .....	1-6
1.3.2.3 Oracle Application Server (オプション) .....	1-6
1.3.2.4 Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow (オプション) .....	1-7
1.3.2.5 Name and Address アダプタおよびデータ・ライブラリ (オプション) .....	1-7
1.4 共存: ORACLE_HOME に関する考慮事項 .....	1-7
1.5 インストール前のチェックリスト .....	1-8
1.6 Oracle Universal Installer の概要 .....	1-9
1.6.1 インベントリ・ディレクトリ .....	1-9
1.6.2 Oracle Universal Installer の起動 .....	1-9
1.6.2.1 Windows ユーザーの場合 .....	1-9
1.6.2.2 UNIX ユーザーの場合 .....	1-9
1.6.2.3 Oracle Universal Installer の実行 .....	1-10
<b>2 Warehouse Builder のインストール</b>	
2.1 Warehouse Builder のアーキテクチャとコンポーネントの概要 .....	2-2
2.1.1 Warehouse Builder の製品アーキテクチャ .....	2-2
2.1.2 一般的なインストール例 .....	2-3
2.1.2.1 Microsoft Windows サーバーとオプションのクライアントを使用した例 .....	2-4
2.1.2.2 コンサルタントの使用形態 .....	2-5

2.1.2.3	UNIX サーバーと Microsoft Windows クライアントを使用した例 .....	2-5
2.1.3	Oracle Universal Installer でインストールされるコンポーネント .....	2-6
2.1.4	SYSDBA ユーザーへのアクセス権 .....	2-9
2.2	ターゲット・スキーマ・ホストへの Warehouse Builder のインストール .....	2-9
2.3	Repository Assistant での Design Repository のインストール .....	2-9
2.4	Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール .....	2-12
2.4.1	Runtime Repository と Runtime Access User のインストール .....	2-12
2.4.2	Warehouse Builder ターゲット・スキーマのインストール .....	2-15
2.5	Design Browser 環境および Runtime Audit Browser 環境の構成 .....	2-17
2.5.1	クライアント・バージョンの Design Browser の有効化 .....	2-17
2.5.1.1	Oracle9i リリース 2 (9.2.x) または Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) の場合 .....	2-17
2.5.1.2	Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の場合 .....	2-18
2.5.1.3	クライアント・バージョンの Design Browser 起動前の準備作業 .....	2-20
2.5.2	Warehouse Builder Browser を実行する各コンピュータでの Web ブラウザ設定の 構成 .....	2-20
2.5.2.1	Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの 「LOCALHOST」の追加 .....	2-21
2.5.2.2	Web ブラウザのキャッシュ管理の構成 .....	2-21
2.5.2.3	ネット・サービス名を使用した Warehouse Builder の構成 .....	2-21
2.5.2.4	クライアント・バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の 起動 .....	2-22
2.5.3	(オプション) Oracle Application Server との統合 .....	2-22
2.5.3.1	Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由 .....	2-23
2.5.3.2	Browser Assistant での Oracle Application Server へのブラウザのインストール ...	2-23
2.5.3.3	Warehouse Builder Design Browser の構成 .....	2-25
2.5.3.4	Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成 .....	2-26
2.5.3.5	Application Server バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の起動 .....	2-32
2.6	(オプション) サードパーティの Name and Address データのインストール .....	2-32

### 3 10g リリース 1 (10.1) へのアップグレードとデータの移行

3.1	別の ORACLE_HOME への Warehouse Builder のインストール .....	3-2
3.2	Oracle Database 環境のアップグレードまたは移行 .....	3-2
3.2.1	新しいデータベース・インスタンスに移動する場合のデータベースの完全な エクスポートとインポート .....	3-3
3.2.2	同じデータベース・インスタンスを保持する場合のデータベースの 移行ユーティリティ .....	3-4
3.2.3	選択的移行のための部分的なデータベースのエクスポートとインポート .....	3-4
3.2.3.1	部分的なデータベースのエクスポートでの設計メタデータの移行 .....	3-4
3.2.3.2	ランタイム環境の移行 .....	3-6
3.3	設計メタデータのアップグレード .....	3-8
3.3.1	Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からの設計メタデータのアップグレード .....	3-8
3.3.1.1	以前のリリースの Warehouse Builder からの設計メタデータのエクスポート .....	3-8
3.3.1.2	新規の Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) Design Repository の作成 .....	3-9
3.3.1.3	Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) への設計メタデータのインポート .....	3-9
3.3.2	Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの設計メタデータのアップグレード .....	3-10
3.3.2.1	Warehouse Builder 設計メタデータの自動アップグレード・スクリプト .....	3-10
3.4	ランタイム・データのアップグレード .....	3-11
3.4.1	Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からのランタイム・データのアップグレード .....	3-11
3.4.1.1	オプション 1. Warehouse Builder でのデータベース・オブジェクトの再生成 .....	3-11

3.4.1.2	オプション 2. Oracle Database サーバーでのデータベース・オブジェクトの エクスポートとインポート .....	3-12
3.4.1.3	オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの 作成 .....	3-13
3.4.2	Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からのランタイム・データのアップグレード ...	3-13
3.4.2.1	Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの監査データのアップグレード .....	3-13
3.4.2.2	新しいデータベース・インスタンスへのフラット・ファイルと 外部ディレクトリのコピー .....	3-15
3.5	新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布 .....	3-15
3.6	新機能を利用するためのマッピング構成の更新 .....	3-16
3.7	オプション: Warehouse Builder の旧バージョンの削除 .....	3-17

## 4 Warehouse Builder コンポーネントの削除

4.1	ステップ 1. Oracle Application Server からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除 .....	4-2
4.2	ステップ 2. Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除 .....	4-2
4.3	ステップ 3. Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除 .....	4-3
4.4	ステップ 4. Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除 .....	4-3
4.5	ステップ 5. Oracle Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除 .....	4-4

## A Oracle Database の準備

A.1	Design Repository データベース・インスタンスのパラメータ .....	A-2
A.2	Runtime Repository データベース・インスタンスのパラメータ .....	A-2
A.2.1	フラット・ファイル・ターゲットのターゲット・データ・ファイルのパスの設定 .....	A-5
A.3	Oracle Application Server データベースのパラメータ (オプション) .....	A-6

## B CD-ROM のマウント

B.1	CD-ROM のマウント (AIX の場合) .....	B-2
B.2	CD-ROM のマウント (HP-UX の場合) .....	B-2
B.3	CD-ROM のマウント (Linux の場合) .....	B-3
B.4	CD-ROM のマウント (Solaris の場合) .....	B-4
B.5	CD-ROM のマウント (Tru64 UNIX の場合) .....	B-4

## C Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール

C.1	Oracle Enterprise Manager の構成 .....	C-2
C.1.1	Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成 .....	C-2
C.1.2	Windows ユーザーの作成 .....	C-3
C.1.3	優先接続情報の構成 .....	C-4
C.1.4	Oracle Developer Suite 用の Enterprise Manager の構成 .....	C-5
C.2	Oracle Workflow のインストール .....	C-6
C.2.1	Oracle Workflow Server のインストール .....	C-6
C.2.2	Oracle Workflow Client のインストール (オプション) .....	C-6

## D MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード

D.1	MDL File Upgrade Utility について .....	D-2
D.1.1	MDL File Upgrade Utility の使用 .....	D-2
D.1.1.1	旧バージョンからのリポジトリ・オブジェクトのアップグレード .....	D-2

D.1.1.2	MDL File Upgrade ウィザードの使用 .....	D-3
D.1.1.3	警告およびエラーの確認 .....	D-4
D.1.2	コマンドラインからの MDL File Upgrade Utility の実行 .....	D-4

## E 診断およびデバッグ

E.1	デバッグ .....	E-2
E.1.1	ログ・ファイルのロケーション .....	E-2
E.1.2	Oracle Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ .....	E-2
E.1.3	エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング .....	E-2
E.1.4	Runtime Platform Service の管理 .....	E-4
E.1.5	HP-UX へのインストール時に発生するデータベース・サーバー問題の検出 .....	E-4
E.2	診断 .....	E-5

## F Warehouse Builder のサポート言語

### 索引

---

---

# はじめに

ここでは、次の項目について説明します。

- 目的 (vi ページ)
- 対象読者 (vi ページ)
- このマニュアルの構成 (vi ページ)
- 表記規則 (ix ページ)
- 関連ドキュメント (ix ページ)

## 目的

Oracle Warehouse Builder は、データの移動や変換、ビジネス・インテリジェンス・システムの開発および実装、メタデータの管理、Oracle Database およびメタデータの作成と管理を行う専門家のための包括的なツールセットです。このマニュアルでは、Oracle Warehouse Builder および主要な関連製品のインストール方法を説明します。Windows マシンまたは UNIX マシンに Warehouse Builder Client、サーバー、およびリポジトリをインストールする場合に、このマニュアルを使用してください。

ここに記載するインストール手順は、ハードウェアおよびソフトウェアの構成内容、または Warehouse Builder とともにインストールする製品に対応して変更できます。詳細は、『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』を参照してください。

## 対象読者

このマニュアルは、次にあげる Warehouse Builder のインストール担当者を対象にしています。

- ビジネス・インテリジェンス・アプリケーション開発者
- ウェアハウス管理者
- システム管理者
- その他の MIS（経営情報システム）担当者

Oracle Warehouse Builder をインストールするには、Oracle Database のインストールについての知識が必要です。

## このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の内容で構成されています。

- [第 1 章「Warehouse Builder インストール要件」](#) では、Warehouse Builder のインストール要件について記載します。Warehouse Builder のクライアント、サーバーおよびリポジトリのインストールに必要なシステム要件を確認してください。
- [第 2 章「Warehouse Builder のインストール」](#) では、Warehouse Builder のクライアント、サーバー、ブラウザ、Design Repository および Runtime Repository の典型的なインストール方法を説明します。
- [第 3 章「10g リリース 1 \(10.1\) へのアップグレードとデータの移行」](#) では、以前のバージョンの Warehouse Builder から Oracle Warehouse Builder にメタデータをアップグレードする方法を説明します。
- [第 4 章「Warehouse Builder コンポーネントの削除」](#) では、Warehouse Builder コンポーネントの削除方法を説明します。
- [付録 A「Oracle Database の準備」](#) では、Warehouse Builder のデータベースの準備に必要な初期化パラメータの変更内容を記載します。
- [付録 C「Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール」](#) では、ジョブのスケジュールとジョブ依存性の管理のために、Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow を Warehouse Builder とともにインストールおよび構成する際のガイドラインを記載します。
- [付録 D「MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード」](#) では、メタデータを MDL インポートの自動処理としてアップグレードするのではなく、個別にアップグレードする場合の MDL File Upgrade Utility の使用方法を説明します。
- [付録 E「診断およびデバッグ」](#) では、トラブルシューティングのガイドラインを記載します。
- [付録 F「Warehouse Builder のサポート言語」](#) では、Warehouse Builder でサポートされている言語と、その国際標準 ID を列挙します。



## 10g リリース 1 (10.1) の新機能

Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、Warehouse Builder リリース 9.2 と機能が同じですが、次のような例外があります。

- Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、Oracle Database 10g のソースとターゲットをサポートしています。
- Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) では、owb/rtp/sql/set\_oem\_home.sql スクリプトを介してリモート実行ができます。詳細は、『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』を参照してください。
- Express Bridge がサポート対象外となりました。

### Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) のインストールの違い

インストールおよびアップグレードの処理に、次のような変更が行われました。

- Server Side のインストールと Design Time のインストールが、区別されなくなりました。Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) では、データベース・サーバーにインストール・タイプが 1 つしかなく、Oracle Database のインスタンスをホスティングするコンピュータにインストールする必要があります。さらに、Design Client として指定されたコンピュータすべてに、Oracle Database のインスタンスなしで、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) をインストールできます。
- Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、Oracle Database 10g と同じプラットフォームすべてで使用できますが、HP OpenVMS と IBM zOS (OS/390) は例外です。Oracle Database 10g に従って、Warehouse Builder は Solaris 64 ビット・プラットフォームでは使用できますが、Solaris 32 ビット・プラットフォームでは使用できません。

### Warehouse Builder リリース 9.2 の追加機能

前回リリースの Warehouse Builder では、次の機能が追加されました。

#### マッピング・エディタの拡張：マッピング・デバッグ

このリリースの Warehouse Builder では、マッピング・エディタ内からのマッピング用に、拡張的なデバッグ機能が提供されます。マッピング・デバッグを使用して、マッピング内の論理設計エラーを見つけます。この新機能では、ブレイク・ポイントやウォッチの設定、テスト・データの対話的変更などの包括的なデバッグ機能を使用して、マッピングのデータ・フローを順を追って確認できます。

#### 複数ターゲットのサポートの拡張：関連コミット

このリリースでは、複数のターゲットを含むマッピングに使用する新しいコミット方法が導入されます。以前のリリースの Warehouse Builder では、独立したコミットが実行されました。つまり、Warehouse Builder では、他のターゲットに関係なく、各ターゲットがコミットおよびロールバックされていました。このオプションに加え、このリリースの Warehouse Builder では関連コミットも実行されます。つまり、すべてのターゲットをひとまとまりと見なして、ターゲット全体で一様にデータをコミットまたはロールバックします。ソース内の各行が、すべての関連ターゲットに一様に影響を与えるようにするには、関連コミットを使用します。

#### ダイレクト・パーティション交換ロード

以前のリリースの Warehouse Builder では、ソース・データの追加処理が必要なマッピング用に一時表がデフォルトで作成され、その後パーティションが交換されていました。このような状態は、マッピングにリモート・ソースまたは結合した複数のソースが含まれた場合に発生しました。このリリースでは、一時表を作成する必要はなく、ソースを直接ターゲットに交換できます。マッピングでダイレクト・パーティション交換ロードを使用して、前に実行されたマッピングでロードしたファクト表を即座にパブリッシュします。

## データの品質に関する機能

- **複数の Name and Address ソフトウェア・プロバイダ**: このリリースからは、動作保証された複数の Name and Address ソフトウェア・プロバイダと Warehouse Builder が連携できるようになります。サード・パーティ・ベンダーに許諾された Name and Address ソフトウェアを Warehouse Builder で使用できます。これによって、プロジェクトに最適な Name and Address プロバイダを選択できるようになります。
- **Name and Address 演算子ウィザード**: 以前のリリースでは、マッピング・キャンバスと演算子の構成プロパティ・シートを使用して、Name and Address 演算子を定義していました。このリリースの Warehouse Builder では、使い易さを考慮して、ウィザードおよび演算子エディタで Name and Address 演算子を作成および編集できるようになりました。
- **Match-Merge 演算子**: Oracle Pure Integrate で使用していたデータの品質に関する機能が、Warehouse Builder に組み込まれました。マッピング・エディタで Match-Merge 演算子を使用して、レコードの一致とマージに関するビジネス・ルールを定義できます。Match-Merge 演算子を Name and Address 演算子とともに使用すると、Name and Address データで一意的なハウスホールドを識別するプロセスがサポートされます。

## メタデータ変更管理

以前のリリースでは、OMB Plus スクリプト・ユーティリティを使用してメタデータ変更管理を実行していました。このリリースからは、Warehouse Builder Client ユーザー・インタフェースで同様の機能を実行できます。メタデータ変更管理によって、メタデータ・オブジェクトのスナップショットを取得したり、バックアップや履歴管理にスナップショットを使用したりできます。ナビゲーション・ツリーの任意のオブジェクトでスナップショットがサポートされます。スナップショットには、オブジェクト自身の情報（表やモジュールなど）や、オブジェクト内のオブジェクト（モジュール内の表など）の情報が格納されます。

## Warehouse Builder 機能の拡張

- **セキュリティ**: このリリースの Warehouse Builder では、セキュリティ要件に応じて採用するリポジトリ・セキュリティと監査のオプションが拡張されます。拡張されたセキュリティ・オプションは次のとおりです。

**プロアクティブ・セキュリティ**: Warehouse Builder では、カスタマイズされた PL/SQL のセキュリティ実装パッケージを Warehouse Builder Design Repository にプラグインして、ユーザーの組織で定義されたセキュリティ・ルールに応じたアクセス制御をユーザーに提供できます。

**リアクティブ・セキュリティ**: Warehouse Builder では、メタデータ履歴に基づいて監査情報を追跡し、このような監査情報によってセキュリティ・ポリシーを決定できます。

**データ管理**: Warehouse Builder では、技術管理者ではなく、ユーザーまたはグループがメタデータの一部を所有できます。したがって、メタデータの所有権は、メタデータのセキュリティ管理において重要です。
- **RAC のサポート**: Warehouse Builder リリース 9.2 では、RAC 機能のサポートが拡張されます。このリリースの Warehouse Builder では、実行時にネット・サービス名を使用できるようになります。これによって、ランタイム環境を再構成せずに、クラスタ内のノードの保守計画を立てることができます。また、Warehouse Builder では、ランタイム・サービスの可用性も拡張されます。たとえば、サービス・インスタンスまたは関連のノードが失敗するか、サービスが停止すると、別のノードにあるランタイム・サービス・インスタンスをかわりに実行できます。Warehouse Builder Design Repository も RAC クラスタで使用できますが、このリリースでは RAC のフェイル・オーバー機能は利用できません。

## フラット・ファイル・サポートの拡張

- **ZONED データ型のサポート**: このリリースの Warehouse Builder では、ゾーン 10 進データを含む固定形式のデータ・ファイルをロードできるようになります。フラット・ファイル・サンプル・ウィザードで、インポートするフラット・ファイルに ZONED データ型を指定します。ゾーン化データの形式は、10 進数の文字列（1 バイトに 1 桁ずつ）で、最終バイトに記号が含まれています（COBOL では、SIGN TRAILING フィールドになります）。このフィールドの長さは、指定した精度（桁数）と同じです。小数点以下の桁数であるスケールも指定できます。

- **DECIMAL データ型のサポート**: 10 進データはパック化された 10 進形式で、1 桁と記号を含む最終バイトを除いて、1 バイトに 2 桁ずつ含まれています。DECIMAL データ型には、精度とスケールが含まれているので、端数値が示されます。

### データベース接続性の拡張

このリリースでは、パブリック・データベース・リンクを作成して、データベース全体で共有できるようになります。リポジトリの所有者や、CREATE PUBLIC DATABASE LINK 権限を持つ他のユーザーは、パブリック・データベース・リンクを作成できます。

### Warehouse Builder が HP-UX および AIX で使用可能

リリース 9.2 からは、UNIX (HP-UX および AIX) プラットフォームで Warehouse Builder が使用可能になります。これは、以前のリリースから使用可能だった UNIX (Solaris および Linux) プラットフォーム、Windows (NT、2000 および XP) プラットフォームに加えて使用可能になりました (MITI Bridge の機能は、Windows プラットフォームでのみ有効です)。

### Public API

リリース 9.2 からは、Public API が Warehouse Builder に組み込まれました。Public API にアクセスするには、次のファイルを解凍し、ローカル・マシン上のフォルダに展開します。

```
<owb home directory>%owb%lib%int%pubapi_javadoc.jar
```

ファイル index.html をダブルクリックします。API の使用方法については、「ヘルプ」リンクを選択します。

## 表記規則

このマニュアルでは、Windows NT、Windows 2000 および Windows XP オペレーティング・システムを総称して Windows と記載します。Oracle Database の SQL\*Plus インタフェースは、SQL と記載する場合があります。

このマニュアルでは、次の表記規則も使用します。

表記規則	意味
...	文またはコマンド中の横の省略記号は、その例に直接関係のない文やコマンドの一部が省略されていることを示します。
<b>太字</b>	テキスト中の太字は、インタフェース・ボタンまたはリンクを示します。太字は、主題を強調する目的でも使用します。
Unicode テキスト	Unicode テキストは、コード自体、ファイルのディレクトリや名前、リテラル・コマンドを示します。
イタリックの Unicode テキスト	イタリックの Unicode テキストは、ユーザーが値を指定するパラメータを示します。
[ ]	大カッコは、1 つを選択するか、選択しなくてもよい任意の句を囲みます。

## 関連ドキュメント

次のマニュアルがあります。

- 『Oracle Warehouse Builder インストレーションおよび構成ガイド』
- 『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Warehouse Builder トランスフォーメーション・ガイド』
- 『Oracle Warehouse Builder スクリプト・リファレンス』
- 『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』

Warehouse Builder ドキュメント・セットに加えて、次のマニュアルも参照できます。

- 『Oracle データ・ウェアハウス・ガイド』

---

---

# Warehouse Builder インストール要件

この章では、Oracle Warehouse Builder のインストールに必要なハードウェアおよびソフトウェアの要件について説明します。この章では、次の項目について説明します。

- [Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ \(1-2 ページ\)](#)
- [ハードウェア要件 \(1-3 ページ\)](#)
- [ソフトウェア要件 \(1-3 ページ\)](#)
- [共存: ORACLE\\_HOME に関する考慮事項 \(1-7 ページ\)](#)
- [インストール前のチェックリスト \(1-8 ページ\)](#)

## 1.1 Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ

このインストール手順の概略は、Warehouse Builder のインストールの上級者向けです。Warehouse Builder をインストールした経験があり、使用しているシステムのハードウェアおよびソフトウェアがすでに Warehouse Builder の要件を満たしている場合は、この項の手順に従ってください。このマニュアルの他の部分は参照用のみに使用してかまいません。

---

**注意：** インストールのクイック・ステップは、初めてインストールする方にはお薦めしません。Warehouse Builder のインストール経験が十分でない場合は、この章全体を読んで、使用しているシステムが Warehouse Builder のインストール要件を満たしていることを確認して、第 2 章「Warehouse Builder のインストール」に進んで、適切なインストール方法を選択してください。

---

この項では、必要なインストール手順について簡単に説明します。この章の残りの部分では、Warehouse Builder を正常にインストールするための、システムおよび環境の要件について説明します。各パラメータの詳細情報や、オプションのコンポーネントのインストール方法については、第 2 章「Warehouse Builder のインストール」のインストールに関する詳細な手順を参照してください。

### ステップ 1. ターゲット・スキーマ・ホストへの Warehouse Builder のインストール

Oracle Universal Installer を起動し、手順に従って Warehouse Builder を専用の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします（このマニュアルでは、Warehouse Builder の Oracle ホーム・ディレクトリを、Oracle Database がインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリと区別するために、`OWB_ORACLE_HOME` と記述します）。UNIX 動作環境でインストールを行う場合は、Oracle Database の `ORACLE_HOME` と同じオペレーティング・システム・ユーザーに `OWB_ORACLE_HOME` をインストールしてください。

### ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール

1. Warehouse Builder のプログラム・グループから Repository Assistant を起動します。
2. インストール先のシステムの接続情報を入力します。ここで指定するユーザー名には、SYSDBA 権限が必要です。
3. 新しく Warehouse Builder の Design Repository を作成し、このリポジトリ・スキーマのユーザー名とパスワードを入力して、Repository Assistant の指示に従います。

### ステップ 3. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール

1. Oracle Warehouse Builder のプログラム・グループから Runtime Assistant を起動して、ランタイム・オブジェクトのインストール先システムの接続情報を入力します。ここで指定するユーザー名には、SYSDBA 権限が必要です。
2. 「Runtime Repository」を選択します。「新規 Warehouse Builder Runtime Repository の作成」を選択します。次に「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択して、Runtime Assistant の指示に従います。
3. Runtime Repository のインストールが終了した後、「新規 Warehouse Builder ターゲット・スキーマの作成」を選択して、Runtime Assistant の指示に従います。

### ステップ 4. Design Browser 環境および Runtime Audit Browser 環境の構成

1. 使用している Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストに LOCALHOST を追加します。
2. Warehouse Builder Design Repository と同じホスト上で、データベースとともにインストールされた Oracle HTTP Server が起動していることを確認します。

3. 各 Warehouse Builder Design Repository を指すデータベース・アクセス記述子 (DAD) を 1 つ追加します。各 DAD は、対象の Design Repository と同じ名前にする必要があります。
4. [Warehouse Builder Browser](#) を実行する各コンピュータでの Web ブラウザ設定の構成。これには、Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストに LOCALHOST を追加し、[第 2.5.2.2 項](#)の手順に従って Web ブラウザのキャッシュ管理を構成します。

## 1.2 ハードウェア要件

Warehouse Builder ソフトウェアをインストールするには、[表 1-1](#) の要件を満たす必要があります。これらの要件は、同じコンピュータにインストールする他の Oracle 製品の要件とあわせて必要となるものです。インストールする各 Oracle 製品のマニュアルを参照し、全体的なシステム要件を確認してください。

**表 1-1 Warehouse Builder ハードウェア要件**

オペレーティング・システム	ディスク領域	メモリー	ページ・ファイル・サイズ、TMP またはスワップ領域
Design コンポーネントおよび Runtime コンポーネント (Windows)	545MB	384MB	384MB
Design コンポーネントおよび Runtime コンポーネント (UNIX)	775MB	384MB	500MB

必要なメモリーは、実行されている機能とユーザー数によって増加します。

## 1.3 ソフトウェア要件

この項では、Warehouse Builder を正常にインストールするために必要なソフトウェアについて説明します。

### 1.3.1 オペレーティング・システムの要件

Oracle Database 10g をインストールする前に、使用しているオペレーティング・システムを対象とする『Oracle Database 10g インストール・ガイド』を参照し、必要なオペレーティング・システムのパッチをインストールしてください。

#### 1.3.1.1 サポートしているオペレーティング・システム・プラットフォーム

Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、次の 2 つのオペレーティング・システムを除いて、Oracle Database 10g と同じプラットフォームで利用できます。

- HP OpenVMS Alpha
- IBM OS/390 (MVS)

#### 1.3.1.2 UNIX オペレーティング・システム

UNIX プラットフォームの場合、Warehouse Builder は Oracle Database とともにインストールされるため、適用されるシステム要件も同じです。オペレーティング・システムの要件については、使用している UNIX プラットフォームを対象とする『Oracle Database 10g インストール・ガイド』を参照してください。

#### 1.3.1.3 Microsoft Windows オペレーティング・システム

Windows プラットフォームの場合、Warehouse Builder は Oracle Database とともにインストールすることもできますが、Design Client として指定されたコンピュータには、単独でインストールすることもできます。[表 1-2](#) に、Windows 動作環境のソフトウェア要件を記載します。

表 1-2 Windows 動作環境のソフトウェア要件

要件	詳細
システム・アーキテクチャ	32bit および 64bit  <b>注意:</b> Oracle では、32bit 版および 64bit 版の Warehouse Builder を提供しています。32bit 版の Warehouse Builder は、32bit 版のオペレーティング・システムで実行する必要があります。64bit 版の Warehouse Builder は、64bit 版のオペレーティング・システムで実行する必要があります。
オペレーティング・システム	Warehouse Builder は次のオペレーティング・システムで動作します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows NT Server 4.0、Windows NT Server Enterprise Edition 4.0、Terminal Server Edition (Service Pack 6a 以上)。Windows NT Workstation のサポートは廃止されました。</li> <li>■ Windows 2000 (Service Pack 1 以上)。Terminal Services と Windows 2000 MultiLanguage Edition (MLE) のすべての Edition。</li> <li>■ Windows Server 2003。</li> <li>■ Windows XP Professional。</li> </ul>

### 1.3.2 必要な製品

Warehouse Builder のアーキテクチャは、2-2 ページの図 2-1 に示すコンポーネントで構成されます。

この項では、Oracle Warehouse Builder のインストールに必要なコンポーネントについて説明します。Warehouse Builder の完全な稼働環境には、表 1-3 に示すソフトウェアおよびコンポーネントが含まれます。

表 1-3 完全な Warehouse Builder 環境に必要なソフトウェア

ソフトウェア (必須、オプション)	Warehouse Builder で使用されるコンポーネント
<p><b>Oracle Database (必須)</b></p> <p>サポートしている Oracle Database のバージョンは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Database 10g</li> <li>■ Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x)</li> <li>■ Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x)</li> </ul> <p>推奨されるインストールの構成は、2-2 ページの図 2-1 を参照してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Database サーバー (Oracle XML ツールキット・オプションを含む)</li> <li>■ Oracle Agent</li> <li>■ TNS Listener</li> <li>■ Oracle HTTP Listener と Apache Server (オプション)</li> </ul> <p>Oracle HTTP Listener および Apache Server は、ETL 設計メタデータの表示およびレポート作成に使用される、Warehouse Builder Design Browser のクライアント・バージョンを有効にするために必要です。</p>
<p><b>Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェア (必須)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Warehouse Builder Client</li> <li>■ Design Repository</li> <li>■ Runtime Repository</li> <li>■ Runtime Platform (RTP) Service</li> </ul>



表 1-3 完全な Warehouse Builder 環境に必要なソフトウェア (続き)

ソフトウェア (必須、オプション)	Warehouse Builder で使用されるコンポーネント
<p><a href="#">Oracle Application Server</a> (オプション)</p> <p>Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) または Oracle Application Server 10g (9.0.4)</p> <p>これは、Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser を、クライアント・バージョンとして実行するのではなく、Oracle Application Server に統合する場合のオプションです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle9iAS Portal</li> <li>■ Oracle HTTP Server</li> <li>■ XML Developer's Kit</li> <li>■ Oracle Container for Java (OC4J)</li> </ul>
<p><a href="#">Oracle Enterprise Manager</a> および <a href="#">Oracle Workflow</a> (オプション)</p> <p>これは、Oracle Enterprise Manager でジョブのスケジュールを行う場合、および Oracle Workflow でジョブ依存性の管理を行う場合のオプションです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Management Server (OMS)</li> <li>■ Client Console</li> <li>■ WEB Console (オプション)</li> </ul> <p>Warehouse Builder は、次の Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のバージョンと互換性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle9i Enterprise Manager リリース 1、リリース 2</li> <li>■ Oracle Enterprise Manager 10g リリース 1</li> <li>■ Oracle9i Workflow リリース 1、リリース 2</li> <li>■ Oracle Workflow 10g リリース 1</li> </ul>
<p><a href="#">Name and Address アダプタ</a> および <a href="#">データ・ライブラリ</a> (オプション)</p> <p>これは、Name and Address 演算子を使用して Name and Address データをクレンジングする場合のオプションです。</p>	<p>次のものを Oracle Technology Network に一覧されている認定ベンダーから入手する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ リージョン・データ・ライブラリ</li> <li>■ Name and Address アダプタ・ソフトウェア</li> </ul>

該当するインストール・ガイドに記載された手順に従って、すべての製品をインストールしてください。このガイドは、Oracle Warehouse Builder のインストール手順を説明するものであり、Warehouse Builder 以外のソフトウェアに関しては、インストールの際の一般的なガイドラインのみが記載されています。詳細は、各製品のインストール・ガイドを参照してください。

### 1.3.2.1 Oracle Database (必須)

次のガイドラインに従って、Warehouse Builder をインストールする前に Oracle Database をインストールします。

- Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、次の Oracle Database リリースで動作します。
  - Oracle Database 10g
  - Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x)
  - Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x)
- Warehouse Builder Design Repository、Runtime Repository、およびターゲット・スキーマを作成するマシンには、いずれも Oracle Database をインストールしておく必要があります。インストール構成の詳細は、2-2 ページの第 2.1.1 項「[Warehouse Builder の製品アーキテクチャ](#)」を参照してください。
- Design Client として使用するコンピュータには、Oracle Database をインストールせずに、Warehouse Builder のみをインストールできます。これらのコンピュータは、他のコンピュータのリポジトリにアクセスします。

- クライアント・バージョンの Warehouse Builder Design Browser または Runtime Audit Browser を使用する場合は、Oracle Database を Oracle XML Toolkit オプションとともにインストールします。
- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) のインストールでは、Oracle HTTP Server が自動的にインストールされなくなりました。HTTP Server のインストールの詳細は、使用しているオペレーティング・システムを対象とする『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド』を参照してください。
- クライアント・バージョンの Warehouse Builder Design Browser または Runtime Audit Browser を使用する場合は、Oracle Database サーバーが常駐するホストと同じホストに Oracle HTTP Server および Apache Server をインストールし、構成します。
- Oracle Database をインストールしたら、Warehouse Builder をインストールする前に、付録 A「Oracle Database の準備」を参照して、推奨される Oracle Database の初期化パラメータを確認します。

### 1.3.2.2 Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェア (必須)

Warehouse Builder ソフトウェアには、次のものがあります。

- **Warehouse Builder Client および Server:** このソフトウェアは Oracle Universal Installer によってインストールされ、Design Client、OMB Plus スクリプト・インタフェース、Runtime Platform Service、およびクライアント・バージョンの Design Browser と Runtime Audit Browser が含まれます。また、他のコンポーネントの作成に使用が必要がある Repository Assistant、Runtime Assistant および Browser Assistant も含まれます。
- **Design Repository および Runtime Repository:** Warehouse Builder ソフトウェアをインストールした後、Repository Assistant を使用して Design Repository を、Runtime Assistant を使用して Runtime Repository を作成する必要があります。Design Repository には、設計メタデータが保持されます。Runtime Repository には、ランタイム監査情報が保持されます。
- **Design Browser および Runtime Audit Browser:** Design Browser は、Design Repository 内のメタデータの表示およびレポート作成に使用します。Runtime Audit Browser は、Runtime Repository 内のランタイム監査結果の表示およびレポート作成に使用します。

**クライアント・バージョン:** どちらのブラウザも、Warehouse Builder とともに自動的にインストールされるクライアント・バージョンで利用できます。Oracle Application Server に依存せずに実行するための構成も簡単です。クライアント・バージョンの要件は、Oracle Database 10g を Oracle XML Toolkit オプションとともにインストールすること、Web ブラウザをインストールしていること、および Design Repository をホスティングするデータベース・インスタンス上で Oracle HTTP Server を実行していることです。

**Oracle Application Server との統合:** Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser は、オプションで Oracle Application Server に統合できます。この場合は、Oracle Application Server をインストールし、Browser Assistant を使用して Oracle Application Server のデータベースに Warehouse Builder Browser テーブルを作成する必要があります。

### 1.3.2.3 Oracle Application Server (オプション)

設計メタデータの表示およびレポート作成に使用する Warehouse Builder Design Browser、およびランタイム監査結果の表示に使用する Runtime Audit Browser は、オプションで Oracle Application Server に統合できます。この場合は、Oracle Application Server をインストールする必要があります。Warehouse Builder は、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) および Oracle Application Server 10g (9.0.4) との動作が保証されています。

必要な Oracle Application Server コンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Portal
- Oracle Container for J2EE (OC4J) - Warehouse Builder Runtime Audit Browser の場合のみ
- XML Developer's Kit

Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合するかどうかはオプションです。なぜなら、Warehouse Builder には、第 1.3.2.2 項で説明したクライアント・バージョンの Design Browser と Runtime Audit Browser も提供されているからです。これらのクライアント・バージョンの Design Browser と Runtime Audit Browser は、Warehouse Builder リポジトリのインストールに含まれており、必要なセットアップ手順もわずかです。Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合する場合の利点は、2-22 ページの第 2.5.3 項を参照してください。

---

**注意：** 通常、Oracle Application Server は Oracle Database サーバーと同じインスタンスにはインストールされません。ただし、Warehouse Builder Design Browser または Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合する場合は、ブラウザ・スキーマが Portal (Oracle Application Server) インスタンスに存在する必要があります。

---

### 1.3.2.4 Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow (オプション)

Oracle Enterprise Manager (OEM) はジョブのスケジュール、Oracle Workflow (OWF) はジョブ依存性の管理に使用できます。Oracle Enterprise Manager の Change Management Pack は、データ・ウェアハウスのライフ・サイクル・マネジメントにも使用されます。このパックは、Oracle Warehouse Builder Runtime Repository Assistant を実行するときに、Runtime Repository の一部としてインストールされます。

### 1.3.2.5 Name and Address アダプタおよびデータ・ライブラリ (オプション)

Warehouse Builder では、Name and Address 演算子を使用して、データの Name and Address のクレンジングを実行できます。Name and Address 演算子は、Name and Address のソース・データにあるエラーや不整合を識別し、修正します。この演算子は、入力データを、Name and Address のクレンジング・ソフトウェアのサードパーティ・ベンダーから提供されたデータ・ライブラリと比較し、不整合を識別します。

Name and Address 演算子を使用して Name and Address データをクレンジングする場合は、次の製品が必要になります。

- Warehouse Builder Name and Address アダプタ・ソフトウェア
- Name and Address 演算子がデータ・レコードの比較および修正に使用するリージョン・データ・ライブラリ。

Name and Address のクレンジングの詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## 1.4 共存 : ORACLE\_HOME に関する考慮事項

Oracle ホーム・ディレクトリとは、Oracle コンポーネントが動作する環境です。この環境には、インストールしたコンポーネント・ファイルのロケーション、インストールしたコンポーネントのバイナリ・ファイルを指す PATH 変数、レジストリ・エントリ、サービス名およびプログラム・グループが含まれます。Oracle ホームには、ユーザーがインストール時にホームのロケーションとともに指定した名前も関連付けられます。

この項では、1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存に関する情報と、複数の Oracle 製品を 1 台のコンピュータにインストールする場合のガイドラインを示します。

- Warehouse Builder は、Oracle Database や他の Oracle 製品とは別の Oracle ホーム (ORACLE\_HOME) ディレクトリにインストールします。このマニュアルでは、Warehouse Builder の Oracle ホーム・ディレクトリを OWB\_ORACLE\_HOME と記述します。
- ORACLE\_HOME は、Oracle Database がインストールされるルート・ディレクトリです。
- OWB\_ORACLE\_HOME は、Warehouse Builder がインストールされるルート・ディレクトリです。

UNIX 用に `ORACLE_HOME` 環境変数を設定するには、次のコマンドを使用します。

- C シェルの場合: `setenv ORACLE_HOME full_path`
- Korn シェルの場合: `export ORACLE_HOME=full_path`
- Bourne シェルの場合: `ORACLE_HOME=full_path; export ORACLE_HOME`

これらの例の `full_path` は、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) のインストール先のパスです。

UNIX 用に `LD_LIBRARY_PATH` 環境変数を設定するには、次のコマンドを使用します。

- C シェルの場合: `setenv LD_LIBRARY_PATH $ORACLE_HOME/lib`
- Korn シェルの場合: `export LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib`
- Bourne シェルの場合: `LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib; export LD_LIBRARY_PATH`

HP-UX 用に `SHLIB_PATH` 環境変数を設定するには、次のコマンドを使用します。

- C シェルの場合: `setenv SHLIB_PATH $ORACLE_HOME/lib32`
- Korn シェルの場合: `export SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32`
- Bourne シェルの場合: `SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32; export LD_LIBRARY_PATH`

## 1.5 インストール前のチェックリスト

この項では、インストール前に確認する必要がある補足事項を示します。

- ❑ Warehouse Builder をインストールする前に、『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』をお読みください。『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』は、Oracle Warehouse Builder CD-ROM に収録されています。最新のリリース・ノートおよびドキュメント補足資料は、次の Oracle Technology Network Japan でも入手できます。  
<http://otn.oracle.co.jp/>
- ❑ Oracle Warehouse Builder のみをインストールするための Oracle ホーム・ディレクトリを選択します。このガイドでは、このホーム・ディレクトリを `OWB_ORACLE_HOME` と記載しています。
- ❑ Windows NT、Windows 2000、Windows XP Professional を実行している場合は、ローカル・コンピュータの管理者グループのメンバーとしてシステムにログインしていることを確認します。
- ❑ UNIX では、Oracle Universal Installer の起動時に、root ユーザーとしてログインしていないことを確認します。root ユーザーとしてログインした場合は、Oracle Warehouse Builder の管理に必要な権限は root ユーザーのみに与えられます。
- ❑ 次の環境変数が 1,024 文字以内であることを確認します。この制限を超えると、インストール中に「環境変数が長すぎます」のようなエラーが生成されることがあります。  
`PATH`  
`CLASSPATH`  
`LD_LIBRARY_PATH` (UNIX のみ)  
`SHLIB_PATH` (HP-UX のみ)
- ❑ 他の開いているアプリケーションをすべて閉じます。
- ❑ Warehouse Builder を削除しても、パス `OWB_ORACLE_HOME\owb\j2ee\owbb` が残っている場合は、Warehouse Builder を再インストールする前に、`owbb` ディレクトリを削除します。

## 1.6 Oracle Universal Installer の概要

Oracle Warehouse Builder では、Oracle Universal Installer を使用して、コンポーネントがインストールされ、環境変数が構成されます。インストーラは、インストール手順を順に指示します。

インストーラには、次のタスクを実行する機能があります。

- 製品のインストール・オプションの表示
- 事前設定された環境変数および構成設定の検出
- インストール中の環境変数および構成の設定
- 製品の削除

### 1.6.1 インベントリ・ディレクトリ

マシン上で最初にインストーラを実行すると、Inventory ディレクトリまたは oraInventory ディレクトリが作成されます。インベントリ・ディレクトリには、インストーラによってマシンにインストールされた製品の記録とともに、その他のインストール情報も格納されます。以前に Oracle 製品をインストールしたことがある場合は、インベントリ・ディレクトリがすでに存在する場合があります。

- インベントリ・ディレクトリやその内容を削除したり、手動で変更したりしないでください。そのようなことをすると、インストーラでは、マシンにインストールされた製品を検索できなくなります。
- Windows の場合、Inventory ディレクトリのデフォルトのロケーションは `¥Program Files¥Oracle¥Inventory` になります。UNIX オペレーティング・システムの場合のインベントリ・ディレクトリのデフォルトのロケーションは、使用している UNIX プラットフォームを対象とする『Oracle Database 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

### 1.6.2 Oracle Universal Installer の起動

次の各手順に従って Oracle Universal Installer を起動し、Oracle Warehouse Builder をインストールします。

#### 1.6.2.1 Windows ユーザーの場合

Oracle Universal Installer を起動するには：

1. Oracle Warehouse Builder CD-ROM を挿入します。
2. 使用しているマシンに自動実行機能がない場合は、CD-ROM のルート・ディレクトリで実行可能ファイル `setup.exe` を見つけます。`setup.exe` プログラムを使用して、インストーラを起動します。
3. 使用しているマシンに自動実行機能がある場合は、自動実行ウィンドウで Oracle Warehouse Builder のインストールが自動的に開始されます。

以降の手順は、第 2 章「Warehouse Builder のインストール」を参照してください。

#### 1.6.2.2 UNIX ユーザーの場合

---

---

**注意：** root アカウントへのアクセス権が必要です。

---

---

動作環境で CD-ROM の自動マウントがサポートされていない場合は、Oracle Warehouse Builder のインストール CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM をマウントまたはアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM は、必ずアンマウントした後で、ドライブから取り出すようにしてください。手順は、付録 B「CD-ROM のマウント」を参照してください。

### 1.6.2.3 Oracle Universal Installer の実行

付録 B 「CD-ROM のマウント」 の手順に従ってインストール CD-ROM をマウントした後、CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行できます。CD-ROM ディレクトリが現行のディレクトリとなっている状態では、インストーラを実行しないでください。この状態でインストーラを実行すると、指示があっても次の CD-ROM をアンマウントできなくなります。

---

---

**注意：** Oracle Universal Installer の起動時には、root ユーザーとしてログインしていないことを確認します。root ユーザーとしてログインした場合は、Oracle Warehouse Builder を管理する権限が root ユーザーのみに与えられます。

---

---

#### CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行するには：

1. oracle ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドをプロンプトで入力して、インストーラを CD マウント・ポイントから起動します。

```
cd mount_point
./runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動します。これにより、Oracle Warehouse Builder のインストールが実行されます。以降の手順は、第 2 章 「Warehouse Builder のインストール」 を参照してください。

---

---

## Warehouse Builder のインストール

この章では、Warehouse Builder コンポーネントをインストールする手順を説明します。第 1.1 項では手順の概略を説明しましたが、この章では、インストール全体について手順を詳細に説明します。

---

---

**注意：** Oracle Warehouse Builder を前バージョンから 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする場合は、この章で説明するインストール手順を実行する前に、第 3 章「10g リリース 1 (10.1) へのアップグレードとデータの移行」をお読みください。

---

---

この章では、次の項目について説明します。

- Warehouse Builder のアーキテクチャとコンポーネントの概要 (2-2 ページ)
  - SYSDBA ユーザーへのアクセス権 (2-9 ページ)
- ステップ 1. ターゲット・スキーマ・ホストへの Warehouse Builder のインストール (2-9 ページ)
- ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール (2-9 ページ)
- ステップ 3. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール (2-12 ページ)
- ステップ 4. Design Browser 環境および Runtime Audit Browser 環境の構成 (2-17 ページ)
- ステップ 5. (オプション) サードパーティの Name and Address データのインストール (2-32 ページ)



## 2.1 Warehouse Builder のアーキテクチャとコンポーネントの概要

この項では、Warehouse Builder の製品アーキテクチャについて説明し、各種オペレーティング・システムでの一般的なインストール例を示します。また、Oracle Universal Installer によってインストールされるコマンドと、それらのコマンドで開始および停止できるコンポーネントの一覧も示します。

### 2.1.1 Warehouse Builder の製品アーキテクチャ

Warehouse Builder のアーキテクチャは、図 2-1 に示すコンポーネントで構成されます。

図 2-1 Warehouse Builder のアーキテクチャ

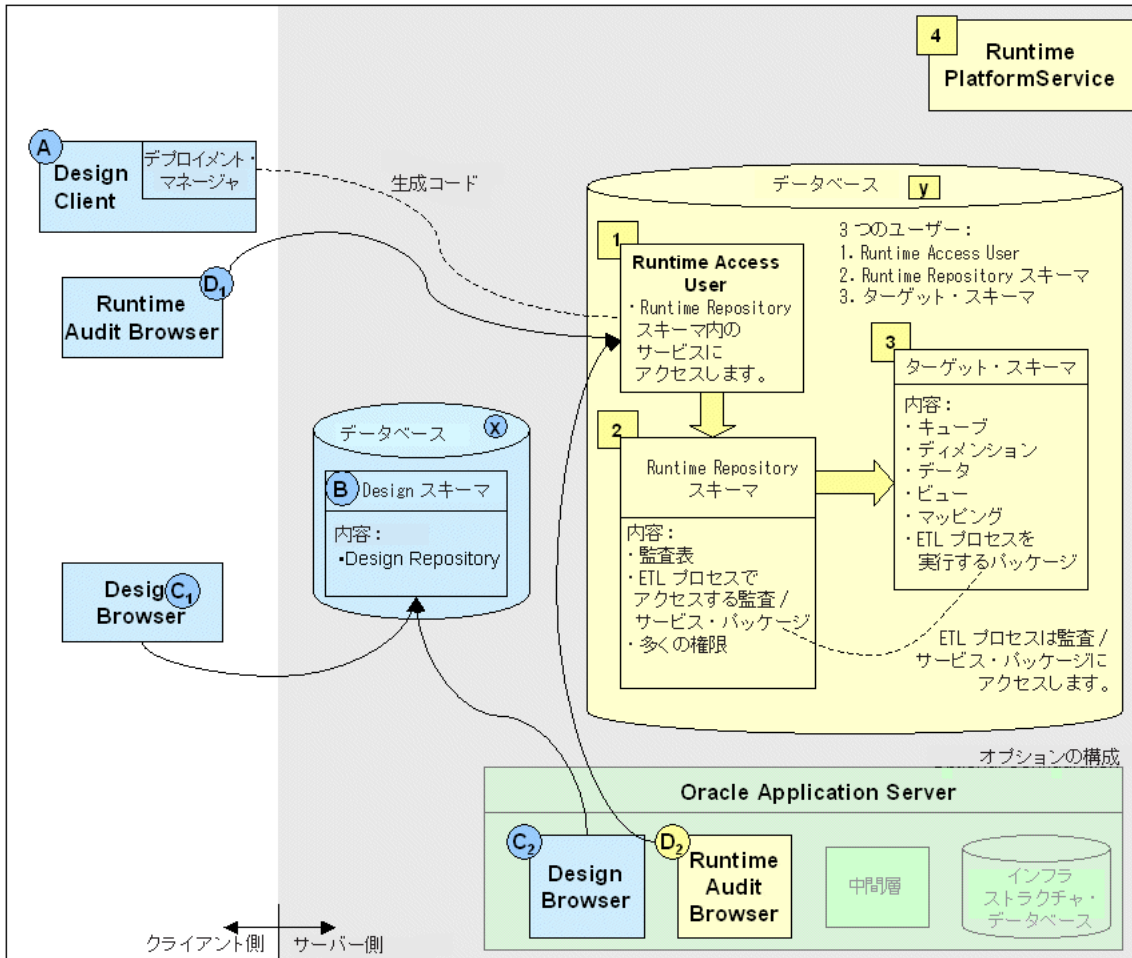


図 2-1 には、Warehouse Builder のアーキテクチャについて、次のポイントが示されています。

- Design Client とデプロイメント・マネージャ:** 「A」というラベルの四角形は、Design Client を表しています。Design Client は、ソースの定義とターゲットおよび ETL プロセスの設計に使用するグラフィカル・インタフェースを提供します。Design Client には、デプロイメント・マネージャが含まれます。デプロイメント・マネージャで生成されたコードは、Oracle Database サーバーの Runtime Access User (ラベル「1」) に渡されます。Design Client は Oracle Database に接続します。Warehouse Builder は、Design Client として指定されたコンピュータに (台数制限なし)、Oracle Database なしでインストールできます。



- **Design Repository スキーマ、Design Repository、Design Browser:** Design Repository スキーマが含まれるデータベース・インスタンス (ラベル「X」) は通常、数台の Design Client (ラベル「A」) で共有されるサーバーにインストールします。Design Repository スキーマ (ラベル「B」) には Design Repository があり、設計メタデータを構成するすべてのソース、ターゲットおよび ETL プロセスのメタデータ定義が格納されます。Design Repository の内容は、Design Browser (ラベル「C<sub>1</sub>」または「C<sub>2</sub>」) を通して、読取り専用モードでアクセスできます。
- **Oracle Database のランタイム・インスタンス:** このインスタンスは通常、サーバーにインストールします。ターゲット・データベースには、Runtime Access User (ラベル「1」)、Runtime Repository スキーマ (ラベル「2」)、ターゲット・スキーマ (ラベル「3」) という、少なくとも 3 つのユーザーが作成されます。  
  
Design Repository および Runtime Repository は、同じデータベースにも、別々のデータベースにもインストールできます。
- **Runtime Access User:** Runtime Repository スキーマ (ラベル「2」) には多数のシステム権限が要求されるため、Runtime Access User (ラベル「1」) は、不正使用を防ぐセキュリティ手段として使用されます。Runtime Access User は権限を持たない個別のユーザーですが、これを介することで、Runtime Repository へのアクセスが可能になります。Runtime Access User は、Runtime Repository スキーマにアクセスして ETL プロセスの配布と実行を行います。
- **Runtime Repository スキーマ:** Runtime Repository スキーマ (ラベル「2」) は、ターゲット・スキーマ (ラベル「3」) でアクセスされる監査表および監査 / サービス・パッケージを所有します。Runtime Repository スキーマは、ターゲット・スキーマ内の各種ターゲットとの接続を管理する、システム内の中心的なユーザーです。
- **Runtime Audit Browser:** Runtime Audit Browser (ラベル「D<sub>1</sub>」または「D<sub>2</sub>」) も、Runtime Repository スキーマ (ラベル「2」) と通信を行います。これにより、ユーザーは ETL ターゲットのロードやリフレッシュを行うジョブの実行時に取得した監査情報およびエラー情報について、レポートを実行できます。
- **ターゲット・スキーマ:** ターゲット・スキーマ (ラベル「3」) は、データのロード先となる実際のターゲットであり、ターゲット・データのほか、キューブ、ディメンション、ビュー、マッピングなどのデータ・オブジェクトを含みます。ターゲット・スキーマには、Runtime Repository スキーマ (ラベル「2」) 内の監査 / サービス・パッケージにアクセスする ETL プロセスを実行するパッケージが含まれます。複数のターゲットを 1 つの Runtime Repository に関連付けることができます。実行情報や配布情報など、ターゲットに関連するすべての情報が、Runtime Repository に格納されます。
- **Runtime Platform Service:** Runtime Platform Service (ラベル「4」) は、ネイティブ実行の管理、およびリモート実行用の Oracle Enterprise Manager へのコールの管理を行います。また、Warehouse Builder の Name and Address コンポーネントも保持します。ランタイム環境で何らかのアクティビティを実行するには、これをアクティブにし、ターゲット・データベースをホスティングするマシンにインストールしておく必要があります。Runtime Platform Service は、3 つのユーザーをホスティングするサーバー側の Oracle Database インスタンスとは別に実行されます。
- **Oracle Application Server 内の Design Browser と Runtime Audit Browser:** Design Browser や Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合する、オプションのブラウザ構成も、他のコンポーネントとは別に描かれています。Application Server パーティションの Design Browser (ラベル「C<sub>2</sub>」) と Runtime Audit Browser (ラベル「D<sub>2</sub>」) は、中間層およびインフラストラクチャ・データベースとともに、Oracle Application Server にインストールされます。この構成の利点は、[第 2.5.3.1 項「Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由」](#) を参照してください。

## 2.1.2 一般的なインストール例

Warehouse Builder ソフトウェアは、Runtime Oracle Database インスタンスをホスティングするコンピュータにインストールする必要があります。

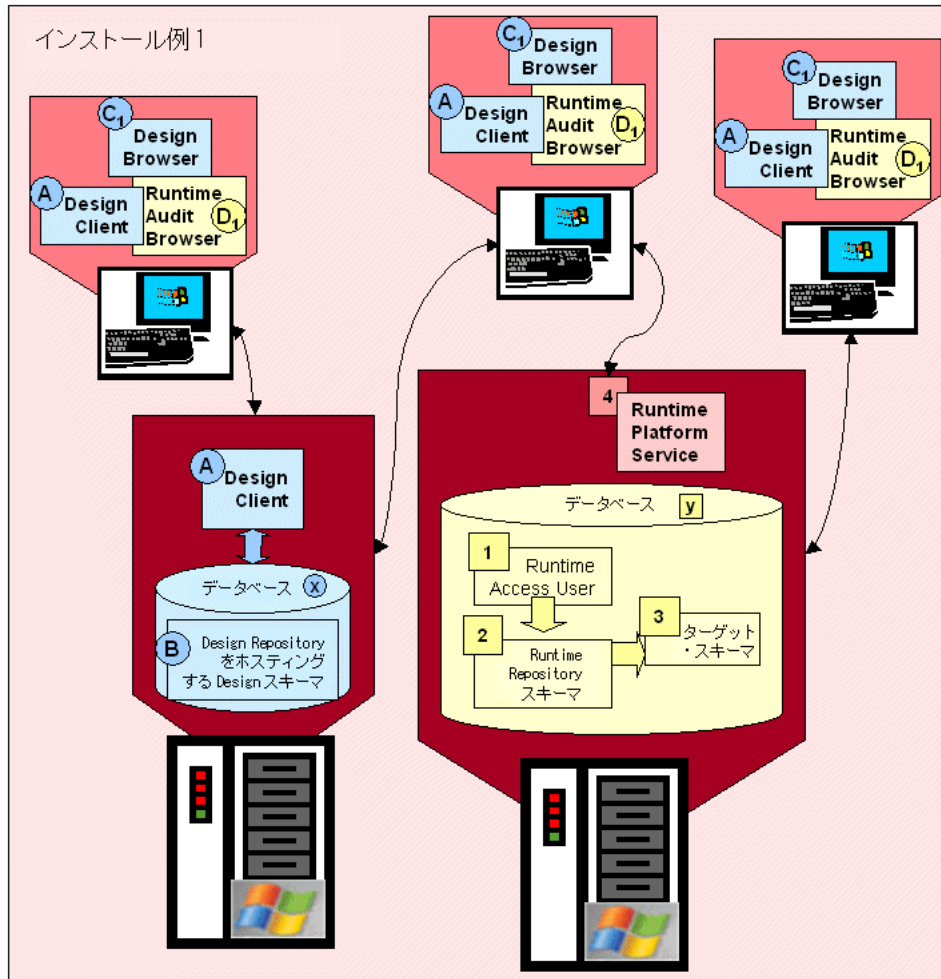
また、Warehouse Builder Design の実行に使用するすべてのマシンにもインストールします。この項では、最も一般的な 3 つのインストール例を紹介します。

### 2.1.2.1 Microsoft Windows サーバーとオプションのクライアントを使用した例

図 2-2 は、Microsoft Windows オペレーティング・システムで実行されるコンピュータ・グループのインストール状況を表したものです。この例では、サーバーとして指定された Microsoft Windows コンピュータのそれぞれが、Oracle Database と完全な Warehouse Builder インストール構成の両方をホスティングしています。Oracle Database のインスタンスをホスティングするサーバーの Warehouse Builder 専用の Oracle ホーム・ディレクトリに、Warehouse Builder 製品全体をインストールするには、この章で説明する手順に従ってください。このサーバーには、Design Repository と Runtime Repository、および 1 つ以上のターゲット・スキーマもインストールします。ほとんどのインストールでは、この例のように設計環境とランタイム環境とを分けますが、必須ではありません。

直接サーバー上で設計作業を行うことも、別の Windows コンピュータを Design Client として指定することもできます。複数の Design Client が必要な場合は、第 2.2 項で説明する手順に従って、Design Client ごとに Warehouse Builder をインストールしてください。リポジトリを追加インストールする必要はありません。クライアントで Design Browser または Runtime Audit Browser を使用するには、第 2.5 項で説明する構成手順に従ってください。Design Browser と Runtime Audit Browser は、サーバー上の Design Repository と Runtime Repository にアクセスします。

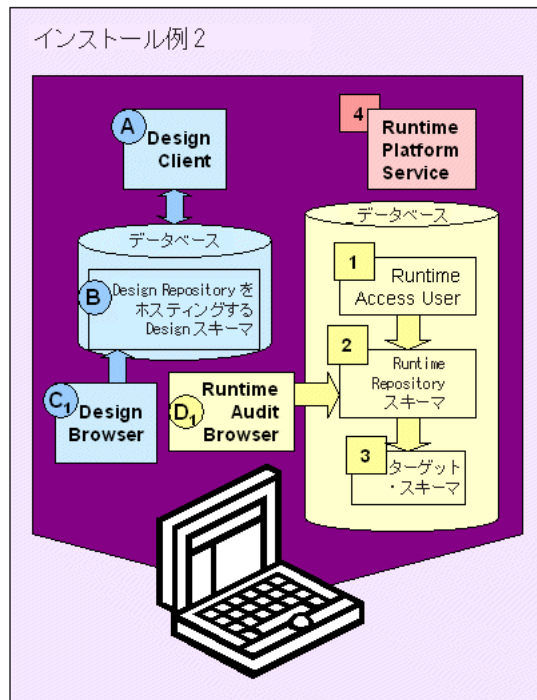
図 2-2 Microsoft Windows サーバーとオプションのクライアントを使用した例



### 2.1.2.2 コンサルタントの使用形態

図 2-3 は、1 台のラップトップ・コンピュータにインストールした状態を表したものです。この例は、コンサルタントが広く利用している状況です。コンサルタントはクライアント・サイトで Warehouse Builder を使用し、外出時に携帯するハードウェアは最小限に抑えています。この例では、Oracle Database のインスタンスが、コンピュータですでにホスティングされています。Warehouse Builder 専用の個別の Oracle ホーム・ディレクトリ (`OWB_ORACLE_HOME`) に、Warehouse Builder 製品一式をインストールするには、この章で説明する手順に従ってください。このコンピュータには、Design Repository と Runtime Repository の両方、および 1 つ以上のターゲット・スキーマもインストールします。このコンピュータは、サーバーと Design Client の両方の機能を果たします。

図 2-3 コンサルタントの使用形態：1 台のコンピュータを使用

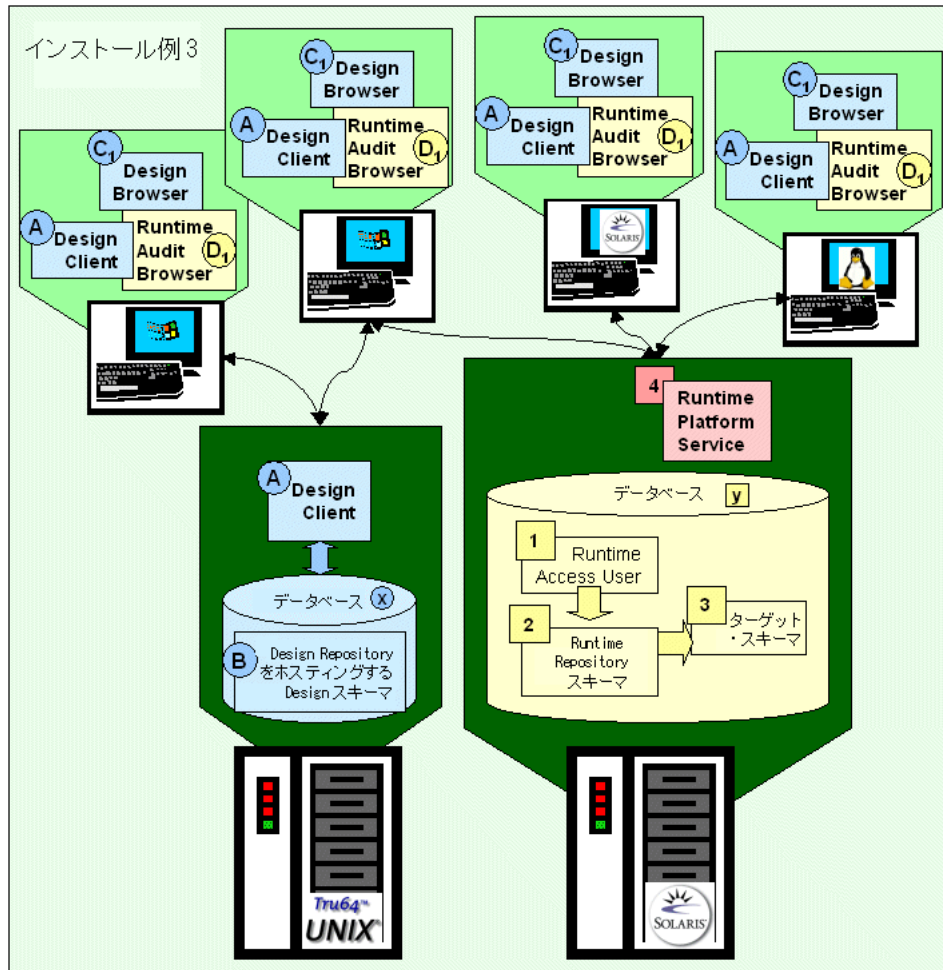


### 2.1.2.3 UNIX サーバーと Microsoft Windows クライアントを使用した例

図 2-4 は、オペレーティング・システムが混在する、3 つ目のインストール例を表したものです。この例では、Tru64 などの UNIX オペレーティング・システムで実行されるコンピュータが、Oracle Database のインスタンスをホスティングしています。このサーバーに Warehouse Builder 製品一式をインストールし、Warehouse Builder 専用の個別の Oracle ホーム・ディレクトリ (`OWB_ORACLE_HOME`) に確実にインストールするには、この章で説明する手順に従ってください。このコンピュータには、Design Repository と Runtime Repository、および 1 つ以上のターゲット・スキーマもインストールします。

直接サーバー上で設計作業を行うことも、Windows コンピュータを Design Client として指定することもできます。複数の Design Client が必要な場合は、第 2.2 項で説明する手順に従って、Design Client ごとに Warehouse Builder をインストールしてください。リポジトリを追加インストールする必要はありません。クライアントで Design Browser または Runtime Audit Browser を使用するには、第 2.5 項で説明する構成手順に従ってください。Design Browser と Runtime Audit Browser は、サーバー上の Design Repository と Runtime Repository にアクセスします。

図 2-4 UNIX サーバーと Microsoft Windows クライアントを使用した例



### 2.1.3 Oracle Universal Installer でインストールされるコンポーネント

Oracle Warehouse Builder の CD-ROM からは、クライアント側とサーバー側の両方のソフトウェアが同時にインストールされます。インストールが終了したら、次の Warehouse Builder コンポーネントを起動できます。ここでは、Microsoft Windows の「スタート」メニューに表示される順にコンポーネントを解説します。

**OWB Browser Assistant** Browser Assistant を使用すると、Design Browser および Runtime Audit Browser (図 2-1 の「C<sub>2</sub>」および「D<sub>2</sub>」) を、Oracle Application Server に統合できます。統合の利点は、第 2.5.3.1 項「Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由」を参照してください。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Browser Assistant」を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`browserasst.sh` を実行します。

**OWB Client** Warehouse Builder Client は、Design Client (図 2-1 の「A」)として、ソースの定義とターゲットおよび ETL プロセスの設計に使用するグラフィカル・インタフェースを提供します。Design Client を使用するには、Design Repository を終了しておく必要があります。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Client」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`owbclient.sh` を実行します。

**OWB Design Browser** このコマンドを実行すると、クライアント・バージョンの Warehouse Builder Design Browser (図 2-1 の「C<sub>1</sub>」) を起動できます。この Design Browser では、メタデータの表示、Web レポートの実行、およびメタデータに関する系統分析および影響分析の実行ができます。

クライアント・バージョンの Design Browser は、Oracle Application Server には依存せず、通常のインストールで自動的にインストールされます。必要な構成作業もほとんどありません。Design Browser を起動するには、OC4J インスタンスを実行している必要があります。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Design Browser」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`openDB.sh` を実行します。

**OWB MDL File Upgrade Utility** 以前のバージョンの Warehouse Builder から現行バージョンにメタデータをアップグレードできます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB MDL File Upgrade Utility」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`mdlconvertui.sh` を実行します。

**OWB OMB Plus** Oracle Metabase (OMB) Plus スクリプト・ユーティリティを起動できます。OMB Plus の詳細は、『Oracle Warehouse Builder スクリプト・リファレンス』を参照してください。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB OMB Plus」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`OMBplus.sh` を実行します。

**OWB Repository Assistant** Repository Assistant を使用すると、データベースに Warehouse Builder Design Repository (図 2-1 の「B」) を作成して、ソース、ターゲットおよび ETL プロセスを記述するメタデータ定義を格納できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Repository Assistant」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`reposinst.sh` を実行します。

**OWB Runtime Assistant** Runtime Assistant を使用すると、Runtime Repository スキーマ (図 2-1 の「2」)、Runtime Access User (図 2-1 の「1」) およびターゲット・スキーマ (図 2-1 の「3」) を作成できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Runtime Assistant」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`runtimeinst.sh` を実行します。



**OWB Runtime Audit Browser** このコマンドを実行すると、クライアント・バージョンの Warehouse Builder Runtime Audit Browser (図 2-1 の「D<sub>1</sub>」) が起動します。Runtime Audit Browser では、ETL ターゲットのロードおよびリフレッシュを行うジョブの実行時に取得した 監査情報およびエラー情報について、レポートを実行できます。

クライアント・バージョンの Runtime Audit Browser は、Oracle Application Server には依存せず、通常のインストールで自動的にインストールされます。必要な構成作業もほとんどありません。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Runtime Audit Browser」を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`openRAB.sh` を実行します。

Runtime Audit Browser を起動するには、OC4J インスタンスを実行している必要があります。手順は、2-8 ページの「Start OWB OC4J Instance」を参照してください。

**Start Local RTP Service** デスクトップ・マシンでローカルの Runtime Platform Service (図 2-1 の「4」) を起動できます。このコンポーネントは、サーバー側のソフトウェアがインストールされていて、Runtime Platform Service がアクティブでない場合に使用できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Start Local RTP Service」を選択し、Runtime Repository へのログイン情報を入力します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`local_service_login.sh -startup OWB_ORACLE_HOME` を実行します。

**Start OWB OC4J Instance** OC4J インスタンスを起動して、クライアント・バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser を実行できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Start OWB OC4J Instance」を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`startOwbbInst.sh` を実行します。

**Stop Local RTP Service** デスクトップ・マシンで実行しているローカルの Runtime Platform Service を停止できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Stop Local RTP Service」を選択し、Runtime Repository へのログイン情報を入力します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`local_service_login.sh -closedown OWB_ORACLE_HOME` を実行します。

**Stop OWB OC4J Instance** クライアント・バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の実行に必要な OC4J インスタンスを停止できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Stop OWB OC4J Instance」を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`stopOWBBInst.sh` を実行します。

## 2.1.4 SYSDBA ユーザーへのアクセス権

Warehouse Builder をインストールするには、SYSDBA 権限を持つユーザーへのアクセス権が事前に必要です。これは、Warehouse Builder の各 Assistant において、Design Repository または Runtime Repository のコンポーネントをインストールするときに、SYSDBA 接続情報を入力する必要があるためです。

Warehouse Builder の Oracle Database パラメータ設定の詳細は、付録 A 「Oracle Database の準備」と Oracle Database Server のドキュメントを参照してください。SYSDBA 権限を持つユーザーへのアクセスで問題が発生した場合は、付録 E 「診断およびデバッグ」を参照してください。

## 2.2 ターゲット・スキーマ・ホストへの Warehouse Builder のインストール

Oracle Warehouse Builder の CD-ROM を挿入し、Oracle Universal Installer の指示に従って Warehouse Builder ソフトウェアをインストールします。UNIX プラットフォームに CD-ROM をマウントする手順は、付録 B 「CD-ROM のマウント」を参照してください。Oracle Universal Installer の詳細は、第 1.6 項 「Oracle Universal Installer の概要」を参照してください。

次の点を考慮しながら、ターゲット・スキーマのデータベース・インスタンスが存在するコンピュータ上で、専用の Oracle ホーム・ディレクトリに Warehouse Builder をインストールします。

- まず、ターゲット・スキーマのホストとなる Oracle Database インスタンスが現在あるいは今後存在するコンピュータに、Warehouse Builder をインストールします。Oracle Database は、次のステップで Design Repository および Runtime Repository をインストールするときに必要となります。
- その後、Design Client として使用する予定のコンピュータに（台数制限なし）、Warehouse Builder をインストールできます。このインストールに、Oracle Database インスタンスは不要です。これらのコンピュータは、他のコンピュータのリポジトリにアクセスします。
- Warehouse Builder は、他の Oracle 製品とは別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。このマニュアルでは、以降、このディレクトリを `OWB_ORACLE_HOME` と呼びます。
- UNIX 動作環境でインストールを行う場合は、Oracle Database の `ORACLE_HOME` と同じオペレーティング・システム・ユーザーに `OWB_ORACLE_HOME` をインストールしてください。

## 2.3 Repository Assistant での Design Repository のインストール

このステップでは、Warehouse Builder Design Repository (2-2 ページの図 2-1 の「B」) をインストールします。Warehouse Builder Design Client にログインするには、データベースのスキーマ内に新しい Warehouse Builder Design Repository を作成する必要があります。Warehouse Builder Design Repository には、設計メタデータを構成するすべてのソース、ターゲットおよび ETL プロセスのメタデータ定義が格納されます。Warehouse Builder Repository Assistant を使用して、新しい Design Repository を作成します。

このインストールによって、Design Repository 所有者に Create Public Database Link 権限が自動的に付与されます。

新しい Design Repository は、新規または既存のスキーマに作成できます。Repository Assistant では、既存の Warehouse Builder Design Repository を削除することもできます。

**Warehouse Builder Design Repository をインストールするには：**

1. Warehouse Builder Repository Assistant を起動します。
  - **Windows の場合：**「スタート」→「プログラム」→「OWB\_ORACLE\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Repository Assistant」を選択します。

- **UNIX の場合:** シェルを起動し、次のロケーションに移動します。  
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。  
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`  
 次に `reposinst.sh` を実行します。
2. 「OWB Repository Assistant: ようこそ」 ページでインストール手順を確認し、「次へ」をクリックします。
  3. 「OWB Repository Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」 ページで、Warehouse Builder Design Repository オブジェクトをインストールするデータベースの接続情報を入力します。
    - **ユーザー名:** SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Warehouse Builder Design Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。一部のシステム権限への付与には、SYSDBA 権限が必要です。Oracle Database パラメータの設定の詳細は、付録 A 「Oracle Database の準備」と付録 E 「診断およびデバッグ」を参照してください。
    - **パスワード:** SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。
    - **ホスト名:** Design Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。
    - **ポート番号:** Oracle Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするとき使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。
    - **Oracle サービス名:** Oracle Database サービスの名前。
 「次へ」をクリックします。
  4. 「OWB Repository Assistant: 作成または削除」 ページで、「新規 Warehouse Builder リポジトリを作成」を選択します（初回インストールの場合）。初回インストールでない場合は、新しい Warehouse Builder Design Repository の作成、既存の Warehouse Builder Design Repository の削除、言語の追加によるオブジェクト翻訳のサポートのいずれかを選択します。  
 「次へ」をクリックします。
  5. 「OWB Repository Assistant: 新規または既存ユーザー」 ページで、「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します（ユーザーが存在しない場合）。ユーザーが存在する場合は、新しいスキーマの作成、または既存のユーザー・スキーマへの Design Repository のインストールのいずれかを選択します。  
 「次へ」をクリックします。
  6. 「OWB Repository Assistant: ユーザー名およびパスワード（新規または既存）」 ページで、新しいスキーマまたは既存のスキーマの「ユーザー名」と「パスワード」を指定します。Warehouse Builder Design Repository にログインする際は、ここで指定したユーザー名とパスワードを使用します。  
 このステップでは、追加ユーザーではなく、設計リポジトリ所有者のスキーマを作成しません。追加ユーザーは、Oracle Warehouse Builder のセキュリティ機能を使用して作成できます。この機能による追加ユーザーの作成方法の詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。  
 「次へ」をクリックします。
  7. 使用しているマシンが、推奨されるインストール・パラメータを満たさない場合は、「データベース構成警告」が表示されることがあります。  
 「OK」をクリックして先に進みます。  
 インストールを中止します。推奨されるパラメータの詳細は、付録 A 「Oracle Database の準備」を参照してください。  
 データベースの準備ができれば、インストールを実行します。



8. 「OWB Repository Assistant: 表領域」 ページで、Design Repository データベースで使用可能な表領域のうち、次の表領域を選択します。
- **データの表領域を選択します。** :データの表領域には、クライアントのメタデータを格納するために Warehouse Builder で作成される表が格納されます。設計メタデータで系統影響分析のレポートを実行する場合は、ローカル管理されていて Segment Management 句が AUTO に設定されている表領域を選択しないでください。デフォルトは USERS です (推奨: 50MB 以上)。
  - **索引の表領域を選択します。** :索引のデフォルト表領域には、Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるために、そのリレーショナル構造のほかに作成される索引が格納されます。デフォルトは INDX です (推奨: 50MB 以上)。
  - **一時データの表領域を選択します。** :一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。デフォルトは TEMP です。
  - **スナップショットのデフォルトの表領域を選択します。** :スナップショットのデフォルト表領域には、メタデータ変更管理のために作成するメタデータのスナップショットが格納されます。メタデータのスナップショットによって、Design Repository にある選択オブジェクトの、スナップショット作成時の情報が取得されます。メタデータのスナップショットは、取得する情報の種類によってサイズが変わります (スナップショット機能を使用しない場合の推奨は 5MB 以上。使用する場合の推奨は 60MB 以上)。メタデータのスナップショットの詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「次へ」をクリックします。

9. 「OWB Repository Assistant: 言語の定義」 ページで、複数言語サポート (MLS) オプションを選択します。複数言語サポートを選択すると、各オブジェクトに複数の論理名や記述を格納できます。また、1つの基本言語と1つ以上の表示言語を選択する必要があります。

言語の選択は、後から取り消すことはできません。言語はいつでもリストに追加できます。これには、Repository Assistant を再び実行し、「OWB Repository Assistant: 作成または削除」 ページで「オブジェクト変換をサポートする言語を追加します。」を選択します。

各言語の国際標準 ID は、F-1 ページの付録 F 「Warehouse Builder のサポート言語」を参照してください。

- **MLS ベース言語の選択** :この言語は、Design Repository のインストール時のみ設定でき、Warehouse Builder でデータを格納する際に使用されます。選択した基本言語の文字セットが Oracle Database でサポートされていることを確認してください。
- **MLS その他の言語の選択** :ここで選択する言語は、Warehouse Builder を使用する際に表示言語として使用できます。表示言語は、Warehouse Builder オブジェクトのユーザー定義による論理名や説明を編集および表示するときに使用できる言語です。複数の表示言語をインストールすると、各オブジェクトに、複数のラベルや説明を格納できます (各言語で1つずつ)。

インストールする表示言語を選択するには、「使用可能な言語の選択」フィールドから言語を選択し、矢印をクリックしてその言語を「選択した言語」フィールドに移動します。複数の言語を同時に選択するには、[Ctrl] キーまたは [Shift] キーを押しながら選択します。

Warehouse Builder で使用する表示言語は、インストールした言語の中から選択できます。使用する表示言語の設定または変更の手順は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Repository Assistant: サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

## 2.4 Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール

メタデータ定義を配布するには、事前にランタイム環境をインストールする必要があります。ランタイム環境に使用する Oracle Database インスタンスをホスティングし、Warehouse Builder ソフトウェアがすでにインストールされているコンピュータで Runtime Assistant を実行します。

このステップでは、まず Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository スキーマ (2-2 ページの図 2-1 の「2」) と Runtime Access User (2-2 ページの図 2-1 の「1」) をインストールします。次に Runtime Assistant を使用して、ターゲット・スキーマ (2-2 ページの図 2-1 の「3」) をインストールします。

---

### 注意：

- Warehouse Builder Runtime をインストールするには、Oracle Database が稼働中であり、Oracle JVM がインストールされ、初期化パラメータ JAVA\_POOL\_SIZE が最低 20MB に設定されている必要があります。
  - 既存のリポジトリ・ユーザーを削除する場合は、まず Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository 自体を削除する必要があります。その後、SQL\*Plus を使用してユーザーを削除できます。
- 

Warehouse Builder Runtime Assistant によって、次のコンポーネントがインストールされます。

- **owbrt\_sys:** このユーザーには、ランタイム・ソフトウェアと Runtime Platform Service の、データベース上のロケーションが格納されます。Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内のインスタンスごとの Runtime Platform Service のロケーションが、このユーザーに格納されます。
- **Name and Address Server のパッケージ:** Name and Address のクレンジング機能を使用する場合は、ここでインストールされる Name and Address Server のパッケージによって、ETL プロセスの一環としてデータ・クレンジングを実行できるようになります。

Runtime Assistant を初めて実行する場合は、リモートでは実行できません。

### 2.4.1 Runtime Repository と Runtime Access User のインストール

このステップでは、Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository スキーマ (2-2 ページの図 2-1 の「2」) と Runtime Access User (2-2 ページの図 2-1 の「1」) をインストールします。これらのコンポーネントの詳細は、第 2.1.1 項を参照してください。

Warehouse Builder Runtime Assistant では、ターゲット・インスタンス内に新規スキーマを作成したり、ターゲット・インスタンスにある既存のスキーマを使用し、そのスキーマを Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトで初期化したりします。Warehouse Builder ランタイム・コンポーネントは、これらのオブジェクトを使用して、ターゲット・インスタンス内にウェアハウス・オブジェクトを配布したり、ターゲット・インスタンスをロードおよびリフレッシュするジョブの実行時に取得した監査情報やエラー情報をログに記録したりします。監査情報およびエラー情報は、Warehouse Builder Runtime Audit Browser を使用して表示できます。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Warehouse Builder Runtime を Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内の Runtime Platform Service を実行するすべてのノードで、このインストールを実行する必要があります。それらのノードは、Runtime Repository に対して有効にできます。

---

**注意：** 既存のスキーマにインストールする場合は、ここで説明した設定のいくつかはすでにスキーマ内で定義されており、Warehouse Builder では変更できません。ユーザーのストレージ・パラメータの変更方法は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

---

**Warehouse Builder Runtime Repository と Runtime Access User をインストールするには：**

1. Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。
  - **Windows の場合：**「スタート」→「プログラム」→「OWB\_ORACLE\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。
  - **UNIX の場合：**シェルを起動し、次のロケーションに移動します。  
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。  
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`  
 次に `runtimeinst.sh` を実行します。
2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」 ページで、「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Runtime Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」 ページで、Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトをインストールするシステムに関して次の情報を入力します。
  - **ユーザー名：**SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Warehouse Builder Runtime Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。一部のシステム権限への付与には、SYSDBA 権限が必要です。Oracle Database パラメータの設定の詳細は、付録 A 「Oracle Database の準備」と付録 E 「診断およびデバッグ」を参照してください。
  - **パスワード：**SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。
  - **ホスト名：**Runtime Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。Runtime Repository をターゲット・インスタンスに初めてインストールする場合は、「ホスト名」を、Runtime Assistant の実行元の localhost にする必要があります。
  - **ポート番号：**Oracle Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。
  - **Oracle サービス名：**Oracle Database サービスの名前。  
 Real Application Cluster 内のノードにインストールする場合は、ホストをノードのホスト値にし、「Oracle サービス名」をその一意のインスタンス名にする必要があります。ホスト、ポート、サービス名は、インスタンスノードごとに記録され、Runtime Audit Browser のサービス・ノード・レポートを使用して管理できます。

「次へ」をクリックします。
4. 「OWB Runtime Assistant: オプションの選択」 ページで、「Runtime Repository」(2-2 ページの図 2-1 の「2」) を選択します。  
 Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内の 1 つ目のノードに対して「Runtime Repository」を選択します。その後インストールするすべてのノードに対しては、「Register RAC Instance」を選択します。このオプションを選択すると、Runtime Repository の作成が簡単になりますが、ノードに Runtime Platform ソフトウェアがインストールされたことが記録されます。そのようなノードは、Runtime Platform Service をサポートする候補になり、Runtime Audit Browser でサービス・ノード・レポートを使用して、Runtime Repository をサポートできるようになります。  
 「次へ」をクリックします。
5. 「OWB Runtime Repository: 作成または削除」 ページで「新規 Warehouse Builder Runtime Repository の作成」を選択します。  
 「次へ」をクリックします。
6. 「OWB Runtime Repository: 新規または既存ユーザー」 ページで、「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します（ユーザーが存在しない場合）。ユーザーが存在する場合は、新しいスキーマの作成、または既存のユーザー・スキーマへの Runtime Repository のインストールのいずれかを選択します。  
 既存のスキーマにすでに Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトがある場合、インストールは失敗します。Runtime Assistant を使用して既存のリポジトリを削除してから、インストールを進めてください。

「次へ」をクリックします。

7. 「OWB Runtime Repository: ユーザー名およびパスワード (新規または既存)」 ページで、新しいスキーマまたは既存のスキーマの所有者の「ユーザー名」と「パスワード」を指定します。

既存のスキーマに以前のリポジトリ・オブジェクトが存在しない場合にのみ、新しい Runtime Repository オブジェクトをインストールできます。

Runtime Assistant は、指定されたユーザー名に基づいて、Runtime Repository へのアクセスを制御するために次の 4 つのロールを作成します。これらは、**WB\_D\_\*** (開発者権限付き)、**WB\_R\_\*** (ランタイム権限付き)、**WB\_A\_\*** (管理者権限付き)、**WB\_U\_\*** (ユーザー権限付き) です。

「次へ」をクリックします。

8. 使用しているマシンが、推奨されるインストール・パラメータを満たさない場合は、「データベース構成警告」が表示されることがあります。「OK」をクリックして先に進みます。
9. 「OWB Runtime Repository: 表領域」 ページで、データベース内で使用可能な表領域から選択して、カテゴリごとの表領域を指定します。

- **データの表領域を選択します。** : データの表領域には、ランタイム配布データと監査データを格納するために Warehouse Builder で作成される表が格納されます。デフォルトは USERS です。
- **索引の表領域を選択します。** : 索引のデフォルト表領域には、Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるために、そのリレーショナル構造のほかにも作成される索引が格納されます。デフォルトは INDX です。
- **一時データの表領域を選択します。** : 一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。デフォルトは TEMP です。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Runtime Repository: ランタイム・アクセス」 ページで、「新規 Runtime Access User の作成」を選択します (初回インストールの場合)。

Runtime Access User は、2-2 ページの図 2-1 の「1」で表されます。Runtime Repository ユーザーに直接接続せずに、Runtime Access User を中間接続として使用できます。このスキーマは、Runtime Repository ユーザー内のサービスにアクセスします。Runtime Assistant は、1 つのデフォルト・ユーザーを作成します。他のユーザーは、後で作成できます。

初回インストールではない場合は、新しいランタイム・アクセス・スキーマの作成、既存のランタイム・アクセス・スキーマへのインストールのいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。

11. 「OWB Runtime Repository: Runtime Access User (新規または既存)」 ページで、Runtime Access User の「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。

「次へ」をクリックします。

12. 「OWB Runtime Repository: Name and Address ポート」 ページで、Name and Address Server と通信するための「ポート番号」を入力します。デフォルトは 4040 です。

「次へ」をクリックします。

13. 「OWB Runtime Repository: サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

14. インストールが成功すると、「Oracle Warehouse Builder Runtime Repository のインストールに成功しました。ターゲット・スキーマをインストールしますか?」 というメッセージが表示されます。

「はい」をクリックし、次の指示に従います。

## 2.4.2 Warehouse Builder ターゲット・スキーマのインストール

このステップでは、Runtime Assistant を使用してターゲット・スキーマをインストールします。ターゲット・スキーマ (2-2 ページの図 2-1 の「3」) では、設計の実装が格納され、ウェアハウス・ジョブが実行されます。ターゲットのインストールは、サーバーでローカルに実行できます。また、以前に Runtime Assistant を実行している場合は、リモートでも実行できます。

ターゲット・スキーマは、実際のターゲットであり、ターゲット・データと、キューブ、ディメンション、ビュー、マッピングなどのデータ・オブジェクトを含みます。ターゲット・スキーマには、Runtime Repository スキーマ内の監査 / サービス・パッケージにアクセスする ETL プロセスを実行するパッケージが含まれます。複数のターゲットを 1 つの Runtime Repository に関連付けることができます。実行情報や配布情報など、ターゲットに関連するすべての情報が、Runtime Repository に格納されます。

ターゲット・スキーマをインストールすると、Runtime Assistant で暗黙的に Create Any Directory 権限と Drop Any Directory 権限が作成されます。これにより、Warehouse Builder 内のディレクトリとして認識されるコネクタを作成したり削除したりできます。そのための権限を自分で明示的に作成する必要はありません。

ターゲット・スキーマを作成するには：

- ランタイム・スキーマと Runtime Access User をインストールし、すでに Warehouse Builder Runtime Assistant をアクティブにしている場合は、ステップ 4 に進みます。それ以外は、Runtime Assistant を起動します。
  - Windows の場合：**「スタート」→「プログラム」→「OWB\_ORACLE\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。
  - UNIX の場合：**シェルを起動し、次のロケーションに移動します。  
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。  
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`  
 次に `runtimeinst.sh` を実行します。
- 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
- 「OWB Runtime Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」ページで、Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトをインストールするシステムに関して次の情報を入力します。
  - ユーザー名：**SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Warehouse Builder Runtime Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。一部のシステム権限への付与には、SYSDBA 権限が必要です。Oracle Database パラメータの設定の詳細は、付録 A「Oracle Database の準備」と付録 E「診断およびデバッグ」を参照してください。
  - パスワード：**SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。
  - ホスト名：**Runtime Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。Runtime Repository をターゲット・インスタンスに初めてインストールする場合は、「ホスト名」を、Runtime Assistant の実行元の localhost にする必要があります。
  - ポート番号：**Oracle Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。
  - Oracle サービス名：**Oracle Database サービスの名前。

「次へ」をクリックします。
- 「OWB Runtime Assistant: オプションの選択」ページで、「ターゲット・スキーマ」(2-2 ページの図 2-1 の「3」) を選択します。
 

「次へ」をクリックします。
- 「OWB ターゲット・スキーマ: 作成または削除」ページで「新規 Warehouse Builder ターゲット・スキーマの作成」を選択します。
 

「次へ」をクリックします。



6. 「OWB ターゲット・スキーマ: Runtime Repository」 ページで、この手順のステップ 7 で定義した Runtime Repository (2-2 ページの図 2-1 の「2」) の所有者の「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。

同じインストール・セッションで Runtime Repository を作成した場合は、その情報がデフォルトとして表示されます。

「次へ」をクリックします。
7. 「OWB ターゲット・スキーマ: 新規または既存ユーザー」 ページで、「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します (ユーザーが存在しない場合)。

ユーザーが存在する場合は、新しいターゲット・スキーマの作成、既存のユーザー・スキーマの指定 (ターゲット・スキーマとして) のいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。
8. 「OWB ターゲット・スキーマ: ユーザー名およびパスワード (新規) または (既存)」 ページで、新しいターゲット・スキーマまたは既存のターゲット・スキーマの「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。

「次へ」をクリックします。
9. 「データベース構成警告」が表示される場合があります。「OK」をクリックして先に進みます。

インストールを中止します。データベース・パラメータの適切な設定は、付録 A 「Oracle Database の準備」を参照してください。

再びインストールを実行します。
10. 「OWB ターゲット・スキーマ: 表領域」 ページで、データベース内で使用可能な表領域から選択して、カテゴリごとの表領域を指定します。
  - **データの表領域を選択します。**: この表領域には、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトが格納されます。デフォルトは USERS です。
  - **索引の表領域を選択します。**: 索引のデフォルト表領域には、Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるために、そのリレーショナル構造のほかに作成される索引が格納されます。この索引は、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブの実行に使用されるオブジェクトのためにあります。デフォルトは INDX です。
  - **一時データの表領域を選択します。**: 一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。この一時データは、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブの実行に使用されるオブジェクトのためにあります。デフォルトは TEMP です。

「次へ」をクリックします。
11. 「OWB Runtime Repository: サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

Oracle Universal Installer からこのアシスタントを実行した場合は、インストールの完了時に「インストールの終了」ページが表示されます。

複数のターゲット・スキーマをセットアップできます。この場合、作成するターゲット・スキーマごとに、Runtime Assistant を実行する必要があります。
12. 「終了」をクリックします。

## 2.5 Design Browser 環境および Runtime Audit Browser 環境の構成

Design Browser は、第 2.3 項で作成された Design Repository に接続します。ユーザーはこれを使用して、メタデータの表示、Web レポートの実行、およびメタデータに関する系統分析および影響分析の実行ができます。Runtime Audit Browser は、第 2.4 項で作成された Runtime Access User に接続します。ユーザーはこれを使用して、ランタイム実行アクティビティを監査できます。Warehouse Builder Design Browser および Runtime Audit Browser の使用方法の詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Design Browser と Runtime Audit Browser には、スタンドアロン型のクライアント・バージョンと、Oracle Application Server に統合されたバージョンの 2 種類があります。

### クライアント・バージョンのブラウザ

クライアント・バージョンのブラウザは、Warehouse Builder のインストールに含まれており、Oracle Application Server に依存せずに実行されます。必要な構成作業もほとんどありません。クライアント・バージョンのブラウザのみを使用する場合は、第 2.5.1 項および第 2.5.2 項で説明する手順を実行してください。第 2.5.3 項の手順を省略します。

### Application Server バージョンのブラウザ

Application Server バージョンのブラウザは、Oracle Application Server に統合されます。追加の構成作業が必要ですが、OracleAS Portal や Single Sign-On Service など、Oracle Application Server の各種機能を利用できるようになります。Application Server バージョンのブラウザを選択したほうがよい理由は、第 2.5.3.1 項「Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由」を参照してください。Application Server バージョンのブラウザを選択する場合は、第 2.5 項で説明する手順をすべて実行してください。

### 2.5.1 クライアント・バージョンの Design Browser の有効化

このステップは、Repository Assistant を使用して Design Repository をインストールした後でないと実行できません（第 2.3 項を参照）。

Warehouse Builder Design Browser Client (2-2 ページの図 2-1 の「C<sub>1</sub>」) を有効にするには、Warehouse Builder Design Repository を指すデータベース・アクセス記述子 (DAD) を追加します。この DAD は、Design Repository と同じ名前にする必要があります。リポジトリが複数ある場合は、複数の DAD を作成する必要があります。

#### 2.5.1.1 Oracle9i リリース 2 (9.2.x) または Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) の場合

クライアント・バージョンの Warehouse Builder Design Browser を有効にするには：

- Warehouse Builder Design Repository をホスティングするコンピュータで、データベースとともにインストールされた Oracle HTTP Server を起動します。
  - Windows の場合：**「コントロールパネル」の「サービス」を開き、「Oracle Apache\_ORACLE\_HOME HTTP Server」を選択します。
  - UNIX の場合：**Apache\_ORACLE\_HOME/Apache/Apache/bin から `apachectl start` を実行します（停止するには、`apachectl stop` を実行します）。
- クライアント・バージョンの Design Browser を実行する各コンピュータから、`http://hostname:port/` に接続します。
  - `hostname` は、Design Repository をホスティングするコンピュータの名前です。通常は `http://` で始まります。
  - `port` は、UNIX プラットフォームの場合は 7777、Windows プラットフォームの場合は 80 または 7778 がデフォルトであり、インストール中に指定することもできます。同じホスト上に Oracle HTTP Server が複数インストールされている場合、通常はインストール数が 1 つ増えるごとに 1 ずつ、ポート番号が大きくなります。詳細は、Oracle HTTP Server のドキュメントを参照してください。ポート番号は、テキスト・ファイル `DATABASE_ORACLE_HOME%APACHE%APACHE%SETUPINFO.TXT` で調べることができます。通常、ポート番号の前にはホスト名とコロン (:) が付きます。

3. 「Mod\_plsql Configuration Menu」 → 「ゲートウェイ Database Access Descriptor 設定」 → 「デフォルトの追加 (空白構成)」 を選択します。
4. 「Database Access Descriptor 名」に入力します。Warehouse Builder Design Repository スキーマ名を使用します。
5. 「データベース接続情報」では、「Oracle ユーザー名」フィールドと「Oracle パスワード」フィールドを空白のままにします。「Oracle 接続文字列」で、Warehouse Builder Design Repository インスタンスを指す `HOST:PORT:SID` を入力します。  
データベース・インスタンスで SID がサポートされない場合は、  
(HOST=`your_host`) (PORT=1521) (CONNECT\_DATA=(SERVICE\_NAME=`your_oracle_service_name`)) の形式で、完全な TNS 接続文字列を使用します。
6. その他のフィールドは空白のままにし、「OK」をクリックして入力内容を保存します。
7. 「閉じる」をクリックします。

### 2.5.1.2 Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の場合

Oracle Database 10g では、Apache Server がデータベース・サーバーから分離されているため、Apache Server をセットアップするための追加作業が必要です。セットアップ手順は、オペレーティング・システムによって異なります。

---

**注意：** Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) では、Oracle HTTP Server が自動的にインストールされなくなりました。Oracle Database 10g を使用する場合は、最初に HTTP Server をインストールする必要があります。HTTP Server のインストールの詳細は、使用しているオペレーティング・システムを対象とする『Oracle Database Companion CD Installation Guide』を参照してください。

---

#### Microsoft Windows プラットフォームに Apache Server をセットアップするには：

1. Apache サービスを停止します。
  - **Windows の場合：**「コントロールパネル」の「サービス」を開き、「Oracle Apache\_ORACLE\_HOME Process Manager」を選択して、サービスを停止します。
  - **UNIX の場合：**次のコマンドを入力します。

```
cd Apache_ORACLE_HOME/opmn/bin
./opmnctl stopall
```

2. 次の DAD 構成ファイルを開きます。  
`Apache_ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf`
3. 次の行を追加して、この DAD 構成ファイルを編集します。このとき、忘れずに変数をご使用のシステムの値に置換してください。

```
<Location ¥pls¥YOUR_DESIGN_REPOSITORY_USER_NAME>
SetHandler pls_handler
Order allow,deny
Allow from All
AllowOverride None
PlsqlDatabaseUsername YOUR_DESIGN_REPOSITORY_USER_NAME
PlsqlDatabasePassword YOUR_DESIGN_REPOSITORY_PASSWORD
PlsqlDatabaseConnectionString HOST_NAME:PORT:SERVICE_NAME
ServiceNameFormat
```



```

PlsqlSessionStateManagement StatelessWithResetPackageState
PlsqlMaxRequestsPerSession      1000
PlsqlFetchBufferSize            128
PlsqlBindBucketWidths          32
PlsqlBindBucketWidths          128
PlsqlBindBucketWidths          1450
PlsqlBindBucketWidths          2048
PlsqlBindBucketWidths          4000
PlsqlBindBucketLengths         4
PlsqlBindBucketLengths         20
PlsqlBindBucketLengths         100
PlsqlBindBucketLengths         400
</Location>

```

4. DOS プロンプトで次のコマンドを入力して、パスワードを非表示にします。

```

cd Apache_ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
set ORACLE_HOME=Apache_ORACLE_HOME
set PATH=%ORACLE_HOME%\Apache\modplsql\conf;%PATH%
set PATH=%ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\bin\MSWin32-x86;%PATH%
set PATH=%ORACLE_HOME%\bin;%PATH%
perl dadTool.pl -o

```

5. Apache サービスを開始します。

- **Windows の場合:** 「コントロールパネル」の「サービス」を開き、「Oracle Apache\_ORACLE\_HOME Process Manager」を選択して、サービスを開始します。
- **UNIX の場合:** 次のコマンドを入力します。

```

cd Apache_ORACLE_HOME/opmn/bin
./opmnctl startall

```

#### UNIX プラットフォームに Apache Server をセットアップするには:

1. 次の環境変数を設定します。
  - ORACLE\_BASE 変数を Apache\_ORACLE\_HOME に設定します。
  - ORACLE\_HOME 変数を Apache\_ORACLE\_HOME に設定します。
  - PATH=\$ORACLE\_HOME/Apache/modplsql/conf:\${PATH} を設定します。
  - LD\_LIBRARY\_PATH=\${LD\_LIBRARY\_PATH}:\${ORACLE\_HOME/lib} を設定します。
2. 次のコマンドを入力して、すべての Apache サービスを停止します。

```

cd Apache_ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl stopall

```
3. 次のコマンドを使用して、DAD 構成ファイルを開き、編集します。

```

cd Apache_ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
edit dads.conf

```

4. 次の行を追加して、この DAD 構成ファイルを編集します。このとき、忘れずに変数をご使用のシステムの値に置換してください。

```
<Location /pls/YOUR_DESIGN_REPOSITORY_USER_NAME>
SetHandler pls_handler

Order allow,deny

Allow from All

AllowOverride None

PlsqlDatabaseUsername YOUR_DESIGN_REPOSITORY_USER_NAME
PlsqlDatabasePassword YOUR_DESIGN_REPOSITORY_PASSWORD

PlsqlDatabaseConnectionString
YOUR_HOST_NAME:YOUR_PORT:YOUR_SERVICE_NAME ServiceNameFormat

PlsqlSessionStateManagement StatelessWithResetPackageState

PlsqlMaxRequestsPerSession      1000
PlsqlFetchBufferSize            128
PlsqlBindBucketWidths          32
PlsqlBindBucketWidths          128
PlsqlBindBucketWidths          1450
PlsqlBindBucketWidths          2048
PlsqlBindBucketWidths          4000
PlsqlBindBucketLengths         4
PlsqlBindBucketLengths         20
PlsqlBindBucketLengths         100
PlsqlBindBucketLengths         400

</Location>
```

5. 次のコマンドを入力して、パスワードを非表示にします。

```
cd Apache_ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
perl dadTool.pl -o
```

6. 次のコマンドを入力して、すべての Apache サービスを開始します。

```
cd Apache_ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl startall
```

### 2.5.1.3 クライアント・バージョンの Design Browser 起動前の準備作業

クライアント・バージョンの Design Browser を起動する前に、第 2.5.2 項で説明されているように、Design Browser にアクセスする各コンピュータで Web ブラウザを構成する必要があります。また、Design Browser Client を起動するには、Start Oracle Warehouse Builder OC4J Instance も実行する必要があります。

## 2.5.2 Warehouse Builder Browser を実行する各コンピュータでの Web ブラウザ設定の構成

このステップでは、Web ブラウザ設定を構成して、Design Browser と Runtime Audit Browser を使用可能にします。次のステップは、クライアント・バージョンと Application Server バージョンのどちらを選択するかに関係なく、Design Browser または Runtime Audit Browser を実行するすべてのコンピュータで行います。

### 2.5.2.1 Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの「LOCALHOST」の追加

まず、Netscape または Microsoft Internet Explorer のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加します。

**Internet Explorer のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加するには：**

1. 「ツール」メニューの「インターネット オプション」を選択します。
2. 「接続」タブで、「LAN の設定」をクリックします。
3. 「ローカルアドレスにはプロキシサーバーを使用しない」オプションを選択します。
4. 「OK」をクリックします。

**Netscape のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加するには：**

1. 「編集」メニューの「設定」を選択します。
2. ナビゲーション・パネルで「詳細」を展開し、「プロキシ」を選択します。
3. 「手動でプロキシを設定する」を選択し、「表示」をクリックします。
4. 画面の「例外」セクションで、使用しているローカルホストをプロキシの例外に追加します。
5. 「OK」をクリックします。

### 2.5.2.2 Web ブラウザのキャッシュ管理の構成

任意のクライアントで Design Browser と Runtime Audit Browser にアクセスできるように、Web ブラウザのキャッシュ管理を設定する必要があります。

**Internet Explorer のキャッシュ管理を構成するには：**

1. 「ツール」メニューの「インターネット オプション」を選択します。
2. 「全般」タブで、「インターネット一時ファイル」セクションの「設定」をクリックします。
3. 「保存しているページの新しいバージョンの確認」オプションの「ページを表示するごとに確認する」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

**Netscape または Mozilla のキャッシュ管理を構成するには：**

1. 「編集」メニューの「設定」を選択します。
2. ナビゲーション・パネルで「詳細」を展開し、「キャッシュ」を選択します。
3. キャッシュしたドキュメントが、ネットワーク上のバージョンと比較されるようにしてください。
  - **Netscape の場合：**「キャッシュにあるページとネットワーク上のページの比較」オプションで、「セッション毎」を選択します。
  - **Mozilla の場合：**「キャッシュにあるページとネットワーク上のページの比較」オプションで、「セッション毎」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

### 2.5.2.3 ネット・サービス名を使用した Warehouse Builder の構成

ネット・サービス名を追加すると、Runtime Audit Browser の「ログイン」画面で、「ネット・サービス名」オプションを使用できるようになります。ネット・サービス名は、Net Manager で追加したり、tnsnames.ora ファイルを編集して手動で追加したりできます。

Net Manager を使用してネット・サービス名を追加するには:

1. Net Manager を起動します。
  - **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_HOME」 → 「Configuration and Migration Tools」 → 「Net Manager」 を選択します。
  - **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/bin/netmgr` を起動します。
2. 「ローカル」 → 「サービス・ネーミング」 を選択し、Runtime Repository をホスティングする Oracle Database のインスタンスを指す、新しいローカルのサービス名を追加します。

ネット・サービス名を手動で追加するには:

1. `OWB_ORACLE_HOME/network/admin/tnsnames.ora` を編集し、Runtime Repository をホスティングする Oracle Database のインスタンスを指す、新しいエントリを追加します。たとえば、次のエントリを追加します。

```
DWSUN42 =
(DESCRIPTION =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = dwsun42) (PORT = 1521))
  )
  (CONNECT_DATA =
    (SERVICE_NAME = dev920.us.oracle.com)
  )
)
```

2. このファイルを保存し、閉じます。

### 2.5.2.4 クライアント・バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の起動

これで、クライアント・バージョンの Design Browser または Runtime Audit Browser を起動することができます。

クライアント・バージョンの Design Browser と Runtime Audit Browser を起動するには:

1. OC4J インスタンスが実行されていることを確認します。2-8 ページの「[Start OWB OC4J Instance](#)」を参照してください。
2. ブラウザを起動します。2-7 ページの「[OWB Design Browser](#)」および 2-8 ページの「[OWB Runtime Audit Browser](#)」を参照してください。

## 2.5.3 (オプション) Oracle Application Server との統合

Warehouse Builder では、Design Browser と Runtime Audit Browser のクライアント・バージョンが用意されているため、Oracle Application Server へのこれらのブラウザの統合はオプションになります。このオプションは、2-2 ページの図 2-1 の下部に示されています。統合には、Warehouse Builder Browser Assistant の実行と、これらのブラウザの構成が必要です。必要なステップは次のとおりです。

1. Oracle Application Server にブラウザを統合するかどうかの決定。2-23 ページの「[Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由](#)」を参照してください。
2. Browser Assistant での Oracle Application Server へのブラウザのインストール (2-23 ページ)
3. Warehouse Builder Design Browser の構成 (2-25 ページ)
4. Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成 (2-26 ページ)
5. Application Server バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の起動 (2-32 ページ)

### 2.5.3.1 Warehouse Builder Browser を Application Server に統合する理由

Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合する場合の利点は、次のとおりです。

- **マルチ・ユーザーのサポート** : Design Repository や Runtime Repository 内の情報にアクセスするために、各ユーザーのコンピュータに Warehouse Builder をインストールする必要はありません。Application Server バージョンの Design Browser と Runtime Audit Browser を使用すれば、Web ブラウザを起動することによってその情報にアクセスできます。
- **ポートレットとポータル・ページのレイアウト** : ポートレットを使用して、Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser の機能にアクセスできます。ポートレットを使用すると、ポータル・ページを必要に応じて柔軟にレイアウトできます。たとえば、Oracle Warehouse Builder のポートレットと Oracle Reports のポートレットを並べて配置できます。これにより、エンド・ユーザーは、使用するすべてのアプリケーションを 1 箇所から起動したり、各自が専用のリストを使用したりできます。
- **複数のリポジトリへのアクセス** : 同時に複数の Warehouse Builder リポジトリにアクセスできます。アクセス権のあるリポジトリは、ポータルのナビゲーション・ツリーに表示されます。
- **Single Sign-On (SSO) サーバー** : Design Browser と Runtime Audit Browser は、Single Sign-On (SSO) サーバーに統合されます。Warehouse Builder のブラウザ管理者ポートレットを使用すると、選択されたリポジトリやロールへのアクセス権を SSO ユーザーまたはグループに付与できます。特定のロールでは、他のロールより多くのレポートにアクセスできます。
- **Oracle Portal でのレポート作成** : Oracle Portal を使用すると、Warehouse Builder メタデータに対して独自のレポートを作成し、そのレポートを Warehouse Builder Design Browser や Runtime Audit Browser のポートレット内で表示できます。
- **複数のサーバー上にあるドキュメントへのハイパーリンク** : Warehouse Builder Design Browser や Runtime Audit Browser から他の関連ドキュメントへのハイパーリンクを作成できます。それらのドキュメントがホスティングされるロケーションは関係ありません。1人のユーザーがそれらのリンクを作成して、パブリックにすると、他のユーザーもアクセスできます。

### 2.5.3.2 Browser Assistant での Oracle Application Server へのブラウザのインストール

Warehouse Builder Browser Assistant では、Design Browser および Runtime Audit Browser の Oracle Application Server へのインストールを、順を追って指示します。Oracle Portal がインストールされた Oracle Application Server が稼働中である必要があります。また、Runtime Audit Browser を統合する場合は、Oracle Container for J2EE (OC4J) も必要です。

既存の Warehouse Builder Browser オブジェクトをスキーマから削除する場合は、このガイドの第 4 章「[Warehouse Builder コンポーネントの削除](#)」を参照してください。

**Oracle Application Server に Warehouse Builder Browser をインストールするには：**

1. Warehouse Builder Browser Assistant を起動します。

**Windows の場合** : 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_ORACLE\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Browser Assistant」を選択します。

**UNIX の場合** : シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `browserasst.sh` を実行します。

2. 「Warehouse Builder Browser Assistant: ようこそ」 ページでインストール手順を確認し、「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作を選択」 ページで「Oracle Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser をインストールします。」を選択し、「次へ」をクリックします。

- 「OWB Browser Assistant: スキーマの選択」ページで、Warehouse Builder Browser を新規スキーマまたは既存スキーマのどちらに作成およびインストールするかを選択します。

既存の Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除する場合は、「OWB Design Browser と OWB Runtime Audit Browser を削除します」を選択し、第4章「Warehouse Builder コンポーネントの削除」の手順に従ってください。

「次へ」をクリックします。

- 「OWB Browser Assistant: サーバー情報」ページで、Oracle Application Server インフラストラクチャ・データベースを指す、次の接続情報を入力します。

- **ホスト名** : Oracle Application Server インフラストラクチャ・データベースがインストールされているホスト・マシンの名前 (server8 など)。
- **ポート番号** : Oracle Application Server インフラストラクチャ・データベースがインストールされているマシンの TNS ポート番号 (1521 など)。
- **Oracle サービス名** : Oracle Database サービスの名前。

「次へ」をクリックします。

- 「OWB Browser Assistant:SYSDBA 情報」ページで、次の追加の接続情報を入力します。

- **SYS ユーザー名** : SYS ユーザーの名前。
- **SYS パスワード** : SYS ユーザーのパスワード。
- **Oracle Portal スキーマ名** : Oracle Application Server のインストール時に設定された Oracle Portal ユーザー名。これは、Oracle Portal をインストールしたスキーマです。

「次へ」をクリックします。

- 「OWB Browser Assistant: 表領域およびスキーマの入力」ページで、データを格納する表領域を選択します。

- **デフォルトの表領域を選択します。** : ブラウザ・データを格納するデフォルトの表領域です。
- **一時データの表領域を選択します。** : ブラウザ・データに対する大量のソートに必要な一時セグメントを格納します。
- Warehouse Builder Design Browser のスキーマ名とパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

- 「OWB Browser Assistant: Oracle9iAS Single Sign-On (SSO) サーバー情報」ページで、Oracle Application Server の情報を入力します。

「次へ」をクリックします。

- 「Oracle Browser Assistant: OWB Design Repository の詳細 (オプション)」ページの情報はオプションです。

このページに入力しなくても、後で「Warehouse Builder Browser Administration」ウィンドウに直接入力できます。ここで Design Browser の情報を入力する場合は、「はい」をクリックし、2-2 ページの図 2-1 の「C<sub>1</sub>」に関して、次の情報を入力します。ここで入力しない場合は、「いいえ」をクリックします。

- **OWB Design Repository ユーザー** : Warehouse Builder Design Repository にログインする際のユーザー名。
- **OWB Design Repository パスワード** : Warehouse Builder Design Repository にログインする際のパスワード。
- **ホスト名** : Warehouse Builder Design Repository があるコンピュータの名前。
- **ポート番号** : Warehouse Builder Design Repository があるデータベースの TNS リスナー・ポートの番号。
- **Oracle サービス名** : Oracle Database サービスの名前。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Browser Assistant: OWB Runtime Repository の詳細 ( オプション )」 ページの情報はオプションです。

このページに入力しなくても、後で「Warehouse Builder Browser Administration」ウィンドウに直接入力できます。

ここで Runtime Audit Browser の情報を入力する場合は、「はい」をクリックし、2-2 ページの図 2-1 の「D<sub>1</sub>」に関して、次の情報を入力します。ここで入力しない場合は、「いいえ」をクリックします。

- **OWB Runtime Repository ユーザー**: Warehouse Builder Runtime Repository にログインする際のユーザー名。
- **OWB Runtime Repository パスワード**: Warehouse Builder Runtime Repository にログインする際のパスワード。
- **ホスト名**: Warehouse Builder Runtime Repository があるコンピュータの名前。
- **ポート番号**: Warehouse Builder Runtime Repository があるデータベースの TNS リスナー・ポートの番号。
- **Oracle サービス名**: Oracle Database サービスの名前。

「次へ」をクリックします。

11. 「サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

### 2.5.3.3 Warehouse Builder Design Browser の構成

Warehouse Builder Design Browser を使用するには、Portal 管理者として Oracle Portal にログインし、ポートレット・プロバイダを追加して、ポートレット・リポジトリをリフレッシュします。

**Portal 管理者として Oracle Portal にログインするには:**

1. Web ブラウザを起動して、Oracle Portal にアクセスします。  
たとえば、次のように入力します。http://server:7778/pls/portal/ (server は Web サーバーのホスト名、7778 は Web サーバーのポート番号、portal は DAD 名です)。
2. 「Oracle Portal へようこそ」 ページで、「ログイン」 (右上) をクリックします。
3. 「シングル・サインオン」 ページで、Portal 管理者のユーザー名とパスワード (たとえば、portal) を入力します。

**Oracle Application Server にポートレット・プロバイダを追加するには:**

1. 管理者として Oracle Portal にログインし、「ビルダー」をクリックして、「プロバイダ」ポートレットから「ポートレット・プロバイダの登録」 ページに移動します。
  - **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の場合**: 「管理」 タブを選択し、「プロバイダの登録」をクリックします。
  - **Oracle Application Server 10g (9.0.4) の場合**: 「ビルド」 タブを選択し、「ポートレット・プロバイダの登録」をクリックします。
2. 次の情報を入力します。
  - **名前**: Portal Provider で使用する名前です。スペースは使用できません。たとえば「sso\_username\_owb\_browser」と入力します。
  - **表示名**: たとえば「Warehouse Builder Portal」と入力します。
  - **タイムアウト**: 100 秒以上を入力します。
  - **タイムアウト・メッセージ**: たとえば「プロバイダがタイムアウトしました。」と入力します。
  - **実装スタイル**: データベースです。

- **所有スキーマ** : Warehouse Builder のスキーマ名を入力します。
- **パッケージ名** : wmp\_provider です。

その他のフィールドは、デフォルトの値を使用してください。「OK」をクリックしてプロバイダを作成します。

**ポートレット・リポジトリをリフレッシュするには：**

1. Oracle Portal ホームページの「管理」タブをクリックします。
2. 「ポートレット・リポジトリ」というポートレットまでスクロールします。
3. 「ポートレット・リポジトリの更新」をクリックします。
4. 「リフレッシュ」をクリックします。

Warehouse Builder Browser のポートレットが、ポートレット表示モードで表示されます。これで、Warehouse Builder Design Repository を表示して SSO ユーザーにロールを割り当てることができます。

### 2.5.3.4 Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成

Oracle Application Server Portal 内で Runtime Audit Browser を構成する手順は、この後の項で説明する 4 つの一般的なタスクで構成されます。

**Warehouse Builder Runtime Audit Browser を構成するための一般的なステップは、次のとおりです。**

1. [OC4J インスタンスの作成 \(2-26 ページ\)](#)
2. [Runtime Audit Browser アプリケーションの配布 \(2-27 ページ\)](#)
3. [スキーマへのアプリケーションのバインド \(2-28 ページ\)](#)
4. [Oracle Portal での Runtime Audit Browser の表示 \(2-29 ページ\)](#)
5. [ネット・サービス名を使用した Warehouse Builder の構成 \(2-30 ページ\)](#)

**2.5.3.4.1 OC4J インスタンスの作成** Warehouse Builder Runtime Audit Browser を構成するには、まず、Oracle Container for Java (OC4J) インスタンスを作成します。

**OC4J インスタンスを作成するには：**

1. 管理者として、Oracle Application Server 上の Online Enterprise Manager にログインします。
  - Oracle Enterprise Manager のデフォルトのポート番号は 1810 です。Oracle Application Server 10g (9.0.4) がインストールされている場合は、1812 も使用できます。
  - デフォルトの Oracle Enterprise Manager 管理者ユーザーは、ias\_admin です。
  - 通常のパスワードは welcome1 です。

最初のページには、2 つのスタンドアロン・インスタンスが表示されます。1 つは Oracle Application Server インフラストラクチャのインストール時に作成され、もう 1 つは、Oracle Application Server のインストール時に作成されています。

2. インスタンス名のリンクをクリックして、Application Server インスタンス (中間層) を選択します。

既存の OC4J インスタンスがすべて、ページ上に表示されます。

「OC4J インスタンスの作成」をクリックします。

3. 「OC4J インスタンスの作成」ページで、OC4J インスタンスの名前を指定します (owbb など)。  
「作成」をクリックします。



作成された OC4J インスタンスは、該当する Application Server の「システム・コンポーネント」に表示されます。OC4J インスタンスは停止状態です。この後の手順で EAR ファイルを配布してから、OC4J インスタンスを起動します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) がインストールされている場合は、ここで OC4J インスタンスの作成を終了できます。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) がインストールされている場合は、この手順の残りのステップを実行します。

4. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ:** 自分の OC4J インスタンスのページで、「配布済みアプリケーション」→「デフォルト・アプリケーション」→「名前 default」を選択します。  
「default」をクリックします。
5. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ:** この OC4J インスタンスの「アプリケーション default」ページで、「管理」→「プロパティ」を選択します。  
「一般」をクリックします。
6. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ:** 「プロパティ」ページの「ライブラリ・パス」見出しの下で、次の jar ファイルを削除します。  

```
../.././jlib/uix2.jar
../.././jlib/share.jar
```
7. 「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。

**2.5.3.4.2 Runtime Audit Browser アプリケーションの配布** OC4J インスタンスを作成したら、Runtime Audit Browser アプリケーションを配布します。Runtime Audit Browser アプリケーションは、Oracle HTTP Server ポートとは異なるポートに配布します。

**Runtime Audit Browser アプリケーションを配布するには:**

1. OC4J インスタンスのページに戻ります。  
「EAR ファイルの配布」をクリックします。
2. 配布ウィザードで、「次へ」をクリックします。
3. 「アプリケーションの選択」ページで、次の操作を行います。
  - 「参照」をクリックし、\$oracle\_home/browserasst/ ディレクトリにある次のファイルを開きます。  
Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の場合 : owbb.ear  
Oracle Application Server 10g (9.0.4) の場合 : owbb\_v904.ear
  - 「アプリケーション名」フィールドで、Warehouse Builder Browser に付けるアプリケーション名を入力します (My OWBB など)。
  - 「親アプリケーション」フィールドは、値を default のままにします。  
「次へ」をクリックします。
4. 「Web モジュールの URL マッピング」画面で、ブラウザ・アプリケーションの URL パインドを入力します。「/owbb」と入力します。これにより、ブラウザには、`http://hostname:port/owbb/` でアクセスできます。  
  
Warehouse Builder では、owbb の使用が予約されています。Runtime Audit Browser の OC4J インスタンスが複数ある場合でも、一度にアクティブにできるのは 1 つだけです。  
「終了」をクリックします。
5. 「サマリー」画面で「配布」をクリックします。
6. owbb.ear が配布されたら、OC4J インスタンスのページに戻り、配布したばかりのアプリケーションの名前をクリックします。

**2.5.3.4.3 スキーマへのアプリケーションのバインド** Runtime Audit Browser アプリケーションを配布した後、それをスキーマにバインドする必要があります。インストール先の Oracle Application Server のリリースに応じて、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) 用と Oracle Application Server 10g (9.0.4) 用の 2 通りの手順があるので注意してください。

**Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のスキーマにアプリケーションをバインドするには：**

1. OC4J インスタンスの、[第 2.5.3.4.2 項](#)で配布したアプリケーションの「アプリケーション」ページで、「管理」→「リソース」を選択します。  
「データ・ソース」をクリックします。
2. 「データ・ソース」ページで「データ・ソースの追加」をクリックします。
3. 「データ・ソースの追加」ページで、次の情報を入力してデータ・ソースを作成します。「名前」、「説明」、「スキーマ」、「ユーザー名」、「パスワード」のみ、値を変更できます。
  - **名前:**名前を入力します (owbb\_demo など)。
  - **説明:**説明を入力します («My Oracle Warehouse Builder Browser demo」など)。
  - **データ・ソース・クラス名:**「com.evermind.sql.OrionCMTDataSource」と入力します。「com.evermind.sql.DriverManagerDataSource」も入力できますが、これは Linux では動作しません。
  - **スキーマ:**Browser をインストールしたスキーマです (owbb\_demo など)。
  - **ユーザー名:**Browser Assistant の実行後に作成したユーザー名です (通常はスキーマ名。owbb\_demo など)。
  - **パスワード:**Warehouse Builder Browser スキーマのパスワードです (owbb\_demo など)。
  - **JDBC URL:**  
「jdbc:oracle:thin:@host\_name\_of\_the\_Oracle\_Application\_Server\_database\_into\_which\_you\_put\_your\_owbb\_schema:database\_port\_number:database\_SID」と入力します。  
たとえば、「jdbc:oracle:thin:@dwsun21.us.oracle.com:1521:iasdb」と入力します。  
SID ではなく Oracle サービス名を指す JDBC URL の場合は、次の形式を使用します。  

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=your_host)(PORT=1521))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=your_oracle_service_name)))
```
  - **JDBC ドライバ:**「oracle.jdbc.driver.OracleDriver」と入力します。
  - **ロケーション:**「jdbc/owbb」と入力します。
  - **トランザクション関連 (XA) バージョンの場所:**「jdbc/owbb」と入力します。
  - **EJB 対応バージョンの場所:**「jdbc/owbb」と入力します。
 「作成」をクリックします。
4. 入力した情報が正しければ確認ページが表示され、データ・ソースを有効にするためにサーバーを再起動するかどうか尋ねられます。  
「はい」をクリックします。  
OC4J インスタンスが再起動します。

**Oracle Application Server 10g (9.0.4) のスキーマにアプリケーションをバインドするには:**

1. OC4J インスタンスの、第 2.5.3.4.2 項で配布したアプリケーションの「アプリケーション」ページで、「管理」→「リソース」を選択します。  
「データ・ソース」をクリックします。
2. 「データ・ソース」ページで「作成」をクリックします。
3. 「データ・ソースの追加」ページで、次の情報を入力してデータ・ソースを作成します。  
「名前」、「説明」、「スキーマ」、「ユーザー名」、「パスワード」のみ、値を変更できます。
  - **名前:** 名前を入力します (owbb\_demo など)。
  - **説明:** 説明を入力します («My Oracle Warehouse Builder Browser demo」など)。
  - **データ・ソース・クラス名:** 「com.evermind.sql.OrionCMTDataSource」と入力します。
  - **JDBC URL:**  
「jdbc:oracle:thin:@host\_name\_of\_the\_database\_into\_which\_you\_put\_your\_owbb\_schema:database\_port\_number:database\_SID」と入力します。  
たとえば、「jdbc:oracle:thin:@dwsun21.us.oracle.com:1521:iasdb」と入力します。  
SID ではなく Oracle サービス名を指す JDBC URL の場合は、次の形式を使用します。  
`jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=your_host)(PORT=1521))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=your_oracle_service_name)))`
  - **JDBC ドライバ:** 「oracle.jdbc.driver.OracleDriver」と入力します。
  - **スキーマ:** このフィールドは空白のままにします。
  - **ユーザー名:** 「クリアテキストの使用」オプションを選択します。Browser Assistant の実行後に作成したユーザー名を入力します (通常はスキーマ名。owbb\_demo など)。
  - **パスワード:** Warehouse Builder Browser スキーマのパスワードです (owbb\_demo など)。

「JNDI の場所」の下に次のように入力します。

  - **ロケーション:** 「jdbc/owbb」と入力します。
  - **トランザクション関連 (XA) バージョンの場所:** 「jdbc/owbb」と入力します。
  - **EJB 対応バージョンの場所:** 「jdbc/owbb」と入力します。

他のフィールドには、デフォルト値を使用します。  
「作成」をクリックします。
4. 入力した情報が正しければ確認ページが表示され、データ・ソースを有効にするためにサーバーを再起動するかどうか尋ねられます。  
「はい」をクリックします。  
OC4J インスタンスが再起動します。

**2.5.3.4.4 Oracle Portal での Runtime Audit Browser の表示** OC4J インスタンスの再起動後、Oracle Portal にポートレットを登録して、Runtime Audit Browser を Oracle Portal からアクセスできるようにします。

**Portal から Runtime Audit Browser にアクセスできるようにするには:**

1. 管理者として Oracle Portal にログインします。
2. 「ビルダー」をクリックし、「プロバイダ」ポートレットの「ポートレット・プロバイダの登録」をクリックします。

3. 次の情報を入力します。
    - **名前:** 任意の名前を入力します (owb\_runtime\_audit\_viewer など)。空白は使用できません。
    - **表示名:** 表示する名前を入力します (OWB Runtime Audit Browser など)。
    - **タイムアウト:** この値は、秒単位の大きな数に設定します (10000 秒など)。
    - **タイムアウト・メッセージ:** 通常のタイムアウト・メッセージは「RAB portlet provider has timed out」です。
    - **実装スタイル:** デフォルト (web) を使用します。
  4. 「一般プロパティ」ページで、次の情報を入力します。
    - 「URL」に入力します。プロバイダ URL は、第 2.5.3.4.2 項のステップ 4 の URL マッピングで入力した値によって決まります。たとえば、第 2.5.3.4.2 項のステップ 4 で URL バインドを /owbb にすると、プロバイダ URL は http://hostname:port/owbb/providers/ になります。
    - URL 入力ボックスの下の「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」オプションを選択します。
    - 「ユーザーは、Web プロバイダ・アプリケーション内とシングル・サインオン認証内とで、同じ識別情報を保持します。」を選択します。
    - 「ユーザー / セッション情報」で、「ユーザー」を選択し、「ログイン頻度」を「ユーザー・セッションごとに 1 回」に設定します。
    - 「Portal ユーザー固有のセッション情報が必要です。」を選択します。

「次へ」をクリックします。
  5. プロバイダへのアクセス権をポータル・ユーザーに付与するには、「アクセスを許可」ページで「権限付与者」ボックスにユーザー名を入力し、権限を選択して、「追加」をクリックします。
- 「終了」をクリックします。
6. ポータルの標準的な手順に従い、作成したばかりのプロバイダのページに **Oracle Warehouse Builder Runtime Audit Browser** ポートレットを追加します。

**2.5.3.4.5 ネット・サービス名を使用した Warehouse Builder の構成** Oracle Application Server に Runtime Audit Browser を統合した場合は、次の手順に従い、Runtime Audit Browser の「データベース・リンクの作成」ページで「ネット・サービス名」オプションを使用可能にします。まず、ネット・サービス名を追加してから、中間層で Oracle Application Server OPMN プロセスを開始します。

**Net Manager を使用してサービス名を追加するには:**

1. インフラストラクチャの ORACLE\_HOME と中間層の ORACLE\_HOME の両方から、サービス名を追加する必要があります。
 

まず、インフラストラクチャの ORACLE\_HOME に移動し、この後の手順に従います。

次に、中間層の ORACLE\_HOME に移動し、この後の手順を繰り返します。
2. Net Manager を起動します。
  - **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle9iAS のインストール先ディレクトリ名」 → 「Configuration and Migration Tools」 → 「Net Manager」を選択します。
  - **UNIX の場合:** ORACLE\_HOME/bin/netmgr を起動します。
3. 「ローカル」 → 「サービス・ネーミング」を選択します。
4. 新しいローカルのサービス名を追加します。

## サービス名を手動で追加するには：

1. `ORACLE_HOME/network/admin/tnsnames.ora` を編集し、新しいエントリを追加します。次に例を示します。

```
DWSUN42 =
(DESCRIPTION =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = dwsun42) (PORT = 1521))
  )
  (CONNECT_DATA =
    (SERVICE_NAME = dev920.us.oracle.com)
  )
)
```

2. このファイルを保存し、閉じます。

Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) がインストールされている場合は、次の手順を実行して、中間層のホストでのみ OC4J インスタンスを再起動します。Oracle Application Server 10g (9.0.4) がインストールされている場合は、次の手順は必要ありません。

## 中間層のホストで OC4J インスタンスを再起動するには (Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のみ)：

1. `$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall` を実行して、OPMN プロセスを停止します。
2. デフォルトの OC4J ライブラリ・パスを OWBB インスタンスに渡すように、`$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` を編集します。

```
<ias-instance xmlns="http://www.oracle.com/ias-instance">
.....
<process-manager>
.....
<oc4j maxRetry="3" instanceName="home" numProcs="1">
.....
</oc4j>
.....
</oc4j>
<oc4j instanceName="owbb" gid="owbb">
<config-file path="/usr/iasv2_portal/j2ee/owbb/config/server.xml"/>
<oc4j-option value="-properties"/>
<port ajp="3001-3100" rmi="3101-3200" jms="3201-3300"/>
<environment>
<prop name="%LIB_PATH_ENV%" value="%LIB_PATH_VALUE%"/>
<prop name="%LD_LIBRARY_PATH" value="/usr/iasv2_portal/lib"/>
</environment>
</oc4j>
<log-file path="/usr/iasv2_portal/opmn/logs/ipm.log" level="3"/>
</process-manager>
</ias-instance>
```

この例では、ハイライトされたテキストが `opmn.xml` に追加されます。これは、Warehouse Builder インスタンスの作成後に、OC4J によって作成されます。

この例では、`/usr/iasv2_portal` が中間層の `ORACLE_HOME` です。

3. Windows の場合のみ、`ORACLE_HOME/opmn/config/opmn.xml` ファイルにある、関連の Warehouse Builder Browser インスタンスに、次のコードを追加します。

```
<environment>
<prop name="%LIB_PATH_ENV%" value="%LIB_PATH_VALUE%"/>
<prop name="%PATH" value="<path to oracle home>/bin"/>
</environment>
```

4. ホスト・マシンを再起動します。

5. `$OWB_ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall` を実行して、OPMN プロセスを再び開始します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) がインストールされている場合は、次の手順を実行して構成を確認します。

**構成を確認するには (Oracle Application Server 10g (9.0.4) のみ) :**

1. オンラインで Oracle Enterprise Manager にアクセスします。
2. 新しく作成した OWBB インスタンスを選択し、「サーバー・プロパティ」→「環境変数」を選択します。
3. 対応する中間層の ORACLE\_HOME のライブラリ・ディレクトリを指す、新しい環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH を追加します (/usr/iasv2\_portal/lib など)。

### 2.5.3.5 Application Server バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser の起動

これで、Application Server バージョンの Design Browser または Runtime Audit Browser を起動することができます。OC4J インスタンスを起動します。

- **Windows の場合:** 「スタート」→「プログラム」→「OWB\_ORACLE\_HOME」→「Warehouse Builder」→「Start OWB OC4J Instance」を選択します。
- **UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`startOwbbInst.sh` を実行します。

## 2.6 (オプション) サードパーティの Name and Address データのインストール

Warehouse Builder では、Name and Address 演算子を使用して、データの Name and Address のクレンジングを実行できます。Name and Address 演算子は、Name and Address のソース・データにあるエラーや不整合を識別し、修正します。この演算子は、入力データを、Name and Address のクレンジング・ソフトウェアのサードパーティ・ベンダーから提供されたデータ・ライブラリと比較し、不整合を識別します。このデータ・ライブラリは、ベンダーから直接購入してください。

データ・ライブラリをインストールする場合は、ベンダーから提供される、Name and Address のクレンジング・ソフトウェアのインストール手順を参照してください。

Warehouse Builder を Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする場合は、データ・クレンジング・コンポーネントのパッケージ変更について、『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』を参照してください。

**Name and Address のクレンジングを利用するには:**

1. このガイドの手順に従い、Warehouse Builder をインストールします。
2. 認定ベンダーのデータ・ライブラリと Name and Address アダプタを、そのベンダーの指示に従ってインストールし、アクセスします。

Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、複数のノードに Name and Address アダプタをインストールして、RAC アーキテクチャの並行処理およびフェイル・オーバー機能を活用することもできます。購入したライセンスで複数ノードへのインストールが許諾されているかどうかは、ベンダーにご確認ください。

データ・ライブラリは、複数のノードにインストールする必要はありません。ただし、1つのノードにすべてのデータ・ライブラリをインストールすると、ファイルへのアクセスに待機時間が発生して、パフォーマンスが低下する可能性があります。Name and Address クレンジング・ソフトウェアのベンダーが推奨する方法に従ってください。

3. Name and Address 演算子を使用してマッピングを設計し、Name and Address データをクレンジングします。Name and Address 演算子を使用したマッピングの設計方法は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

---

---

## 10g リリース 1 (10.1) へのアップグレードとデータの移行

この章では、Warehouse Builder の旧バージョンを使用して構築された既存システムを Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする手順を説明します。現行バージョンのアップグレードは、Oracle Database 環境のアップグレード、Warehouse Builder ソフトウェアのアップグレード、設計メタデータの移行、ランタイム・システムの移行で構成されています。Warehouse Builder の旧バージョンとそのリポジトリを削除する前に、新しいバージョンをテストします。アップグレードは、次の手順で構成されています。

- [別の ORACLE\\_HOME への Warehouse Builder のインストール \(3-2 ページ\)](#)
- [Oracle Database 環境のアップグレードまたは移行 \(3-2 ページ\)](#)
- [設計メタデータのアップグレード \(3-8 ページ\)](#)
- [ランタイム・データのアップグレード \(3-11 ページ\)](#)
- [新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布 \(3-15 ページ\)](#)
- [新機能を利用するためのマッピング構成の更新 \(3-16 ページ\)](#)
- [オプション: Warehouse Builder の旧バージョンの削除 \(3-17 ページ\)](#)

## Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする理由

Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする理由は次のとおりです。

- データソースのいずれかが Oracle Database 10g 上にあるか、データ・ターゲットのいずれかのために Oracle Database 10g を使用する予定の場合は、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする必要があります。
- Warehouse Builder リリース 9.0.4.x 以下からアップグレードする場合、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする処理は、必須の 9.2.0.4.0 パッチを使用して Warehouse Builder 9.2.0.2.8 にアップグレードする処理よりも簡単です。
- Warehouse Builder 9.2.x は、9.2.0.4.0 より後の追加のパッチではサポートされません。
- Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、その前のリリースよりも多くのオペレーティング・システムで動作します。詳細は、[第 1.3.1 項「オペレーティング・システムの要件」](#)を参照してください。

### この章の使用方法

最初に、この新しいリリースの『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』をお読みください。「アップグレード」には、このマニュアルに記載されていない役に立つ情報が含まれています。

この章では、Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) へのアップグレードの処理が、7つの項に分かれています。それらをこのドキュメントに記載された順序で完了する必要があります。アップグレード・シナリオの特性に応じて、使用しているプラットフォーム、ソフトウェアのバージョンまたはアップグレードの選択に該当しないいくつかの項または手順を省略するように指示されます。いずれかの項を省略するように指示された場合は、次の項に進みます。

## 3.1 別の ORACLE\_HOME への Warehouse Builder のインストール

現行の Warehouse Builder ソフトウェアを削除せずに、[第 2.2 項](#)のインストール手順に従って、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェアを新しい、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

アップグレードの一部として、ターゲット・スキーマをホスティングする Oracle Database インスタンスを別のコンピュータに移動する場合、そのコンピュータに Warehouse Builder をインストールする必要があります。

## 3.2 Oracle Database 環境のアップグレードまたは移行

Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、次に示すバージョンの Oracle Database と互換性があります。

- Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x)
- Oracle9i リリース 2 (9.2.x)
- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1)

現在、Warehouse Builder と互換性のあるバージョンの Oracle Database を使用している場合、互換性のあるそれより後のバージョンのデータベースにアップグレードすることも、現行バージョンをそのまま使用することもできます。Oracle 環境を Oracle Database の異なるインスタンスに移行することも、同じインスタンス上で作業を続行することもできます。

### Oracle Database の同じバージョンとインスタンスの保持

Oracle Database の後のバージョンにアップグレードしない場合およびデータベース・インスタンスを変更しない場合は、[第 3.2 項](#)の残りの部分は省略し、[第 3.3 項](#)に進みます。



## Oracle Database のアップグレード

第 3.2 項は、Oracle9i リリース 2 (9.2.x) または Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードするユーザーを対象にしています。

---

**注意：** Oracle Database をアップグレードする前に、Warehouse Builder Runtime Platform Service が実行されている場合はそれを停止します。

**Runtime Platform Service を停止するには：**

1. Runtime Repository の所有者としてランタイム・プラットフォームにログオンします。
  2. `ORACLE_HOME¥owb¥rtp¥sql¥stop_service.sql` スクリプトを実行します。
- 

Oracle Database 10g にアップグレードする場合（推奨）、Oracle Database 環境のアップグレードと移行の手順は、『Oracle Database 10g アップグレード・ガイド』を参照してください。Oracle9i リリース 2 (9.2) にアップグレードする場合、『Oracle9i データベース移行ガイド』を参照してください。

Oracle Database 環境は、次の 3 つのいずれかの方法で移行できます。

- 新しいデータベース・インスタンスに移動する場合のデータベースの完全なエクスポートとインポート
- 同じデータベース・インスタンスを保持する場合のデータベースの移行ユーティリティ
- 選択的移行のための部分的なデータベースのエクスポートとインポート

### 3.2.1 新しいデータベース・インスタンスに移動する場合のデータベースの完全なエクスポートとインポート

アップグレードするときに新しい Oracle Database インスタンスに移動する場合は、このオプションを使用します。詳細な手順は、Oracle Database 10g のアップグレードに関するマニュアルを参照してください。

データベースのインポートが完了したら、第 3.3 項「設計メタデータのアップグレード」に進んでください。

#### 移動する Oracle Database インスタンスに Oracle Workflow がインストールされている場合

Oracle Database インスタンスを移動して Warehouse Builder をアップグレードした後、プロセス・フローは、古い Oracle Database インスタンスにインストールされている Oracle Workflow に登録されたままになっています。それらを新しいデータベース・インスタンスに再登録するには、この章の第 3.4.2 項で説明する RT\_Upgrade\_to\_10\_1 スクリプトを実行する前に、次の予防策をとってください。

プロセス・フローを新しい Oracle Database インスタンスの Oracle Workflow に登録するには、次の手順に従います。

1. 第 3.4.2 項の手順を実行する前に、新しいデータベース・インスタンス上で Oracle Workflow Configuration Assistant を「アップグレード」モードで実行して、ワークフロー・スキーマをアップグレードします。
2. 古いインスタンスが依然として実行されていることを確認します。
3. 第 3.4.2 項の手順を続行します。
4. これでワークフローのロケーションがアップグレードされますが、それらは Oracle Workflow の古いインスタンスに登録されたままです。ワークフローのロケーションを手動で再登録し、プロセス・フロー・パッケージを再配布します。

## 3.2.2 同じデータベース・インスタンスを保持する場合のデータベースの移行ユーティリティ

Oracle Database 10g にアップグレードするが同じデータベース・インスタンス上に保持する場合は、このオプションを使用します。詳細な手順は、Oracle Database 10g のアップグレードに関するマニュアルを参照してください。

データベースの移行が完了したら、第 3.3 項「設計メタデータのアップグレード」に進んでください。

## 3.2.3 選択的移行のための部分的なデータベースのエクスポートとインポート

以前のバージョンの Warehouse Builder が 9.0.4.x または 9.2.x であった場合のみ、部分的なデータベースのエクスポートとインポートを使用できます。以前のバージョンの Warehouse Builder が 9.0.3.x 以下であった場合は、完全なデータベースのエクスポートとインポートまたはデータベースの移行ユーティリティを使用する必要があり、第 3.2.3 項は省略します。

データベースのインポートが完了したら、第 3.3 項「設計メタデータのアップグレード」に進んでください。

### 考慮事項

このオプションは、以前のバージョンの Oracle Database から新しいバージョンへ移動するものを選択して Oracle Database 10g へのアップグレードを行うユーザーのためのオプションです。完全なデータベースのエクスポートとインポートまたはデータベース移行ユーティリティのいずれかで必要な条件を満たせる場合は、部分的なデータベースのエクスポートとインポートを使用しないでください。部分的なデータベースのエクスポートとインポートを選択する場合は、次の手順を実行する必要があります。

- Oracle Database 10g 環境に、事前に表領域を作成します。この表領域は、以前のバージョンの Oracle Database 内の表領域に完全に一致する必要があります。
- この章のアップグレード手順で Warehouse Builder ユーザーの作成が必要とされる場合は、常に Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x での以前のものと同一スキーマ名とデフォルト表領域を持つユーザーを作成します。

### 3.2.3.1 部分的なデータベースのエクスポートでの設計メタデータの移行

設計メタデータの移行には、次の作業が含まれます。

- 設計メタデータのエクスポート
- 設計メタデータのインポート

設計メタデータに対してこれらの 2 つの手順を完了した後、この章の残りの部分を続行します。必ず、第 3.3.2.1 項「Warehouse Builder 設計メタデータの自動アップグレード・スクリプト」の手順に従って、設計メタデータのアップグレードを完了してください。

設計メタデータをエクスポートおよびインポートするには、移行する Runtime Repository に所有されるターゲット・スキーマごとにこの手順を実行します。

1. Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) または Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x) の Oracle のエクスポート・ユーティリティを使用して、次のように入力して古い Design Repository を DMP ファイルにエクスポートします。

```
exp OldOWBDesignUserName/OldOWBDesignUserPassword@
Old_DBTNSConnection owner=OWBDesignUserName
FILE=OWBDesignUserName.dmp LOG=OWBDesignUserName.log
```

OldOWBDesignUser は、以前の Warehouse Builder Design Repository ユーザーを表します。

たとえば、次のように入力します。

```
exp owb_design/owb_design owner=owb_design
FILE=owb_design.dmp LOG=owb_design.log
```

2. 古い Warehouse Builder Design Repository スキーマ・ユーザーのすべての表領域を特定します。

Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) または Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x) の SQL\*Plus に Warehouse Builder Design Repository ユーザーとして接続し、次のコマンドを入力します。

```
select distinct TABLESPACE_NAME from user_segments;
```

次のように入力し、古い Warehouse Builder Design Repository スキーマ・ユーザーのデフォルトおよび一時表領域を確認します。

```
select DEFAULT_TABLESPACE, TEMPORARY_TABLESPACE from
user_users;
```

3. Oracle Database 10g データベース・インスタンスに、手順 2 で以前のインスタンスからリストした表領域を作成します。
4. Oracle Database 10g データベース・インスタンスで、SYS ユーザーとして接続し、古い Design Repository と同じ名前、同じデフォルト・データ表領域、および同じ一時表領域を持つ新しい Warehouse Builder Design Repository を作成します。たとえば、SQL\*Plus で次のように入力します。

```
connect SYS/SYS as sysdba;
```

```
create user owb_design identified by owb_design default
tablespace users temporary tablespace temp;
```

5. Oracle Database 10g データベース・インスタンスで、SQL\*Plus の SYS ユーザーとして接続し、Warehouse Builder Design Repository ユーザーに権限を付与します。

次のファイルで必須の権限のリストを取得できます。

```
OWB_ORACLE_HOME%owb%reposasst%grantpriv.sql
```

SQL\*Plus で次のコマンドを入力します。

```
connect SYS/SYS as sysdba;
```

```
SET DEFINE %
```

```
define user=OWBDesignRepositoryUser
```

```
@OWB_ORACLE_HOME%owb%reposasst%grantpriv.sql
```

6. Warehouse Builder Design Repository ユーザーの下に 2 つのロールを作成します。OWB\_OWBDesignRepositoryUser ロールおよび OWBR\_OWBDesignRepositoryUser ロールです。たとえば、SQL\*Plus で次のように入力します。

```
connect owb_design/owb_design;
```

```
create role OWB_owb_design;
```

```
create role OWBR_owb_design;
```

7. Oracle のインポート・ユーティリティを使用して、次のように入力して古い設計メタデータ DMP ファイルを新しい Warehouse Builder Design Repository ユーザーにインポートします。

```
imp OWBDesignUserName/OWBDesignUserPassword
@New_dbTNSConnection
FILE=OWBDesignUserName.dmp LOG=OWBDesignUserName.log
```

たとえば、SQL\*Plus で次のように入力します。

```
imp owb_design/owb_design@old_server FILE=owb_design.dmp
LOG=owb_design.imp.log
```

### 3.2.3.2 ランタイム環境の移行

ランタイム環境の移行には、次が手順を実行します。

- ターゲット・スキーマのエクスポートと新しいランタイム環境の作成
- 新しいデータベース・インスタンスへの外部ディレクトリ参照のコピー
- 新しいデータベース・インスタンスへのターゲット・スキーマのインポート

ランタイム環境に対してこれらの3つ手順を完了した後、この章の残りの部分を続行します。必ず、第3.4.2.1項「Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの監査データのアップグレード」の手順に従って、ランタイムのアップグレードを完了してください。

#### 3.2.3.2.1 ターゲット・スキーマのエクスポートと新しいランタイム環境の作成

最初に Warehouse Builder の現行バージョンからランタイム・データをエクスポートし、新しい Warehouse Builder Runtime Repository にインポートします。

ランタイム・データをエクスポートしてインポートするには、次の手順を実行します。

1. Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) または Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x) の Oracle Export を使用して、スキーマごとに次のコマンドを使用して古いターゲット・スキーマを DMP ファイルにエクスポートします。

```
exp OldOWBTargetUserName/OldOWBTargetUserPassword@
Old_DBTNSConnection Owner=OldOWBTargetUserName
FILE=OldOWBTarget.dmp LOG=OldOWBTarget.log
```

OldOWBTargetUser は以前のバージョンの Warehouse Builder での Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーを表します。

たとえば、次のように入力します。

```
exp owb_target/owb_target owner=owb_target FILE=owb_target.dmp
LOG=owb_target.log
```

2. 古い各 Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーのすべての表領域を特定します。

Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4.x) または Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x) の SQL\*Plus に Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーとして接続し、次のコマンドを入力します。

```
select distinct TABLESPACE_NAME from user_segments;
```

次のように入力し、古い Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーのデフォルトおよび一時表領域を確認します。

```
select DEFAULT_TABLESPACE, TEMPORARY_TABLESPACE from
user_users;
```

3. Oracle Database 10g インスタンスに、手順 2 で以前のインスタンスからリストした表領域を作成します。
4. 第 2.4.1 項の手順に従って、Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) の Runtime Assistant を使用して新しい Runtime Repository および Runtime Access User を作成します。

新しい Runtime Repository と Runtime Access User に対して指定した名前と表領域が、以前の Oracle Database インスタンスの名前と表領域に一致していることを確認します。デフォルト表領域と一時表領域の両方が以前のバージョンと一致する必要があります。

5. Oracle Database 10g で、SYS ユーザーとして SQL\*Plus に接続し、各ターゲット・スキーマを作成し、権限をそれに付与します。

新しいスキーマそれぞれに、以前のバージョンの Warehouse Builder ターゲット・スキーマと同じ名前、同じデフォルト・データ表領域、および同じ一時表領域が割り当てられていることを確認します。

作成したターゲット・スキーマそれぞれに対して、SQL\*Plus で次のコマンドを入力します。

```
connect SYS/SYS as sysdba;

create user OldOWBTargetSchemaUser identified by
OldOWBTargetSchemaPassword default tablespace users temporary
tablespace temp;

SET DEFINE %

define user=OldOWBTargetSchemaUser

@NewOWB_ORACLE_HOME%owb%rtasst%warehouse_system_rights.sql

@NewOWB_ORACLE_HOME%owb%rtasst%xmltk_grant.sql
```

6. Oracle Database 10g で、SQL\*Plus に Warehouse Builder Runtime Repository ユーザーとして接続し、WB\_RT\_MAPAUDIT に対する権限を各ターゲット・スキーマ・ユーザーに付与します。

SQL\*Plus で次のコマンドを入力します。

```
grant execute on WB_RT_MAPAUDIT to OldOWBTargetSchemaUserName;
```

### 3.2.3.2 新しいデータベース・インスタンスへの外部ディレクトリ参照のコピー

以前の Warehouse Builder 環境に外部ディレクトリがある場合は、この項の手順を完了します。

外部ディレクトリには 2 種類の要素があります。論理要素と物理要素です。論理要素は、データベース内にある、そのデータベースの外部ディレクトリへの参照です。部分的なデータベースのエクスポートとインポートでは、現行の Oracle Database にあるこれらの参照が新しい Oracle Database インスタンスに自動的に移動されることはありません。この項で示す手順に従って手動で移動する必要があります。外部ディレクトリの物理要素については、この章の第 3.4.2.2 項で説明します。

Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.0.x 環境に外部表がある場合は、次の手順に従って、外部ディレクトリへの参照を Oracle Database の新しいインスタンスに移行します。

各ターゲット・スキーマ・ユーザーの外部ディレクトリを Oracle Database 10g の新しいインスタンスに移行するには、次の手順に従います。

1. `OWB_ORACLE_HOME%owb%mig%gen_ext_dirs.sql` を見つけて、そのファイルを以前のバージョンの Oracle Database をホスティングしているコンピュータ上の一時的なロケーションにコピーします。
2. SQL\*Plus で、各 Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーとして接続し、`TEMP%gen_ext_dirs.sql` を実行します。
3. SQL\*Plus デフォルト・ディレクトリ（通常、`ORACLE_HOME%bin`）に生成された `ext_dirs.sql` ファイルを見つけます。
4. `ext_dirs.sql` ファイルを、Oracle Database 10g をホスティングしているコンピュータ上の一時的なロケーションに移動します。
5. SQL\*Plus で、各 Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) ターゲット・スキーマ・ユーザーとして接続し、`ext_dirs.sql` を実行します。

### 3.2.3.3 新しいデータベース・インスタンスへのターゲット・スキーマのインポート

Oracle Import を使用して、作成した新しいユーザーにターゲット・スキーマ・ファイルをインポートします。

ターゲット・スキーマをインポートするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Import を使用して、以前のバージョンの Warehouse Builder からエクスポートしたターゲット・スキーマ DMP ファイルを、第 3.2.3.2.1 項で作成した新しいターゲット・スキーマ・ユーザーにインポートします。次のコマンドを入力します。

```
imp OldOWBTargetUserName/OldOWBTargetUserPassword@
New_DBTNSConnection FILE=OldOWBTarget.dmp LOG=NewOWBTarget.log
```

`OldOWBTargetUser` は以前のバージョンの Warehouse Builder での Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・ユーザーを表します。

たとえば、次のように入力します。

```
imp owb_target/owb_target@New10gConnection FILE=owb_target.dmp
LOG=c:\temp\owb_target_import.log
```

- インポート・コマンドで名前とロケーションを指定したインポート・ログ・ファイルを調べます。

ログ・ファイルの最後の行が "Import terminated successfully without warnings" になっている場合のみ、この手順の残りの部分を続行します。

ログ・ファイルの最後の行が "Import terminated unsuccessfully" となっている場合は、手順の残りの部分を続行する前に、すべてのインポート・エラーを修正する必要があります。

- インポートするターゲット・スキーマごとにこれらの手順を繰り返します。

## 3.3 設計メタデータのアップグレード

開始する前に、完全なデータベース・バックアップを作成します。さらに、すべての Warehouse Builder プロジェクトに対してメタデータのエクスポート (MDL) ファイルを作成します。これらのバックアップは、すべてのアップグレード処理を完了し、テストするまで保持します。

実行する手順は、既存のバージョンの Warehouse Builder によって異なります。

- [Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からの設計メタデータのアップグレード \(3-8 ページ\)](#)
- [Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの設計メタデータのアップグレード \(3-10 ページ\)](#)

### 3.3.1 Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からの設計メタデータのアップグレード

Warehouse Builder 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、Oracle Database をアップグレード済であるかどうかに関係なく次の手順に従います。設計メタデータを、以前のバージョンの Warehouse Builder から MDL ファイルにエクスポートし、新しいバージョンの Warehouse Builder を使用して、新しい Design Repository を作成し、それにメタデータをインポートする必要があります。

#### 3.3.1.1 以前のリリースの Warehouse Builder からの設計メタデータのエクスポート

移行する各プロジェクトまたはコレクションを Metadata Loader (MDL) ファイルにエクスポートします。メタデータのエクスポートの詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

---

**注意：** アップグレードの際は、Metadata Loader (MDL) を使用してメタデータのエクスポートとインポートを実行する必要があります。  
Warehouse Builder のアップグレードでは、バック・エンド・データベース・コマンドを使用してエクスポートまたはインポートされたファイルはサポートされません。

---



メタデータを MDL ファイルにエクスポートするには、次の手順に従います。

1. Warehouse Builder Client の旧バージョンを使用して、エクスポートするプロジェクトを選択します。
2. 「プロジェクト」メニューの「メタデータのエクスポート」を選択します。

Metadata Loader によって、エクスポートされた MDL ファイルにパスとファイル名が割り当てられます。エクスポートしたすべてのデータについて、パスとファイル名を記録します。メタデータのエクスポートの詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 3.3.1.2 新規の Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) Design Repository の作成

第 2.3 項「Repository Assistant での Design Repository のインストール」の手順に従って、新しい Warehouse Builder Design Repository を作成します。

### 3.3.1.3 Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) への設計メタデータのインポート

新しいソフトウェアをインストールしたら、設計メタデータを新バージョンの Warehouse Builder にアップグレードおよびインポートする必要があります。メタデータのインポートの詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

---

**注意：** Warehouse Builder のアップグレードでは、バック・エンド・データベース・コマンドを使用してエクスポートまたはインポートされたファイルはサポートされません。

---

新しい Warehouse Builder リポジトリにメタデータをインポートしてアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 新しい Warehouse Builder コンソールで、「プロジェクト」メニューから「メタデータのインポート」→「ファイル」を選択します。
2. 以前のリポジトリからエクスポートしたデータのパスとファイル名を指定します。「インポート」を選択します。

このファイルが現行バージョンの Warehouse Builder のものであれば、「メタデータのインポート進行状況」パネルが表示されます。このダイアログには、インポートまたはスキップされたオブジェクト・タイプとそのタイプごとの数が表示されます。インポート処理の詳細を表示するには、「ログ・ファイルの表示」をクリックします。

Warehouse Builder の旧バージョンのものであることが検出されると、「Metadata のアップグレードの確認」ダイアログが表示されます。Warehouse Builder は自動的に、MDL ファイルを現行バージョンにアップグレードしてからインポートします。

3. 「OK」をクリックすると、ファイルが自動的に現行バージョンにアップグレードされ、Warehouse Builder にインポートされます。「Metadata Loader のアップグレード・ユーティリティ」ダイアログが表示されます。ここにファイル名とログ名を入力します。
  - **移行済ファイル名：**アップグレードされた新しい MDL ファイルのパスと名前を指定します。「参照」ボタンをクリックして、ファイルの移行先を指定します。
  - **ログ・ファイル：**アップグレード処理中に MDL で作成されるログのパスと名前を指定します。「参照」ボタンをクリックして、ファイルの移行先を指定します。
  - アップグレードとインポートを続行する場合は、「OK」をクリックします。

ファイルのアップグレードとインポートを中止する場合は、「取消」をクリックします。MDL File Upgrade Utility を使用すると、ファイルを手動でアップグレードできます。詳細は、付録 D「MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード」を参照してください。

---

---

**注意：**メタデータは、「一致基準」オプションとして「ユニバーサル ID」を使用してインポートする必要があります。

---

---

## 3.3.2 Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの設計メタデータのアップグレード

Oracle Warehouse Builder リリース 9.0.4.x または 9.2.x から現行リリースにアップグレードする場合、必要に応じて Oracle Database をアップグレードできます。Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする場合は、Oracle Database 10g にアップグレードすることを強くお勧めします。

Oracle Database をアップグレードするかどうかに関係なく、次のいずれかの方法で設計メタデータをアップグレードする必要があります。

- **自動アップグレード・スクリプト：**第 3.3.2.1 項の説明のように、このリリースの Warehouse Builder に含まれているスクリプトの 1 つを実行することによって設計メタデータをアップグレードできます。
- **メタデータのエクスポートとインポート：**古いバージョンの Warehouse Builder の場合はスクリプトによるアップグレードではなく、第 3.3.1 項で説明するように設計メタデータをエクスポートおよびインポートすることを選択します。この方法では、設計メタデータを、以前のバージョンの Warehouse Builder から MDL ファイルにエクスポートし、新しいバージョンの Warehouse Builder を使用して、新しい Design Repository を作成し、それにメタデータをインポートします。

### 3.3.2.1 Warehouse Builder 設計メタデータの自動アップグレード・スクリプト

Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x 設計メタデータをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 自動アップグレード・スクリプトを実行します。使用するスクリプトは、どのバージョンの Warehouse Builder からアップグレードするかによって異なります。
  - Warehouse Builder 9.0.4.x からアップグレードする場合は、次のスクリプトを実行します。
    - Windows の場合は、`OWB_ORACLE_HOME%owb%bin%win32` に移動し、`DTupg904to10g.bat` を実行します。
    - UNIX の場合は、`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`DTupg904to10g.sh` を実行します。
  - Warehouse Builder 9.2.x からアップグレードする場合は、次のスクリプトを実行します。
    - Windows の場合は、`OWB_ORACLE_HOME%owb%bin%win32` に移動し、`DTupg92to10g.bat` を実行します。
    - UNIX の場合は、`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`DTupg92to10g.sh` を実行します。

スクリプトでは、新しい Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) 環境を示す 7 つのパラメータの指定を求められます。

- **ホスト名、ポート番号およびサービス名：**新しい Oracle Database インスタンスに移行しない場合、最初の 3 つのパラメータは現行 Design Repository への接続文字列です。移行する場合、新しく作成された Design Repository への接続情報を入力します。
- **sys ユーザー名とパスワード：**sys アカウント情報。
- **ユーザー名とパスワード：**これらの最後の 2 つのパラメータは、新しい Design Repository 用です。
- **索引の表領域：**Warehouse Builder 9.0.4.x からアップグレードする場合、スクリプトによって索引の表領域の名前が求められます。



2. ログ・ファイルにエラーがないかを調べます。
  - Windows の場合、`OWB_ORACLE_HOME\owb\reposasst\upg\LOG.TXT` を調べます。
  - UNIX の場合、`OWB_ORACLE_HOME/owb/reposasst/upg/LOG.TXT` を調べます。

## 3.4 ランタイム・データのアップグレード

この手順では、新しい Runtime Repository が、配布および実行されるオブジェクトの正しいステータス、履歴、ロケーションの詳細、およびバージョン番号を示すようにランタイム・データをアップグレードします。

実行する手順は、既存のバージョンの Warehouse Builder によって異なります。

- [Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からのランタイム・データのアップグレード \(3-11 ページ\)](#)
- [Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からのランタイム・データのアップグレード \(3-13 ページ\)](#)

### 3.4.1 Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からのランタイム・データのアップグレード

Warehouse Builder 9.0.3.x 以下からアップグレードする場合、古いターゲット・スキーマから、または現行リリースのターゲット・スキーマにデータを移行する必要があります。

最初に、[第 2.4 項](#)の手順に従って、Runtime Repository および 1 つ以上のターゲット・スキーマをインストールします。その後、次の 3 つの方法から選択して、古いランタイム環境から、作成した新しいターゲット・スキーマにデータを移行します。

- [オプション 1. Warehouse Builder でのデータベース・オブジェクトの再生成](#)
- [オプション 2. Oracle Database サーバーでのデータベース・オブジェクトのエクスポートとインポート](#)
- [オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成](#)

1 つの方法を選択したら、移行するターゲット・スキーマごとにその手順を繰り返します。

#### 3.4.1.1 オプション 1. Warehouse Builder でのデータベース・オブジェクトの再生成

この方法では、1 回の移行に Warehouse Builder インタフェースを使用します。この方法は、Warehouse Builder の初級および中級ユーザーにお勧めします。ただし、古い Warehouse Builder 環境が推奨セットアップに準拠していることが前提です。

[表 3-1](#) では、この方法の利点と欠点を示します。

**表 3-1 Warehouse Builder インタフェースでの移行の利点と欠点**

結論	説明
利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>完全性</b>: 移行が完全に行われます。古いシステムを完全に削除できます。</li> <li>■ <b>簡単明瞭</b>: 完全に移行するための最も簡単な方法です。</li> <li>■ 配布監査が最新です。</li> </ul>
欠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>時間がかかる</b>: 手間がかかります。</li> <li>■ <b>コピー環境が必要</b>: 古いシステムを削除するまで、データを複製しておく必要があります。</li> </ul>

Warehouse Builder インタフェースを使用してデータを移行するには、次の手順に従います。

1. アップグレードされた Warehouse Builder Client のデプロイメント・マネージャで、データベース・オブジェクトの新しいロケーションを登録します。
2. 一度に1つずつ、各ターゲット・モジュールを選択し、「デフォルト・アクション」をクリックします。各オブジェクトはこのバージョンに対しては新規なので、デフォルト・アクションは作成です。
3. 「生成 / 配布」をクリックします。ステップ 4～7 を実行して、データを移行します。
4. 古いターゲット・スキーマを指すソース・モジュールを作成します。
5. ソースである古いターゲット・スキーマから抽出し、新しいターゲット・スキーマ・オブジェクトにロードする、単純なマッピングを作成します。
6. これらの移行マッピングを配布し、1回だけ実行します。1対1の移行が行われたことをテストで確認します。
7. テストの結果に問題がなければ、その1回だけの移行マッピングと、古いターゲット・スキーマを指すソース・モジュールを削除します。

ロケーションの登録、ソース・モジュールとターゲット・モジュールの作成、マッピングの作成および実行などの詳細な手順は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 3.4.1.2 オプション 2. Oracle Database サーバーでのデータベース・オブジェクトのエクスポートとインポート

この方法は、Warehouse Builder の上級ユーザーにお勧めします。Warehouse Builder の適切なデータベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートすることにより、データ移行をバック・エンドで実行します。

表 3-2 では、この方法の利点と欠点を示します。

表 3-2 Oracle Database を使用した移行の利点と欠点

結論	説明
利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>完全性:</b> 移行が完全に行われます。古いシステムを完全に削除できます。</li> <li>■ <b>高速:</b> 最短時間で完全に移行できます。</li> </ul>
欠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>複雑性:</b> Warehouse Builder データベース・オブジェクトについての詳細な知識が必要です。</li> <li>■ <b>配布監査結果が不正確:</b> 正確な配布監査データが得られません。既存のデータベース・オブジェクトが新規であるように示されます。この欠点は、Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合にのみ当てはまります。</li> </ul>

バック・エンドでデータベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートすることによって移行を実行するには、次の手順に従います。

Oracle Database サーバーのドキュメントの指示に従い、データベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートします。

自分で作成したデータベース・オブジェクトだけを使用し、Warehouse Builder で生成された Warehouse Builder オブジェクトは使用しないようにします。そのためには、データを移行してから、制約、索引、ディメンションなど、データベースで生成できるオブジェクトを再生成します。

次のようなオブジェクトは、エクスポートまたはインポートしないでください。

- ランタイム監査表やランタイム監査パッケージ。古い Warehouse Builder 環境が標準に準拠していれば、監査データに関連する表やパッケージは自分のランタイム・スキーマにあります。
- 名前が **WB** で始まるオブジェクト。このようなオブジェクトは、Warehouse Builder で生成されます。

データの移行後、すべてのマッピングを再生成します。

### 3.4.1.3 オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成

この方法を使用すると、元のデータベース・オブジェクトを指すシノニムを新しいターゲット・スキーマに簡単に作成できます。新しいターゲット・スキーマには、実際のデータかわりに、再生成されたマッピングと、データを格納するデータベース・オブジェクトのポインタだけが格納されます。

表 3-3 では、この方法の利点と欠点を示します。

表 3-3 シノニムを使用した移行の利点と欠点

結論	説明
利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>高速</b>: 完全な移行が不要であれば、短時間で実行できます。</li> </ul>
欠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>不完全性</b>: この方法では移行が完全には行われないので、古いシステムを完全に削除できません。</li> <li>■ <b>配布監査結果が不正確</b>: 正確な配布監査データが得られません。既存のデータベース・オブジェクトが新規であるように示されます。この欠点は、Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合にのみ当てはまります。Warehouse Builder リリース 9.0.4.x または 9.2.x からアップグレードする場合 (ランタイム・データのアップグレード) は、このオプションでも正確な監査データが得られます。</li> </ul>

既存のオブジェクトのシノニムを作成して移行するには、次のことを行います。

Oracle Database サーバーのドキュメントの指示に従い、古い環境にある既存のデータベース・オブジェクトを指すシノニムを新しいターゲット・スキーマに作成します。

自分で作成したデータベース・オブジェクトだけを使用し、Warehouse Builder で生成された Warehouse Builder オブジェクトは使用しないようにします。そのためには、データベース・オブジェクトのシノニムを単純に作成してから、マッピングを再生成します。

たとえば、監査表や監査パッケージのシノニムは作成しないでください。古い Warehouse Builder 環境が標準に準拠していれば、監査データに関連する表やパッケージは自分のランタイム・スキーマにあります。

## 3.4.2 Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からのランタイム・データのアップグレード

Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からランタイム・データをアップグレードするために実行するスクリプトは、新しい Runtime Repository およびターゲット・スキーマのデータベース・インスタンスを変更するのかどうかによって異なります。

### 3.4.2.1 Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x からの監査データのアップグレード

監査データをアップグレードするための手順は、同じデータベース・インスタンスを保持するのか、Oracle Database 10g にアップグレードするのか、およびどのバージョンの Oracle Database からアップグレードするのかによって異なります。

Warehouse Builder 9.0.4.x または 9.2.x から監査データのアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 自動アップグレード・スクリプトを実行します。実行するスクリプトは、同じデータベース接続を保持するのか (`host:port:servicename` が変わらないのか)、新しいデータベース・インスタンスまたはコンピュータに変更するのかによって異なります。
  - 同じデータベース・インスタンスを保持するか、完全なデータベースのエクスポートとインポート (第 3.2.1 項) またはデータベース移行ユーティリティ (第 3.2.2 項) を使用して Oracle Database 10g に移行する場合は、次のアップグレード・スクリプトを実行します。

- Windows の場合は、`OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32` に移動し、`RT_upgrade_to_10_1.bat` を実行します。

- UNIX の場合は、`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`RT_upgrade_to_10_1.sh` を実行します。

`RT_upgrade_to_10_1` スクリプトによって、いくつかのパラメータが要求されます。Runtime Repository スキーマのデータベース接続文字列 (`host:port:servicename`) および Oracle Database インスタンスの `SYS` ユーザー名とパスワードです。その後、既存の Runtime Repository のリストからアップグレードする Runtime Repository を選択します。

- データベース・インスタンスまたはデータベースをホスティングするコンピュータを変更する場合、およびランタイム環境を第 3.2.3.2 項「ランタイム環境の移行」の説明に従って移行した場合は、次の移行スクリプトを実行します。

- Windows の場合は、`OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32` に移動し、`RT_migrate_to_10_1.bat` を実行します。

- UNIX の場合は、`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`RT_migrate_to_10_1.sh` を実行します。

`RT_migrate_to_10_1` スクリプトによって、いくつかのパラメータが要求されます。元の Runtime Repository スキーマのユーザー名とパスワード、元の Runtime Repository のデータベース接続文字列 (`host:port:servicename` の形式)、新しい Runtime Repository スキーマのユーザー名とパスワード (この値は元の Runtime Repository と一致する必要があります)、および新しい Runtime Repository のデータベース接続文字列 (同様に `host:port:servicename` の形式) です。

さらに、このスクリプトでは実行時に、アップグレードするターゲット・スキーマと Oracle Workflow の Oracle Database インスタンスの `SYS` ユーザー名とパスワードが要求されます。

2. Oracle Database 10g にアップグレードしない場合、この手順は省略します。

Oracle Database 10g にアップグレードした場合は、Design Repository ユーザーとして SQL\*Plus に接続し、次のスクリプトを実行してロケーションの定義を更新します。

```
OWB_ORACLE_HOME\owb\reposst\upg\
dt_upgrade_locs_RUNTIME_REPOSITORY_USER_NAME.sql
```

3. ログ・ファイルにエラーがないかを調べます。

- Windows の場合、`OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\admin\rtupgrade.log.xx` を調べます。
- UNIX の場合、`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/admin/rtupgrade.log.xx` を調べます。

4. アップグレード・スクリプト (`RT_upgrade_to_10_1`) を実行済の場合はこの手順を省略します。

移行スクリプト (`RT_migrate_to_10_1`) を実行済の場合は、ここで Warehouse Builder クライアントを起動し、Runtime Repository 接続を編集して、アップグレードされたランタイム接続情報を参照するようにする必要があります。

5. Oracle8i リリース 3 (8.1.7.4) から Oracle Database 10g にアップグレードした場合、Warehouse Builder クライアントのデプロイメント・マネージャでロケーションを再登録する必要があります。

Runtime Repository 接続の操作またはロケーションの登録の詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 3.4.2.2 新しいデータベース・インスタンスへのフラット・ファイルと外部ディレクトリのコピー

この項の手順は、次の両方に該当する場合にのみ実行します。

- Oracle Database 10g を以前のバージョンの Oracle Database をホスティングしているコンピュータから別のコンピュータに移動した場合。

および

- 以前の Warehouse Builder 環境のフラット・ファイルまたは外部表がある場合。

これらの両方に該当する場合、次のオブジェクトを、以前のインスタンスの Oracle Database をホスティングするコンピュータから、新しいインスタンスをホスティングするコンピュータにコピーする必要があります。

- **フラット・ファイル**: SQL\*Loader によって使用されるフラット・ファイルを、以前のインスタンスの Oracle Database をホスティングするコンピュータから新しいインスタンスをホスティングするコンピュータにコピーします。
- **外部ディレクトリ**: すべての外部ディレクトリを、以前のインスタンスの Oracle Database をホスティングするコンピュータから、Oracle Database 10g が常駐するコンピュータにコピーする必要があります。必ず同一のファイル・システム・ディレクトリを再作成します。

外部ディレクトリには 2 種類の要素があります。論理要素と物理要素です。第 3.2.3.2 項は論理要素についての説明で、これを必要とするユーザーは、部分的なデータベースのエクスポートとインポートのオプションを選択してデータベースを移動するユーザーのみです。この項では、以前のインスタンスの Oracle Database をホスティングするコンピュータから、新しいインスタンスをホスティングするコンピュータに物理ディレクトリ構造をコピーします。

## 3.5 新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布

Oracle Warehouse Builder リリース 9.0.4.x または 9.2.x からアップグレードする場合は、第 3.4 項「ランタイム・データのアップグレード」の手順を実行していれば、この手順は省略できます。

Oracle Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、マッピングを再配布する必要があります。アップグレードされたバージョンの Warehouse Builder では、ランタイム・アーキテクチャが変更されます。この変更を生成コードに反映するには、マッピングを再配布します。マッピングの再配布後は、古いマッピングを使用しないでください。

たとえば、再配布によって、マッピングは確実に、正しい監査パッケージを参照するようになります。さらに、再配布によって、Warehouse Builder の新しいバージョンで新しいコード生成機能を利用できるようになります。

マッピングの配布手順は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。再配布後、マッピングをテストして、引き続き動作することを確認してください。

## 3.6 新機能を利用するためのマッピング構成の更新

マッピングの再配布後、各マッピングの構成を更新して、アップグレードされたバージョンの Warehouse Builder で新機能を利用できるようにします。

この項の手順を省略するかどうかは、次の基準で判断してください。

- Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、この項の手順を実行する必要があります。
- リリース 9.0.4.x または 9.2.x からアップグレードする場合、リリース 9.0.4.x または 9.2.x よりも前のリリースから移行したときにマッピング構成を更新していない場合にのみ、この項の手順を実行する必要があります。
- リリース 9.0.4.x または 9.2.x が Warehouse Builder の最初のインストールであった場合や、それらの2つのリリースのいずれかに移行するときにこれらの手順をすでに実行した場合は、この手順を省略できます。

マッピング構成を更新するには、Warehouse Builder インタフェースを使用するか、Oracle Metabase (OMB) Plus スクリプト・ユーティリティで、すべてのマッピングを更新するスクリプトを実行します。

**Warehouse Builder インタフェースを使用して各マッピングの構成を更新するには、次の手順を実行します。**

1. アップグレードされた Warehouse Builder クライアントで、各マッピングを右クリックし、「構成」を選択します。
2. 「構成プロパティ」ボックスで、「ソースとターゲット」ノードを展開します。
3. 「ソースとターゲット」ノードで、次の操作を実行します。
  - 「スキーマ」構成パラメータ・フィールドの内容を削除します。
  - 「データベース・リンク」構成パラメータ・フィールドの内容を削除します。
4. 構成プロパティを変更した各マッピングを再配布して、新しいコードを生成します。マッピングの配布手順は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle Technology Network に用意されている、すべてのマッピングを更新するスクリプトを実行することもできます。この更新スクリプトの名前は UpdMapConfig.tcl です。

**スクリプトを使用して各マッピングの構成を更新するには、次の手順を実行します。**

1. [http://otn.oracle.co.jp/sample\\_code/index.html](http://otn.oracle.co.jp/sample_code/index.html) から UpdMapConfig.tcl ファイルをダウンロードします。
2. Oracle Metabase (OMB) Plus を起動します。
3. 新しい設計リポジトリに接続します。
4. OMB Plus のコンテキストを、正しいプロジェクトとモジュールに変更します。このスクリプトは、モジュールごとに実行する必要があります。
5. OMB Plus でスクリプトを実行します。

OMB Plus プロンプトに source と入力し、その後にスクリプトのロケーションを引用符で囲んで入力します。

各バック・スラッシュに対し、2つ目のバック・スラッシュを入力して、1つ目のバック・スラッシュをエスケープします。

たとえば、スクリプトが c:\%temp にある場合は、次のように入力します。

```
source "c:\%temp%\UpdMapConfig.tcl"
```

6. OMB Plus で次のコマンドを実行して、マッピングを更新し、Design Repository に変更をコミットします。

```
owb_reset_mapping_conns
```

```
OMBCOMMIT
```

OWBCC コマンドを使用して他のターゲット・モジュールに移動し、`owb_reset_mapping_conns` コマンドを再び実行して、この手順を繰り返します。

7. 構成プロパティを変更した各マッピングを再配布して、新しいコードを生成します。マッピングの配布手順は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## 3.7 オプション : Warehouse Builder の旧バージョンの削除

アップグレードのテストが完了し、動作に問題がなければ、古いシステムを段階的に削除できます。この手順は、[第 3.6 項「新機能を利用するためのマッピング構成の更新」](#)の手順と並行して実行できます。

---

---

**注意：** 監査データをアップグレードしたときに[第 3.4.1.3 項「オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成」](#)に従った場合は、古いシステムの削除は慎重に行ってください。作成したシノニムが指しているデータベース・オブジェクトを削除しないでください。

---

---

古いシステムを段階的に削除するには：

1. バック・エンドで作成したデータベース・オブジェクトを削除します。詳細は、Oracle Database Server に関するドキュメントを参照してください。
2. 旧バージョンの Warehouse Builder ソフトウェアを削除します。削除するバージョンの Warehouse Builder に付属している削除手順を実行してください。





---

## Warehouse Builder コンポーネントの削除

この章では、Warehouse Builder コンポーネントを削除する手順を説明します。複数またはすべてのコンポーネントを削除する場合は、この章で説明する順序に必ず従ってください。

この章では、実際の順序に合わせて削除ステップを記載します。

- [ステップ 1. Oracle Application Server からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除 \(4-2 ページ\)](#)
- [ステップ 2. Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除 \(4-2 ページ\)](#)
- [ステップ 3. Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除 \(4-3 ページ\)](#)
- [ステップ 4. Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除 \(4-3 ページ\)](#)
- [ステップ 5. Oracle Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除 \(4-4 ページ\)](#)

## 4.1 ステップ 1. Oracle Application Server からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除

Warehouse Builder Design Browser または Warehouse Builder Runtime Audit Browser を Oracle Application Server に統合した場合のみ、この手順を実行します。Warehouse Builder Browser Assistant を実行してこれらのブラウザをインストールしていない場合は、この項の手順を実行する必要はありません。

これらのブラウザを Oracle Application Server にインストールするための第 2.5.3 項「(オプション) Oracle Application Server との統合」の手順を実行していない場合は、Design Browser と Runtime Audit Browser のクライアントのみを実行しています。これらのブラウザ・クライアントのインストールおよび削除は、Oracle Universal Installer で Design Time をインストールするときに自動的に行われます。

Oracle9iAS から Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. Warehouse Builder Browser Assistant を起動します。

**Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Browser Assistant」を選択します。

**UNIX の場合:** シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `browserasst.sh` を実行します。

2. 「Warehouse Builder Browser Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「OWB Design Browser と OWB Runtime Browser を削除します」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除します。

## 4.2 ステップ 2. Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除

ターゲット・スキーマ・ユーザーを削除する場合は、まずそのユーザーからターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除する必要があります。その後、SQL\*Plus を使用してユーザーを削除できます。

---

**注意:** ターゲット・スキーマを削除すると、ウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブを実行するオブジェクトが削除されます。ターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除する場合は、Warehouse Builder Runtime Assistant ではなく、Oracle Enterprise Manager の使用をお勧めします。

---

Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。

**Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB\_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Runtime Assistant」を選択します。

**UNIX の場合:** シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `runtimeinst.sh` を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。

3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「既存の Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトの削除」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトを削除します。

---

**注意：** Warehouse Builder Runtime Assistant では、ユーザー定義のオブジェクトは Runtime Repository スキーマから削除されません。

---

## 4.3 ステップ 3. Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除

Runtime Repository ユーザーを削除するには、この項で説明するように、まず、Warehouse Builder Runtime Assistant を実行して既存の Runtime Repository 自体を削除します。その後、SQL\*Plus を使用してユーザーを削除できます。

Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。

**Windows の場合：**「スタート」→「プログラム」→「OWB\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。

**UNIX の場合：**シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `runtimeinst.sh` を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「既存の Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトの削除」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトを削除します。

---

**注意：** Warehouse Builder Runtime Assistant では、ユーザー定義のオブジェクトは Runtime Repository スキーマから削除されません。

---

## 4.4 ステップ 4. Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除

Warehouse Builder Design Repository を削除するには、次の手順を実行します。

1. Warehouse Builder Repository Assistant を起動します。

**Windows の場合：**「スタート」→「プログラム」→「OWB\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Repository Assistant」を選択します。

**UNIX の場合：**シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `repositinst.sh` を実行します。

2. 「OWB Repository Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「既存の Warehouse Builder リポジトリの削除」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Warehouse Builder Design Repository オブジェクトを削除します。

## 4.5 ステップ 5. Oracle Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除

他の Warehouse Builder コンポーネントを削除するには、Oracle Universal Installer を再起動する必要があります。リポジトリを削除する場合は、必ず Warehouse Builder Client ソフトウェアより先に削除してください。

Oracle Database サーバーに Warehouse Builder をインストールした場合は、Oracle ソフトウェアを削除する前に、次の手順を実行する必要があります。

- 作成したすべての Runtime Repository をこのコンピュータから削除します。
- 次のようにして、Name and Address Server (NAS) を停止します。

**Windows の場合:** `OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32\NASStop.bat` を実行します。

**UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix/NASStop.sh` を実行します。

コンピュータから Warehouse Builder を削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。ディレクトリを手動で削除して Warehouse Builder を削除しようとすると、Oracle Universal Installer の操作に被害を与える可能性があります。

**既存の Oracle ソフトウェアを削除するには、次の手順を実行します。**

1. Oracle Universal Installer を起動します。
2. OUI の「ようこそ」ページで「インストール済みの製品」をクリックすると、そのシステムにインストールされているすべての Oracle 製品の一覧が表示されます。
3. 削除する既存の Oracle 製品を、そのコンポーネントとともに選択し、「削除」をクリックします。
4. Warehouse Builder を削除しても、パス `OWB_HOME\owb\j2ee\owbb` が残っている場合は、`owbb` ディレクトリを削除します。

---

---

## Oracle Database の準備

Warehouse Builder をインストールする前に、次の構成パラメータを設定して Oracle Database を準備する必要があります。

- [Design Repository データベース・インスタンスのパラメータ \(A-2 ページ\)](#)
- [Runtime Repository データベース・インスタンスのパラメータ \(A-2 ページ\)](#)
- [Oracle Application Server データベースのパラメータ \(オプション\) \(A-6 ページ\)](#)

## A.1 Design Repository データベース・インスタンスのパラメータ

Warehouse Builder Design Repository データベースは、標準の Oracle Database Database 初期化パラメータで実行されます。

表 A-1 は、パフォーマンスを保証するための最初の目安となる初期化パラメータを示しています。

**表 A-1 Design Repository インスタンス用初期化パラメータ**

初期化パラメータ	設定値	コメント
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE	この設定は、次の connect 文を動作させるために必要です。  connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB as sysdba;  ただし、このパラメータを EXCLUSIVE ではなく NONE に設定した場合は、07_DICTIONARY_ACCESSIBILITY パラメータを次の行のように設定します。
07_DICTIONARY_ACCESSIBILITY	TRUE	この設定は、前の行で推奨するように REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE パラメータを EXCLUSIVE に設定できない場合に使用する代替です。REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE パラメータを NONE に設定した場合は、07_DICTIONARY_ACCESSIBILITY パラメータを代替として設定します。これによって、SYS ユーザーに接続するときに次の文が機能します。  connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB
OPEN_CURSORS	300	これより高い値も設定できます。
DB_BLOCK_SIZE	8192	このパラメータはデータベースの作成時に設定され、変更できません。  Warehouse Builder では、8192 を超える値は、Design Repository にはお薦めしません。
DB_CACHE_SIZE	104877600	これは 100MB です。
COMPATIBLE	10.0	初期化パラメータにこのパラメータがない場合は、最後に追加してください。
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE	この設定は、SYS ユーザーに SYSDBA 権限を必ず付与するために必要です。
LOCK_SGA	TRUE	SGA の設計を物理メモリーにロックすることをお薦めします。

## A.2 Runtime Repository データベース・インスタンスのパラメータ

Warehouse Builder Runtime コンポーネントをサポートするには、データ・ウェアハウスを配置するシステムの Oracle Database Enterprise Edition インスタンスを変更する必要があります。

---

**注意：** Warehouse Builder を Oracle8i にインストールする場合、Warehouse Builder ランタイム・インスタンスを構成し、供給されたランタイム・パッケージをコンパイルするための非システム・ロールバック・セグメントを少なくとも 1 つ持つようにする必要があります。Warehouse Builder では、サーバーが管理するロールバック・セグメントの使用をお薦めします。

---

表 A-2 はデータベース構成パラメータを示しています。

表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ

初期化パラメータ	設定値	コメント
DB_BLOCK_SIZE	16384	このパラメータはデータベースの作成時に設定されず。変更しないでください。  推奨値は 16384 です。サーバーで使用できるブロック・サイズがこれより小さい場合は、使用可能な最大サイズを設定してください。コンピュータの RAM が 512MB より少ない場合は、9600 をお勧めします。
OPTIMIZER_MODE	all_rows	使用可能な他のオブティマイザ・モードは、『Oracle Database パフォーマンス・チューニング・ガイド』、および『Oracle データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。
LOG_BUFFER	コメントを参照	512K より大きい値に設定し、CPU 数の 128K 倍にする必要があります。
SGA_TARGET	500MB ~ 1GB	コンピュータのメモリーで可能であれば、最大値、またはできるかぎり大きい値をお勧めします。  SGA_TARGET パラメータを設定した場合は、次のパラメータはサーバーによって自動的に調整されるので設定しないでください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ JAVA_POOL_SIZE</li> <li>■ DB_CACHE_SIZE</li> <li>■ LARGE_POOL_SIZE</li> <li>■ SHARED_POOL_SIZE</li> </ul> かわりに、SGA_TARGET パラメータを 0 に設定できます。これによって自動サイジング機能がオフになります。
DB_CACHE_SIZE	314632800	この設定は 300MB を意味します。この値は、システムの許容限度まで高くすることができます。  SGA_TARGET パラメータの値を設定した場合は、DB_CACHE_SIZE パラメータの値は設定しないでください。
SHARED_POOL_SIZE	52428800	推奨最小値は 50MB です。メモリーが使用可能であればこのパラメータを 100MB に増やすことをお勧めします。万が一 100MB より大きい値に設定する必要がある場合、このパラメータの調整は詳しい知識を持つ DBA が行ってください。  SGA_TARGET パラメータの値を設定した場合は、SHARED_POOL_SIZE パラメータの値は設定しないでください。
LARGE_POOL_SIZE	0	この設定によって、サーバーで LARGE_POOL_SIZE が自動的に設定されます。  前提条件: PARALLEL_AUTOMATIC_TUNING は、TRUE に設定する必要があります。  SGA_TARGET パラメータの値を設定した場合は、LARGE_POOL_SIZE パラメータの値は設定しないでください。
DB_FILE_MULTIPLE_BLOCK_READ_COUNT	16	16 は推奨値ですが、可能であれば 32 をお勧めします。
DISK_ASYNC_IO	TRUE	プラットフォームで非同期 I/O がサポートされていない場合、DBWR_IO_SLAVES を 4 などの正数に設定し、非同期 I/O をシミュレートします。

表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ (続き)

初期化パラメータ	設定値	コメント
DB_WRITER_PROCESSES	n	n は CPU の数を表します。このパラメータ値を 8CPU ごとに 1 ずつ増やします。CPU が 8 個未満の場合は、DB_WRITER_PROCESSES を 1 に設定します。
DBWR_IO_SLAVES	n	n は CPU の数を表します。 次のような場合は、このパラメータを 0 に設定して無効にします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>DB_WRITER_PROCESSES の値が 1 より大きい場合。この場合、DBWR_IO_SLAVES パラメータを調整してもその効果はありません。</li> <li>CPU が 1 つのみで、プラットフォームで非同期 I/O がサポートされていない場合。</li> </ul>
PGA_AGGREGATE_TARGET	314572800	これは 300MB です。ソートや集計を頻繁に行う場合は、この値を増やすことができます。ただし、PGA_AGGREGATE_TARGET は、空き物理メモリー・サイズより小さくする必要がありません。
PARALLEL_ADAPTIVE_MULTI_USER	TRUE	このパラメータの前提条件として、PARALLEL_AUTOMATIC_TUNING は TRUE に設定します。
PLSQL_OPTIMIZE_LEVEL	2	Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の PL/SQL コンパイラは PL/SQL コードに対して、より綿密な最適化を実行できます。
LOG_CHECKPOINT_TIMEOUT	3000	この設定で、チェックポイントを実行するタイムアウトがデフォルトの 3 分間から 5 分間に増加します。
STATISTICS_LEVEL	TYPICAL	
UNDO_MANAGEMENT	AUTO	この設定では、ロールバック・セグメントを作成する必要はありません。
ENQUEUE_RESOURCES	3000 以上 (大きな MDI ファイルを インポート する場合)。	エラーなしでインストールを完了するには、最小設定の「1」が必要です。
OPEN_CURSORS	500	複数のセッションを起動する場合や、1 つのセッションで複数のマッピングか複雑なマッピングを実行する場合は、より高い値を指定できます。
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE	QUERY REWRITE オプションを使用してマテリアライズド・ビューを生成する予定である場合は、このパラメータを TRUE に設定します。
USE_INDIRECT_DATA_BUFFERS	注意を参照	このパラメータは、TRUE に設定しないでください。TRUE に設定すると、他の推奨値と競合します。
JAVA_POOL_SIZE	20MB	推奨最小値は 20MB です。  0 以外の値を SGA_TARGET パラメータに設定した場合は、JAVA_POOL_SIZE パラメータに値を設定しないでください。
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE	Warehouse Builder Runtime Repository スキーマにアクセスするか、スキーマを作成するには、SYSDBA 権限を持つ SYS アカウントを使用する必要があります。Warehouse Builder Repository ユーザーには、特定の v_\$ 表へのアクセスが必要です。これらの権限付与は、リポジトリを作成したときに SYSDBA アカウントによって行われます。この設定により、SYSDBA 権限が必ず SYS に付与されます。



表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ (続き)

初期化パラメータ	設定値	コメント
COMPATIBLE	10.0	初期化パラメータにこのパラメータがない場合は、最後に追加してください。
AQ_TM_PROCESSES	1	このパラメータは、Warehouse Builder および Oracle Workflow Advanced Queueing System の場合は必須です。
UTL_FILE_DIR	*	PL/SQL でファイル入出力に使用できるディレクトリを指定します。UTL_FILE_DIR=*と設定すると、すべてのディレクトリをファイル入出力に使用できます。個別のディレクトリを指定するには、それぞれのディレクトリに対して、このパラメータを連続した行に繰り返し指定します。  Warehouse Builder でフラット・ファイル・ターゲットを使用する場合は、このパラメータをフラット・ファイル・ターゲットを作成するディレクトリに設定し、データベース・エンジンからアクセスできるようにします (詳細は、 <a href="#">第 A.2.1 項「フラット・ファイル・ターゲットのターゲット・データ・ファイルのパスの設定」</a> を参照してください)。
WORKAREA_SIZE_POLICY	AUTO	
RESOURCE_MANAGER_PLAN	plan_name	Warehouse Builder ランタイムのリソース使用率を管理するためにリソース・プランを作成することを強くお勧めします。リソース・プランの詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。
JOB_QUEUE_PROCESSES	>10	最適な設定は 10 です。JOB_QUEUE_PROCESSES を 0 に設定した場合は、Runtime Platform Service は実行されず、Runtime Assistant がエラー・メッセージを生成します。

## A.2.1 フラット・ファイル・ターゲットのターゲット・データ・ファイルのパスの設定

フラット・ファイル・ターゲットに対するターゲット・データ・ファイルのパスを設定するには、ウェアハウス・インスタンスの `init.ora` ファイルにこのパスを設定します。UTL\_FILE\_DIR パラメータをフラット・ファイル・ターゲットのディレクトリに設定し、データベースからアクセスできるようにします。

たとえば、出力ファイルのロケーションが `D:¥Data¥FlatFiles¥File1.dat` の場合、`init.ora` ファイルの UTL\_FILE\_DIR パラメータを次のように設定します。

```
UTL_FILE_DIR = D:¥Data¥FlatFiles
```

`D:¥Data¥FlatFiles` と `E:¥OtherData` の両方など、複数の有効なファイルのロケーションの場合は、`init.ora` のパラメータを次のように設定します。

```
UTL_FILE_DIR = D:¥Data¥FlatFiles
UTL_FILE_DIR = E:¥OtherData
```

この 2 行は `init.ora` ファイル内で連続している必要があります。

次のコマンドを使用すると、ディレクトリのチェックを省略できます。

```
UTL_FILE_DIR = *
```

## A.3 Oracle Application Server データベースのパラメータ (オプション)

Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle Application Server と統合する予定の場合は、表 A-3 に示すパラメータを設定します。

**表 A-3 Oracle Application Server の初期化パラメータ**

初期化パラメータ	設定値
GLOBAL_NAMES	FALSE
OPEN_CURSORS	300
OPEN_LINK	100

---

---

## CD-ROM のマウント

この Oracle 製品は、複数の CD-ROM で配布されます。CD-ROM は Rockridge 拡張機能を持つ ISO9660 形式です。この付録では、サポートされている各プラットフォームで CD-ROM をマウントおよびアンマウントする方法を説明します。ここでは、次の項目について説明します。

- [CD-ROM のマウント \(AIX の場合\) \(B-2 ページ\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(HP-UX の場合\) \(B-2 ページ\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(Linux の場合\) \(B-3 ページ\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(Solaris の場合\) \(B-4 ページ\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(Tru64 UNIX の場合\) \(B-4 ページ\)](#)

## B.1 CD-ROM のマウント (AIX の場合)

AIX で CD-ROM をマウントするには

1. root ユーザーにスイッチします。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のコマンドを入力して、現在マウントされている CD-ROM をアンマウントし、ドライブから取り出します。

```
# umount /cdrom
```

この例では、/cdrom は CD-ROM ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 該当の CD-ROM をドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -rv cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

この例では、/dev/cd0 は CD-ROM ドライブのデバイス名で、/cdrom はマウント・ポイント・ディレクトリです。

4. Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/cdrom
```

## B.2 CD-ROM のマウント (HP-UX の場合)

HP-UX で CD-ROM をマウントするには

1. root ユーザーにスイッチします。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のコマンドを入力して、現在マウントされている CD-ROM をアンマウントし、ドライブから取り出します。

```
# /usr/sbin/umount /SD_CDROM
```

この例では、/SD\_CDROM は、CD-ROM ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 該当の CD-ROM をドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -F cdrfs -o rr /dev/dsk/cxydz /SD_CDROM
```

この例では、/SD\_CDROM は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリで、/dev/dsk/cxydz は CD-ROM デバイスのデバイス名 (たとえば、/dev/dsk/c0t2d0) です。

---

**注意:** リストされたオペレーティング・システム・バージョンでこのコマンドを使用するには、適切なパッチがそのシステムにインストールされている必要があります。

**HP-UX 11.00 の場合:** パッチ PHCO\_26449、PHKL\_26448、および PHKL\_26450 をインストールします。

**HP-UX 11i (11.11) の場合:** パッチ PHCO\_25841、PHKL\_26269、および PHKL\_28025 をインストールします。

---

4. Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/SD_CDROM
```

## B.3 CD-ROM のマウント (Linux の場合)

大部分の Linux システムでは、CD-ROM は、CD-ROM ドライブに挿入したときに自動的にマウントされます。CD-ROM が自動的にマウントされない場合、次の手順に従って手動でマウントします。

### Linux で CD-ROM をマウントするには

1. root ユーザーにスイッチします。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のいずれかのコマンドを入力して、現在マウントされている CD-ROM をアンマウントし、ドライブから取り出します。

- Red Hat:

```
# eject /mnt/cdrom
```

- UnitedLinux:

```
# eject /media/cdrom
```

これらの例では、/mnt/cdrom と /cdrom は、CD-ROM ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 該当の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
4. CD-ROM が自動的にマウントされたことを確認するには、プラットフォームに応じて次のコマンドのいずれかを入力します。

- Red Hat:

```
# ls /mnt/cdrom
```

- UnitedLinux:

```
# ls /media/cdrom
```

5. 手順 4 のコマンドで CD-ROM の内容が表示されない場合は、プラットフォームに応じて次のコマンドに類似したコマンドを入力してマウントします。

- Red Hat:

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

- UnitedLinux:

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

これらの例では、/mnt/cdrom および /media/cdrom は、CD-ROM ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

6. Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/mnt/cdrom
```

## B.4 CD-ROM のマウント (Solaris の場合)

大部分の Solaris システムでは、CD-ROM は、CD-ROM ドライブに挿入したときに自動的にマウントされます。CD-ROM が自動的にマウントされない場合、次の手順に従ってマウントします。

1. root ユーザーにスイッチします。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のコマンドを入力して、現在マウントされている CD-ROM をイジェクトし、ドライブから取り出します。

```
# eject
```

3. 最初の CD-ROM (CD 1) を CD-ROM ドライブに挿入します。

4. CD-ROM が自動的にマウントされたことを確認するには、次のコマンドを入力します

```
# ls /cdrom/cdrom0
```

5. 前のコマンドで CD-ROM の内容が表示されない場合は、次のコマンドに類似したコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -r -F hfs /dev/dsk/cxytdzs2 /cdrom
```

この例では、/cdrom は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリで、/dev/dsk/cxytdzs2 は CD-ROM デバイスのデバイス名 (たとえば /dev/dsk/c0t2d0s2) です。

6. Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

- 自動的にマウントされる CD-ROM:

```
/cdrom/cdrom0
```

- 手動でマウントされる CD-ROM:

```
/cdrom
```

## B.5 CD-ROM のマウント (Tru64 UNIX の場合)

CD-ROM をマウントするには

1. root ユーザーにスイッチします。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のコマンドを入力して、現在マウントされている CD-ROM をアンマウントし、ドライブから取り出します。

```
# /usr/sbin/umount /cdrom
```

この例では、/cdrom は CD-ROM ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 該当の CD-ROM をドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -t cdfs -o nodefperm,noversion /dev/disk/cdrom0c /cdrom
```

この例では、/cdrom は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリで、必ず指定する必要があります。/dev/disk/cdrom0c は CD-ROM のデバイス名です。

4. Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/cdrom
```

---

---

# Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール

Oracle Enterprise Manager は、Oracle Database の CD に含まれているスケジューリング・ツールです。Oracle Enterprise Manager を Warehouse Builder とともに構成すると、データ・ウェアハウスのデータのロードまたはリフレッシュを行うジョブを手動でスケジュールできます。Oracle Workflow では、Oracle Enterprise Manager ジョブ・ライブラリにあるジョブの依存性を管理できます。

この付録では、Oracle Enterprise Manager と Workflow をサーバーおよびクライアント・システム上で有効にする手順を説明します。

この付録では、次の項目について説明します。

- [Oracle Enterprise Manager の構成 \(C-2 ページ\)](#)
- [Oracle Workflow のインストール \(C-6 ページ\)](#)

このマニュアルには、重要なインストール手順の概要のみが記載されています。詳細な説明は、『Oracle Enterprise Manager Grid Control インストレーションおよび基本構成』および『Oracle Workflow 管理者ガイド』を参照してください。

## C.1 Oracle Enterprise Manager の構成

Oracle Enterprise Manager が Warehouse Builder と必ず統合されるようにするには、次の構成手順に従います。

- Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成
- Windows ユーザーの作成
- 優先接続情報の構成

### C.1.1 Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成するには、次の手順を実行します。

1. Enterprise Manager Console から、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。このウィザードでは、Warehouse Builder Repository インスタンスで、Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成します。
2. 「構成操作」 ページで「ローカルの Oracle Management Server を構成します」を選択します。
3. 「リポジトリのデータベースの選択」 ページで、次の情報を入力します。
  - ユーザー名: system
  - パスワード: manager (または適切な system パスワード)
  - サービス: oemrepos
4. 「リポジトリへのログイン情報」 ページで、次の情報を入力します。
  - ユーザー名: Oracle Enterprise Manager リポジトリをインストールするスキーマ
  - パスワード: Oracle Enterprise Manager リポジトリをインストールするスキーマのパスワード
5. 「リポジトリ・ユーザーの表領域の選択」 ページでは、新しい表領域を作成するかデフォルトの表領域を使用するかを選択できます。「次へ」をクリックします。
6. 「終了」をクリックして、この処理を終了します。
7. インストールが完了したら、次の手順で OMS を起動します。
  - Windows の場合: 「スタート」 → 「コントロール パネル」 → 「サービス」 をクリックします。
  - UNIX の場合: `$ORACLE_HOME/bin` ディレクトリにアクセスし、コマンド `oemctl start oms` を入力します。
8. Warehouse Builder ランタイムをインストールしたデータベースで、Oracle Agent サービスを開始します。
9. Warehouse Builder Client をインストールしたコンピュータで、Oracle Enterprise Manager Console を起動します。

生成されたスクリプトをジョブ・ライブラリに格納するには、Warehouse Builder で Oracle Management Server (OMS) にログオンする必要があります。このサーバーではジョブ・ライブラリを管理します。
10. Oracle Enterprise Manager の構成が終了したら、「Management Server の追加」をクリックして新規の Oracle Enterprise Management Server を設定する必要があります。
11. サービスを新たに構成している場合、「Management Server の追加」 ダイアログ・ボックスが表示されます。Warehouse Builder Design Repository サーバーのホスト名を入力します。「Management Servers」 ページで「OK」をクリックします。



12. 「Oracle Manager Server にログイン」 ページで、次の情報を入力します。
  - **管理者:** sysman (Oracle Enterprise Manager Console の最初のログイン・ユーザー名)
  - **パスワード:** oem\_temp (Oracle Enterprise Manager Console の最初のログイン・パスワード)
13. 「セキュリティの警告」画面で、次の情報を入力します。
  - **パスワード:** sysman
  - **パスワードの確認:** sysman
14. ナビゲーション・ツリーから「ノード」を選択します。右クリックし、ポップアップ・メニューから「ノードの検出」を選択します。
15. 検出ウィザードの「ノードの指定」ページで、Warehouse Builder のターゲット・ウェアハウスがあるコンピュータの名前を入力し、「次へ」をクリックして結果を表示します。

## C.1.2 Windows ユーザーの作成

Oracle Enterprise Manager で必要な権限を持つ Windows NT ユーザーを作成するには、Warehouse Builder ランタイムのデータベース・インスタンス・ホストに対して Windows NT ユーザー・マネージャを実行します。

---

**注意:** Warehouse Builder ランタイム・スキーマをホスティングするノードが UNIX システムである場合は、この手順を省略してください。UNIX 上の ORACLE ユーザーは、ジョブ・システムから要求されるすべてのジョブを実行できる権限を持つ必要があります。

---

Oracle Enterprise Manager Agent 9.2 を通じて Windows ユーザーにアクセスする場合は、ユーザーをローカルの管理者グループに追加する必要があります。

**Windows ユーザーを作成するには、次の手順を実行します。**

1. 「スタート」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」を選択します。
2. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウの「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択します。
3. 「新しいユーザー」ウィンドウで、次の情報を入力します。
  - **ユーザー名:** OEM
  - **フルネーム:** OEM Administrator
  - **説明:** バッチ・ジョブとして実行します。
  - **パスワード:** パスワードを入力します。
  - **パスワードの確認:** 再びパスワードを入力します。

「OK」をクリックします。ユーザー名のリストに新しいユーザー名が挿入されます。

4. ユーザーの権利を構成します。
  - **Windows NT の場合:**  
 ユーザー・マネージャ・コンソールから新しいユーザー名を選択し、「原則」→「ユーザーの権利」を選択します。「ユーザー権利の原則」パネルが表示されます。  
 「ユーザー権利の原則」パネルで「高度なユーザー権利の表示」ボックスを選択します。  
 「権利」フィールドのドロップダウン・リストから「バッチ ジョブとしてログオン」オプションを選択します。  
 「追加」をクリックします。「ユーザーとグループの追加」パネルが表示されます。

- **Windows 2000 および XP の場合:**
  - 「管理ツール」フォルダからローカル・セキュリティ・ポリシー・アプレットを起動します。
  - 「ローカル ポリシー」 → 「ユーザー権利の割り当て」に移動します。
  - ユーザーを「バッチ ジョブとしてログオン」権限に追加します。
- 5. 「ドメインまたはコンピュータ」 ドロップダウン・リストからこのユーザーに対するドメインを選択します。
- 6. 「ユーザーの表示」をクリックし、作成した新規 Enterprise Manager ユーザーの名前を選択します。
- 7. 「追加」をクリックしてから「OK」をクリックし、権限を追加します。

### C.1.3 優先接続情報の構成

Oracle Enterprise Manager では、Warehouse Builder ランタイム・スキーマをホスティングするシステム上のジョブをスケジュールします。Oracle Enterprise Manager でジョブをスケジュールするには、次の 2 セットのユーザー名とパスワードを構成する必要があります。

- ホスト用のセット: OEM/ パスワード
- 対応するデータベース用のセット: system/manager

これらの接続情報を初期化するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Enterprise Manager Console を起動します。
2. 「システム」メニューから「作業環境」を選択します。  
「管理者作業環境」ウィンドウが表示されます。
3. 「優先接続情報リスト」タブを選択します。  
ターゲット名とタイプのリストがパネルに表示されます。各リソース・ノードには、ノード、データベースおよびリスナーの 3 つのターゲット・タイプがあります。
4. Runtime Repository スキーマをホスティングするターゲット名を選択します（ターゲット・タイプはノードです）。  
「接続情報」パネルが表示されます。
5. Oracle Enterprise Manager ホストへのアクセスを提供するユーザー名とパスワードを入力します。  
Windows NT ホスト・システムを実行している場合は、これは前の項で Windows NT ホスト用に作成したユーザーになります。  
UNIX ホスト・システムを実行している場合は、これはステップ 2 で指定した UNIX 上の ORACLE ユーザーになります。
6. Runtime Repository のターゲット名を選択します（ターゲット・タイプはデータベースです）。これは、Oracle Enterprise Manager によってデータベースに割り当てられたターゲットです。
7. このデータベースへのアクセスを提供するユーザー名とパスワードを入力します。
8. 「OK」をクリックして入力内容をコミットします。

これで、Oracle Enterprise Manager で Warehouse Builder を実行するように構成されました。Oracle Enterprise Manager にロード・ジョブ (TCL スクリプト) またはスケジュール・ジョブを登録する前に、Enterprise Manager をホスティングするマシンおよびターゲット・ウェアハウスをホスティングするマシン上の必要なサービスをすべて開始する必要があります。

Oracle Enterprise Manager のホスト上では、次のサービスを開始する必要があります。

- Oracle Enterprise Manager Server
- Oracle Agent

ターゲット・ウェアハウスのホスト上では、次のサービスを開始する必要があります。

- Oracle Agent

[Oracle Workflow のインストール](#)に進んでインストールを続行します。

## C.1.4 Oracle Developer Suite 用の Enterprise Manager の構成

この項の手順は、次の条件の両方に該当する場合のみ実行します。

- Enterprise Manager を使用して PL/SQL プロセスを実行する。  
PL/SQL プロセスに Enterprise Manager を使用するのはオプションである。  
および
- Oracle9i Enterprise Manager リリース 1 (9.1) を使用している。  
現在 Enterprise Manager を使用していない場合、または今後のリリースの Enterprise Manager を使用する予定がある場合は、この手順を省略できます。

Warehouse Builder には、Oracle Developer Suite 用の `set_oem_home` SQL スクリプトが用意されています。このスクリプトを使用して、Enterprise Manager ジョブを使用する構成パラメータを設定します。このスクリプトは構成作業として 1 回行うだけです。新規の Enterprise Manager リポジトリをインストールする場合など、必要に応じて再び構成作業を行います。

**Oracle Developer Suite 用に Enterprise Manager を構成するには、次の手順を実行します。**

1. SQL\*Plus へ Warehouse Builder Runtime Repository ユーザーとして接続します。
2. Execute `OWB_ORACLE_HOME/owb/rtpl/sql/set_oem_home.sql` を実行します。

このスクリプトには次のパラメータが必要です。

- **P1:** 構成する Enterprise Manager のリリース (9.1 または 9.2)。
- **P2:** Warehouse Builder ランタイム・インストールが含まれたオペレーティング・システム (Windows システムがサポートされている場合は NT、UNIX システムがサポートされている場合は UNIX)。
- **P3:** Warehouse Builder ランタイム・ホーム・ディレクトリ。
- **P4:** Enterprise Manager JAR ファイルが格納されている Oracle Database ホーム・ディレクトリ。このディレクトリを有効な Oracle ディレクトリとして指定するには、このディレクトリが Warehouse Builder ランタイム・ホーム・ディレクトリと同じマシン上に存在する必要があります。このディレクトリを参照するマッピング・ドライブは使用できません。

たとえば、Microsoft Windows システムで作業しているときに、Warehouse Builder ランタイム環境が `D:\MyRuntimeHomeDir` に存在し、その環境を構成して `D:\MyOracleDatabase92Home` に存在する Enterprise Manager 9.2 JAR ファイルを使用する場合は、次のパラメータを使用してスクリプトをコールします。

```
@set_oem_home.sql 9.2 NT D:\MyRuntimeHome D:\My92DBHome
```

どの Warehouse Builder Runtime Repository の場合も、このスクリプトを 1 回実行するだけで Enterprise Manager 9.1 を構成できます。Enterprise Manager 9.2 を構成する場合はもう一度実行します。

## C.2 Oracle Workflow のインストール

Oracle Workflow が Warehouse Builder と必ず統合されるようにするには、次のインストール手順に従います。

- [Oracle Workflow Server のインストール](#)
- [Oracle Workflow Client のインストール \(オプション\)](#)

### C.2.1 Oracle Workflow Server のインストール

使用しているオペレーティング・システムの『Oracle Workflow Option Server インストレーション・ノート』に記載されている手順を注意して実行します。このインストレーション・ノートには、Workflow Monitor のセットアップに必要な手動の手順が記載されています。Workflow Monitor が使用できることを確認して、次の手順に進みます。

---

---

**注意：** Oracle Workflow サーバーで Oracle Warehouse Builder Runtime サービスを通じてアクティビティを起動できるようにするには、Oracle Workflow リポジトリ・ユーザーに EXECUTE ANY PROCEDURE システム権限を付与する必要があります。

---

---

### C.2.2 Oracle Workflow Client のインストール (オプション)

Oracle Warehouse Builder での Oracle Workflow Client のインストールはオプションです。これは、Oracle Workflow Client の機能が Warehouse Builder のプロセス・フロー・エディタに置き換えられているためです。ただし、Oracle Workflow に配布済の Warehouse Builder プロセスを表示する場合は、Oracle Workflow Client をインストールできます。

Warehouse Builder Client をインストールしたコンピュータに、Microsoft Windows NT 用の Oracle Workflow Client リリース 2.6.3 の CD から Oracle Workflow Client をインストールします。『Oracle Workflow Client インストレーション・ガイド』に記載されているインストール手順に従ってください。

---

## MDL File Upgrade Utility を使用した メタデータのアップグレード

以前のバージョンの Warehouse Builder から Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) にメタデータをアップグレードする場合、Metadata Loader File Upgrade Utility を使用する必要はありません。MDL ファイルを 10g リリース 1 (10.1) にインポートすると、Warehouse Builder で自動的にファイルのエクスポート元のバージョンが検出され、現行バージョンにアップグレードされます。ただし、以前のように MDL File Upgrade Utility を手動で実行して、メタデータを個別にアップグレードすることもできます。この章では、MDL File Upgrade Utility の使用方法について説明します。

MDL File Upgrade Utility を使用すると、Warehouse Builder の本稼動バージョンから作成された MDL ファイルを Warehouse Builder の最新バージョンにアップグレードできます。MDL File Upgrade ウィザードまたは MDL Command-Line Utility のいずれかを使用します。

この付録では、次の項目について説明します。

- [MDL File Upgrade Utility について \(D-2 ページ\)](#)
- [MDL File Upgrade Utility の使用 \(D-2 ページ\)](#)

## D.1 MDL File Upgrade Utility について

以前の稼働バージョンの Warehouse Builder から Oracle Warehouse Builder にメタデータをアップグレードするには、Warehouse Builder Metadata Loader File Upgrade Utility を使用します。このツールを使用すると、Warehouse Builder リリース 2.0.4.78 以上のリポジトリから作成された MDL ファイルを最新バージョンの Warehouse Builder にアップグレードできます。

MDL File Upgrade Utility を使用すると、次の稼働バージョンの Warehouse Builder から Oracle Warehouse Builder にメタデータをアップグレードできます。

- Oracle Warehouse Builder 2.0.4 および 2.05
- Oracle Warehouse Builder 2.1.1
- Oracle Warehouse Builder 3.0 および 3.1
- Oracle Warehouse Builder 9.0.2 および 9.0.3

### D.1.1 MDL File Upgrade Utility の使用

次のいずれかの方法でメタデータをアップグレードできます。

- **MDL File Upgrade ウィザード:**各プロジェクトを1つの MDL ファイルとしてエクスポートした場合は、MDL File Upgrade ウィザードを使用します。MDL File Upgrade Utility ウィザードを実行すると、ファイルは直接現行バージョンの Warehouse Builder に変換されます。
- **MDL Command-Line Utility:**1つのプロジェクトを複数の MDL ファイルとしてエクスポートした場合は、コマンドラインを使用します。また、中間のバージョンにアップグレードする場合も、コマンドライン・ユーティリティを使用します。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

#### D.1.1.1 旧バージョンからのリポジトリ・オブジェクトのアップグレード

旧バージョンの Warehouse Builder から現行バージョンの Warehouse Builder にアップグレードする場合、MDL File Upgrade Utility によりリポジトリのオブジェクトが次のように変更されます。

- **My Project:** Warehouse Builder であらかじめパッケージングされているサンプル・オブジェクトは、物理名の要件に合わせて名前が My Project から MY\_PROJECT に変更されます。
- **外部プロセス:**外部プロセスは、プロセス・フロー内の外部プロセス・アクティビティにアップグレードされます。以前のリリースのマッピングで外部プロセスを定義している場合は、MDL Upgrade Utility によりプロセス・フロー内の外部プロセスとしてオブジェクトが再定義されます。
- **ビジネス・エリア:**ビジネス・エリアは、コレクションにアップグレードされます。以前のリリースでビジネス・エリアを定義している場合は、MDL File Upgrade Utility によりビジネス・エリア名の前にモジュール名が付けられ、コレクションとして再定義されます。たとえば、REGION1 というモジュールの ORDERS というビジネス・エリアは、REGION1\_ORDERS というコレクションにアップグレードされます。
- **外部プロセスのマッピング:**外部プロセスのマッピングは、プロセス・フローに移行されます。

以前のリリースは、すでに独立した機能カテゴリではないが Warehouse モジュールの一部である場合、以前のリリースからスタンドアロンの変換を実行すると、次の警告が表示される場合があります。

- Transformation name renamed from "old name" to "new name".
- Transformation business name renamed from "old name" to "new name".

分割してエクスポートされたマッピングにはアップグレード制限があります。マッピングがファクト1とファクト2でソースとして使用されている場合、アップグレードの順番は次のようになります。

1. ファクト1
2. ファクト2
3. マッピング

### D.1.1.2 MDL File Upgrade ウィザードの使用

各プロジェクトを1つのMDLファイルとしてエクスポートした場合は、MDL File Upgrade ウィザードを使用します。MDL File Upgrade Utility ウィザードを実行すると、ファイルは直接現行バージョンの Warehouse Builder に変換されます。

MDL File Upgrade ウィザードにアクセスするには：

1. MDL File Upgrade Utility を起動します。
  - Windows の場合：**「スタート」→「OWB\_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB MDL File Upgrade Utility」を選択します。
  - UNIX の場合：**シェルを起動し、次のロケーションに移動します。  
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。  
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`  
 次に、`mdlconvertui.sh` を実行します。
2. 「Oracle Warehouse Builder MDL ファイル・アップグレード・ユーティリティ・ウィザード：ようこそ」ページで「次へ」をクリックします。
3. 「参照」をクリックし、最新バージョンの Warehouse Builder に変換する MDL ファイルを選択します。

---

**注意：** 複数の MDL ファイルを同時にアップグレードするには、MDL Command-Line Utility を使用します。MDL File Upgrade ウィザードでアップグレードするファイルを複数選択するとエラー・メッセージが表示されます。

---

4. 「次へ」をクリックします。  
「ターゲット」ページが表示されます。
5. 「参照」をクリックし、システムに格納する出力ファイルのディレクトリを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。  
ログ・ファイルのロケーションを選択します。デフォルトのパスを選択するか、「参照」をクリックして新しいロケーションを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。  
「サマリー」ページが表示されます。
8. アップグレードの対象に選択したファイルのソースとターゲットなどのアップグレード情報を確認します。
9. 「終了」をクリックして、選択したファイルをアップグレードします。  
「変換の進行状況」パネルに、アップグレードの状況が表示されます。処理が終了すると、「アップグレードに成功しました。」というメッセージが表示されます。

### D.1.1.3 警告およびエラーの確認

メタデータのアップグレードが完了したら、ログ・ファイルで警告およびエラーを確認します。

- アップグレード中に警告が発生した場合、MDL File Upgrade Utility は最後まで続行されログに警告が記録されます。エラーが発生した場合、MDL File Upgrade Utility は中断されログにエラーが記録されます。
- アップグレード後に警告とエラーが表示された場合は、「Warning」および「Error」という単語でログ・ファイルを検索し、問題を確認してください。
- 予想外のエラーが発生してアップグレードが中断した場合、ログ・ファイルにはメッセージの詳細が表示されます。ログ・ファイルを確認するか、オラクル社カスタマ・サポート・センターまでご連絡ください。

## D.1.2 コマンドラインからの MDL File Upgrade Utility の実行

コマンドラインを使用する前に、次の点に注意してください。

- 複数の MDL ファイルをアップグレードする場合、すべてのファイルが同じ Warehouse Builder プロジェクトに属している必要があります。
- ファイルをアップグレードする順番は重要です。たとえば、エンティティはマッピングの前にアップグレードする必要があります。

以前のバージョンの Warehouse Builder Design Repository から MDL ファイルをアップグレードするには、次のコマンドラインを使用します。

- **Windows の場合:** `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\mdlconvert sourcefile parameterfile`
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/mdlconvert.sh sourcefile parameterfile`

ソース・ファイルにはソース・ファイル、ターゲット・ファイルおよびログ・ファイルの名前が記載されています。パラメータ・ファイルには、変換のための差分属性が記載されています。

次はソース・ファイルのフォーマット例です。

```
SOURCE
Mdl21Sample1.mdl
Mdl21Sample2.mdl
TARGET
Mdl21Sample1_9i.mdl
Mdl21Sample2_9i.mdl
LOGFILE
Mdl21Sample1.log
Mdl21Sample2.log
```

次はパラメータ・ファイルのフォーマット例です。

```
verbose= true/false(default: false)
tempdir = some directory (default: .\temp)
sourceversion = 3.0/3.1/9.1/9.1.1 (default: 9.1.1)
targetversion = 3.0/3.1/9.1/9.1.1 (default: 9.1.1)
```



---

---

## 診断およびデバッグ

この付録では、インストール時にエラーや問題が発生した場合に使用する参照情報を記載します。この付録では、次の項目について説明します。

- [デバッグ \(E-2 ページ\)](#)
- [診断 \(E-5 ページ\)](#)

## E.1 デバッグ

この付録では、次の項目について説明します。

- ログ・ファイルのロケーション (E-2 ページ)
- Oracle Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ (E-2 ページ)
- エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング (E-2 ページ)
- Runtime Platform Service の管理 (E-4 ページ)

### E.1.1 ログ・ファイルのロケーション

- **Warehouse Builder Repository Assistant:**  
`OWB_ORACLE_HOME\owb\reposasst\log.txt.0`
- **Warehouse Builder Runtime Assistant:**  
`OWB_ORACLE_HOME\owb\rtasst\log.txt.0`
- **Warehouse Builder Browser Assistant:**  
`OWB_ORACLE_HOME\owb\browserasst\owbb_browser_install_log.txt.0`
- **Warehouse Builder Runtime Platform Service:**  
Oracle Database サーバー上の `OWB_ORACLE_HOME\owb\log\Runtime_Repository_Name\log.0`
- **Warehouse Builder Client:** 「作業環境」画面でロケーションを指定します。

### E.1.2 Oracle Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ

Warehouse Builder がフリーズまたはハングアップしているようならば、次の手順でスタックのトレースを実行します。

1. DOS コマンド・プロンプトで、次のように入力します。  
`cd OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32`
2. `owbclient.bat` を実行します。
3. プログラムがハングアップしたら、[Ctrl] を押しながら [Break] を押します。  
これによりスレッドダンプが生成されます。この情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターで問題を特定するのに役立ちます。

### E.1.3 エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング

Warehouse Builder でエラーが生成された場合、または他の予期せぬ結果が示された場合は、詳細なエラー・ロギングを使用すると、ユーザーやオラクル社カスタマ・サポート・センターが原因を特定できることがあります。

詳細なエラー・ロギングを行うには:

1. コマンド・プロンプトで次のディレクトリに移動します。  
**Windows の場合:** `OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32`  
**UNIX の場合:** `OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`
2. 次の実行ファイルのいずれかを実行し、パイプを通して出力をログ・ファイルに書き出します (`owbclient.bat > owbclient.log` など)。
  - **OWB Browser Assistant**  
Windows の場合: `browserinst.bat`  
UNIX の場合: `browserinst.sh`

- **OWB Client**  
Windows の場合: `owbclient.bat`  
UNIX の場合: `owbclient.sh`
  - **OWB Design Browser**  
Windows の場合: `openDB.bat`  
UNIX の場合: `openDB.sh`
  - **OWB MDL File Upgrade Utility**  
Windows の場合: `mdlconvertui.bat`  
UNIX の場合: `mdlconvertui.sh`
  - **OWB OMB Plus**  
Windows の場合: `OMBPlus.bat`  
UNIX の場合: `OMBPlus.sh`
  - **OWB Repository Assistant**  
Windows の場合: `reposinst.bat`  
UNIX の場合: `reposinst.sh`
  - **OWB Runtime Assistant**  
Windows の場合: `runtimeinst.bat`  
UNIX の場合: `runtimeinst.sh`
  - **OWB Runtime Audit Browser**  
Windows の場合: `openRAB.bat`  
UNIX の場合: `openRAB.sh`
  - **Start Local RTP Service**  
Windows の場合: スクリプト `OWB_ORACLE_HOME\owb\bin\win32\local_service_login.bat` の実行 (パラメータとして `-startup OWB_ORACLE_HOME` を使用)  
UNIX の場合: `local_service_login.sh -startup OWB_ORACLE_HOME`
  - **Start OWB OC4J Instance**  
Windows の場合: `startOwbbInst.bat`  
UNIX の場合: `startOwbbInst.sh`
  - **Stop Local RTP Service**  
Windows の場合: スクリプト `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\local_service_login.bat` の実行 (パラメータとして `-closedown ORACLE_HOME` を使用)  
UNIX の場合: `local_service_login.sh -closedown ORACLE_HOME`
  - **Stop OWB OC4J Instance**  
Windows の場合: `stopOwbbInst.bat`  
UNIX の場合: `stopOWBBIInst.sh`
3. 結果として生成されたログ・ファイルを調べます。  
オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡する際には、このログを使用します。

## E.1.4 Runtime Platform Service の管理

Runtime Platform Service は、Oracle Database サーバーにより自動的に管理されます。ただし、このサービスを手動で開始および停止する場合は、Warehouse Builder に付属のスクリプトを使用します。

このスクリプトは、`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql` ディレクトリにあります。これらのスクリプトを手動で実行するには、Runtime Repository の所有者としてランタイム・プラットフォームにログオンします。次のようなスクリプトがあります。

- **start\_service.sql**: Runtime Platform Service を開始するために使用します。
- **stop\_service.sql**: Runtime Platform Service を停止するために使用します。
- **show\_service.sql**: Runtime Platform Service が利用可能かどうかをチェックするために使用します。
- **service\_doctor.sql**: Runtime Platform Service コンポーネントのインストール・ステータスをチェックするために使用します。

**Runtime Platform Service を手動で開始、停止、およびチェックするには：**

1. Runtime Repository の所有者としてランタイム・プラットフォームにログオンします。
2. 次のうち必要なスクリプトを実行します。

**Runtime Platform Service を開始するには：**

`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\start_service.sql` スクリプトを実行します。

**Runtime Platform Service を停止するには：**

`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\stop_service.sql` スクリプトを実行します。

**Runtime Platform Service が利用可能かどうかをチェックするには：**

`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\show_service.sql` スクリプトを実行します。

**Runtime Platform Service コンポーネントのインストール・ステータスをチェックするには：**

`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\service_doctor.sql` スクリプトを実行します。

## E.1.5 HP-UX へのインストール時に発生するデータベース・サーバー問題の検出

HP-UX オペレーティング・システムに Warehouse Builder ランタイム・コンポーネントをインストールするときに、「INS0022: 起動したプログラムでエラーが発生しました」というエラーが発生する場合があります。これはデータベース・サーバーの問題である可能性があります。

**データベース・サーバー問題を特定するには：**

1. SQL\*Plus で、SYS ユーザーに接続します。

```
Create user test_lj identified by test_lj;
Grant connect, resource to test_lj;
```

2. 次の内容を含む `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/test.sh` を作成します。

```
../unix/loadjava -thin -verbose -order -resolve -user
'test_lj/test_
lj@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=hpdgpa3) (PORT=1522)) (CONNECT_
DATA=(SERVICE_NAME=dgpadw)))'
../../lib/int/rtpserver.jar
```

3. ディレクトリを `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/` に変更します。
4. `test.sh` を実行します。

## E.2 診断

この項では、次の項目について説明します。

- SYSDBA 権限を持たない SYS ユーザー
- INS0034: Runtime Repository オプションをローカルで実行して、データベース・サーバーを構成する必要があります。
- API5022: 指定されたリポジトリに接続できません。
- LoadJava エラーによる Runtime Assistant の障害
- SYSDBA ユーザーの指定時におけるエラー
- Name and Address のリージョン・データ・ライブラリが使用不可能
- 系統および影響分析のレポート: マテリアライズド・ビューの広範な表領域要件
- バッチ操作中の Java のメモリー不足エラー
- ORA-01925: 使用可能なロールの最大数 30 を超えました
- java.lang.UnsatisfiedLinkError: no ocjdbc9 in java.library.path
- Internal Server Error
- INS0009: データベースに接続することができません。接続情報を確認してください。
- ORA-12154: TNS: サービス名を解決できませんでした。
- ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。
- PL/SQL: ORA-04052: リモート・オブジェクトの検索中にエラーが発生しました。
- IMP-00003: Oracle エラー 30371 が発生しました。
- Oracle Database 10g で SQL\*Plus に接続できない
- ORA-04020: オブジェクトをロックしようとしてデッドロックを検出しました。または、ORA-04021: オブジェクトをロック待ちしていてタイムアウトが発生しました。

### SYSDBA 権限を持たない SYS ユーザー

**原因:** 標準のデータベースのインストールでは、SYS ユーザーは SYSDBA 接続情報を持ちます。これは SQL\*Plus で次の connect 文を発行することにより確認できます。

```
connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB as sysdba;
```

標準のデータベースのインストールでは、REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE およびデフォルトのパスワード・ファイルがインストール・プロセスで作成されるため、前述の connect 文が機能します。

**処置:** データベースが REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=NONE を使用して構成されている場合は、connect sys/(<<sys\_password>>@TNS\_NAME\_OF\_DB as sysdba; 文が失敗します。この場合は、次のいずれかの操作を実行できます。

- REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE を使用してデータベースを再構成し、パスワード・ファイルを作成します (パスワード・ファイルがない場合)。
- 前述の操作が不可能な場合は、O7\_DICTIONARY\_ACCESSIBILITY=TRUE を使用してデータベースを再構成します。  
この設定を使用すると、connect sys/(<<sys\_password>>@TNS\_NAME\_OF\_DB が機能し、Warehouse Builder Assistant で SYS ユーザーに接続できるようになります。

**INS0034: Runtime Repository オプションをローカルで実行して、データベース・サーバーを構成する必要があります。**

このメッセージは、Oracle Warehouse Builder Runtime Assistant の実行時に表示されません。

**原因:** Oracle Warehouse Builder Runtime Assistant を実行するマシンに対してローカルでデータベース・サーバーが用意されていません。

**処置:** Oracle Database サーバーがあるマシン上に Oracle Warehouse Builder Server Side をインストールし、Runtime Assistant を起動します。

**API5022: 指定されたリポジトリに接続できません。**

このエラーは、Warehouse Builder Design Repository スキーマからデータベースをエクスポートまたはインポートした後に、Design Repository に接続を試みたときに表示されません。

**原因:** パッケージの NAMESPACESERVICEIMPL が無効になっている可能性があります。この問題は、リポジトリの所有者が SYS.V\_\$SESSION に対する SELECT 権限を持たない場合に、Warehouse Builder Design Repository スキーマからデータベースをエクスポートまたはインポートすると、その後発生します。この問題の原因は、次の手順で診断できます。

1. SQL\*Plus で、Warehouse Builder Design Repository スキーマに接続します。

2. SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ALTER PACKAGE NAMESPACESERVICEIMPL compile body;
```

3. 「Warning: Package body altered with compilation errors」というメッセージが表示された場合は、SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
show errors;
```

4. 次のエラーは、Warehouse Builder Design Repository の所有者が SYS.V\_\$SESSION に対する SELECT 権限を持たないことを意味します。

```
PL/SQL: SQL statement ignored
PLS-00201: Identifier 'SYS.V_$SESSION' must be declared
```

**処置:**

1. SQL\*Plus で、SYS ユーザーとして接続します。

2. SQL プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
grant select on V_$SESSION to Warehouse Builder_Repository_Owner;
```

3. Design\_Repository\_Owner に接続します。

4. SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
alter package NAMESPACESERVICEIMPL compile;
```

**LoadJava エラーによる Runtime Assistant の障害**

**原因:** この問題は、Oracle Database に JServer オプションがインストールされていない場合に発生する可能性があります。

**処置:** Oracle Database に JServer オプションがインストールされていることを確認します。

**SYSDBA ユーザーの指定時におけるエラー**

Oracle Warehouse Builder Assistant では、Oracle Warehouse Builder Design Repository またはランタイム・コンポーネントをインストールするときに、SYSDBA 接続情報を指定する必要があります。

**原因:** 標準のデータベースのインストールでは、SYS ユーザーは SYSDBA 接続情報を持ちます。これは SQL\*Plus で次の connect 文を発行することにより確認できます。

```
connect sys/sys_password@TNS_NAME_OF_DB as sysdba;
```

標準のデータベースのインストールでは、REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE およびデフォルトのパスワード・ファイルがインストール・プロセスで作成されるため、前述の connect 文が機能します。

データベースが REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=NONE を使用して構成されている場合は、connect sys/sys\_password@TNS\_NAME\_OF\_DB as sysdba; 文が失敗します。この場合は、次のいずれかの操作を実行できます。

**処置:** REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE を使用してデータベースを再構成し、パスワード・ファイルを作成します (パスワード・ファイルがない場合)。

**処置:** 前述の操作が不可能な場合は、O7\_DICTIONARY\_ACCESSIBILITY=TRUE を使用してデータベースを再構成します。この設定を使用すると、connect sys/sys\_password@TNS\_NAME\_OF\_DB 文が機能し、Warehouse Builder Assistant で SYS ユーザーに接続できるようになります。

### Name and Address のリージョン・データ・ライブラリが使用不可能

**原因:** Name and Address のリージョン・データ・ライブラリが、正しい位置にインストールされていない可能性があります。

**処置:** NAS\_DATA ディレクトリへのリージョン・データの抽出が成功していることを確認します。

1. OWB\_ORACLE\_HOME から、Name and Address Server を起動します。

**Windows の場合:** owb¥bin¥win32¥NASTart.bat を実行します。

**UNIX の場合:** owb/bin/unix/NASTART.sh を実行します。

2. ログ・ファイル owb¥bin¥admin¥NASvr.log を開きます。

このログには、インストールされた国のリストが含まれます。

このようなリストがない場合は、リージョン・ライブラリ・データが正しいロケーションに抽出されていることを確認します。不適切なロケーションにデータを抽出していた場合は、データを再インストールするか、または owb¥bin¥admin¥NameAddr.properties ファイルを変更して、適切なファイル・パスを示します。NameAddr.properties ファイルを変更する場合は、次の手順で Name and Address Server を停止し、再起動します。

**Windows の場合:** サーバーを起動するには、owb¥bin¥win32¥NASTart.bat を実行します。サーバーを停止するには、owb¥bin¥win32¥NAStop.bat を実行します。

**UNIX の場合:** サーバーを起動するには、owb/bin/unix/NASTart.sh を実行します。サーバーを停止するには、owb/bin/unix/NAStop.sh を実行します。

3. インストールの確認後は、必要に応じて Name and Address Server を停止できます。これは、このサーバーが、Name and Address 演算子を使用するマッピングの実行時に自動的に起動されるためです。

### 系統および影響分析のレポート: マテリアライズド・ビューの広範な表領域要件

初めてマテリアライズド・ビューをリフレッシュするときには、ビューが Oracle Warehouse Builder Design Repository から移入されます。マテリアライズド・ビューは、Warehouse Builder Runtime Repository 全体に割り当てられている容量の 2 倍までの領域を占める場合があります。

**原因:** Warehouse Builder Runtime Repository スキーマに割り当てられている領域が不足しています。

**処置:** 専用の表領域で Warehouse Builder Runtime Repository スキーマが作成される場合は、このような問題を簡単に監視できます。表領域の拡張に備えて物理ドライブに十分な空き領域があるかどうかを確認します。Oracle Enterprise Manager 内で、表領域が Autoextend On に設定されていることを確認します。

### バッチ操作中の Java のメモリ不足エラー

大量のメモリを必要とする操作では、システム・リソース（仮想メモリなど）に制限がある場合、Java のメモリ不足エラーが発生する可能性があります。

**原因:** 仮想メモリの割り当てが十分ではありません。Warehouse Builder Client は、owbclient.bat ファイルの -mx パラメータで定義されているように、最大ヒープ・サイズが 384MB で実行されます。owbclient.bat ファイルの -Dlimit パラメータにより、OWB メモリ・マネージャで Java のガベージ・コレクションのサポートを開始するメモリのしきい値（Dlimit の 80%）が指定されます。-mx パラメータ値を変更する場合は、-Dlimit パラメータを同じ値か、または少なくともその値の 90% に設定します。-Dlimit を低い値に設定すると、Warehouse Builder のパフォーマンスに悪影響を与えます。

**処置:** Warehouse Builder の -Dlimit パラメータの値を次の手順で増やします。

1. Warehouse Builder を終了します。
2. テキスト・エディタで次のファイルを開きます。

**Windows の場合:** %OWBHOME%\bin\win32\ombplus.bat

**UNIX の場合:** \$OWBHOME\bin\win32\owbclient.sh

3. -Dlimit パラメータを 334 に変更します。
4. ファイルを保存し、閉じます。
5. Warehouse Builder を再起動します。

### ORA-01925: 使用可能なロールの最大数 30 を超えました

このエラーは、Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーのインストール中に発生します。

**原因:** データベースで有効なロールが最大数を超えています。Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーを作成すると、そのスキーマに割り当てられているデータベースに新規ロールが作成されます。ロール数が MAX\_ENABLED\_ROLES パラメータの値を超えると、このエラーが発生します。

**処置:** 初期化パラメータの MAX\_ENABLED\_ROLES の値を増やします。Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーを削除するときには、関連するロールも削除します。

### java.lang.UnsatisfiedLinkError: no ocjdbc9 in java.library.path

```
Internal Server Error java.lang.UnsatisfiedLinkError:no ocjdbc9 in java.library.pathat
java.lang.ClassLoader.loadLibrary(ClassLoader.java:1349)at
java.lang.Runtime.loadLibrary0(Runtime.java:749)
```

このエラーは、Runtime Audit Browser (Oracle9iAS 統合バージョン) の「リポジトリの選択」ページで、ネット・サービスベースのデータベース・リンクを使用して Runtime Repository のレポートを表示しようとするときに発生します。

**原因:** OWB Browser OC4J インスタンスが、正しい追加環境変数を使用して構成されていません。

**処置:** 第 2 章で説明されている手順をすべて実行したかどうか確認します。

### Internal Server Error

これは、リスナーにより返された Runtime Audit Browser ポートレット・エラーです。

**原因:** このエラーは、データ・ソースの定義またはポートレット・プロバイダの定義が原因で、Warehouse Builder Runtime Audit Browser ポートレット・プロバイダが機能していない場合に発生します。

**処置:** Warehouse Builder Runtime Audit Browser ポートレット・プロバイダが機能しているかどうかを、次の URL で確認します。

[http://hostname:port\\_number/owbb/providers/](http://hostname:port_number/owbb/providers/)



次に例を示します。

```
http://dwlin12.us.oracle.com:7778/owbb/providers/
```

次のテキストが表示されます。

```
"Congratulations! You have successfully reached your Provider's Test Page."
Checking for components:
Portlets are:
Warehouse Builder Runtime Audit Browser
```

前述のテキストが表示されたかどうかにかかわらず、次のデータ・ソースの定義を確認します。

- **Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) のみ:** 第 2 章で説明されているように、デフォルトのアプリケーション・ライブラリ・パスから `uix2.jar` および `shar.jar` を削除します。
- Warehouse Builder データ・ソースは、デフォルトのアプリケーションではなく、OWBB アプリケーションを使用して定義する必要があります。
- データ・ソース・クラスの場合は、Oracle データ・ソースの `com.evermind.sql.OrionCMTDataSource` を使用します。
- JDBC URL を調べます。通常、「`jdbc:oracle:thin:@dwlin12:1521:iasdb`」のような URL を使用した場合は、JDBC Thin ドライバを使用し、「`iasdb`」にはサービス名ではなく既存の SID のみを使用します。また、「`@`」記号の前にコロンが付きます。JDBC URL でサービス名を使用する必要がある場合は、「`((DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=dwlin16)(PORT=1521))) (CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=ora920.us.oracle.com))))`」などの完全な TNS 文字列で試します。
- データ・ソースの定義を変更した場合やアプリケーションを再配布した場合は、アプリケーションを再起動する必要があります。
- ポートレット・プロバイダの定義を調べます。第 2 章の手順に従って正確に定義されていることを確認します。
- Oracle Portal の `ORACLE_HOME` で `OC4J` ログを調べます。たとえば、OWBB という名前の配布済 OWBB アプリケーションの場合、UNIX での一般的なパスは次のとおりです。`/usr/iasv2_portal/j2ee/owbb/log/owbb_default_island_1:`  

```
default-web-access.log
global-application.log
jms.log
rmi.log
server.log
```

**INS0009: データベースに接続することができません。接続情報を確認してください。**

このエラーは、データベースへの接続を試みる際に発生します。

**原因:** 「ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。」の原因を参照してください。

**処置:** 「ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。」の手順に従ってください。

**ORA-12154: TNS: サービス名を解決できませんでした。**

このエラーは、データベースへの接続を試みる際に発生します。

**原因:** 「ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。」の原因を参照してください。

**処置:** 「ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。」の手順に従ってください。

**ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。**

このエラーは、データベースへの接続を試みる際に発生します。

**原因:** Oracle Net Easy Configuration または Oracle Net Assistant ツールを使用してネット・サービス名エントリを作成し、新しく作成したネット・サービス名でデフォルトのオプション (サービス名) を使用した場合、パラメータ `SERVICE_NAME` が、ネット・サービス名エントリ内の `CONNECT_DATA` セクションの副次句として `TNSNAMES.ORA` に追加されます。この副次句は、Oracle Database8i (8.1.x) の旧バージョンの (`SID=<SIDname>`) 副次句と入れ替わります。

**処置:** `TNSNAMES.ORA` ファイルを次の手順で実装します。

1. 個別のサービスとして識別する各 `SID` に対して、`LISTENER.ORA` で `GLOBAL_DBNAME` パラメータを使用します。このパラメータの値を、`SERVICE_NAME` パラメータの値として使用します。リスナー・プロセスの停止と再起動を行って、`LISTENER.ORA` で変更した内容をすべて有効にする必要があります。
2. `INIT.ORA` に存在するパラメータ (すなわち、`SERVICE_NAMES` および `DB_DOMAIN`) の値を使用して、`TNSNAMES.ORA` で使用する必要のある `SERVICE_NAME` の値を決定します。この値の有効な構成は `<SERVICE_NAMES>.<DB_DOMAIN>` で、ピリオドにより 2 つの `INIT.ORA` 値が分けられています。`SERVICE_NAMES` が `BIKES` で、`DB_DOMAIN` が `COM` の場合、`SERVICE_NAME` は `BIKES.COM` となります。
3. `INIT.ORA` で設定されている `DB_DOMAIN` パラメータがない場合、または `LISTENER.ORA` に `GLOBAL_DBNAME` がない場合は、`SERVICE_NAME` パラメータ用に `TNSNAMES.ORA` 内の `INIT.ORA` から `SERVICE_NAMES` を使用できます。  
たとえば、`INIT.ORA` に `SERVICE_NAMES = "TEST817"` が含まれており、`db_domain` が設定されていない場合、`TNSNAMES.ORA` エントリは `CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME = "TEST817")` となります。
4. `init.ora` の `SERVICE_NAMES` パラメータで複数の値が指定されている場合は、これらの値のうち 1 つを使用できます。`SERVICE_NAMES` が設定されていない場合は、`INIT.ORA` ファイルから `DB_NAME.DB_DOMAIN` パラメータを使用できます。
5. `INIT.ORA` で `SERVICE_NAMES` および `DB_DOMAIN` が設定されておらず、`LISTENER.ORA` に `GLOBAL_DBNAME` が存在しない場合、`TNSNAMES.ORA` ファイルの `SERVICE_NAME` は、`DB_NAME` となります。

**PL/SQL: ORA-04052: リモート・オブジェクトの検索中にエラーが発生しました。**

このエラーは、Oracle Database 10g にアップグレードした後、最初にコネクタを再配布しないで、マッピングを再配布しようするときに発生します。

**原因:** Oracle Database 10g にアップグレードする際には、データベースを新しいコンピュータへ移行します。このときに、古いデータベースと新しいデータベースのインスタンスに同じドメイン名が指定されていない可能性があります。ドメイン名は、`SYS` ユーザーとして `SQL*Plus` にログインし、コマンド `SELECT * FROM GLOBAL_NAME;` を入力すると確認できます。古いデータベースと新しいデータベースのグローバル名が一致していない場合は、このドメイン名の不一致がエラーの原因となっています。

**処置:** コマンド `ALTER DATABASE RENAME GLOBAL_NAME TO xxx10G.US.ORACLE.COM;` を発行して、新しいデータベースのグローバル名にドメイン名を追加します。または、コネクタを再配布します。コネクタの再配布の詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

**IMP-00003: Oracle エラー 30371 が発生しました。****ORA-30371: 同じ列で 2 ディメンション以上のレベルを定義することはできません。**

このエラーは、移行時にターゲット・スキーマをインポートする際に発生しました。

**原因:** Warehouse Builder ターゲット・スキーマは、`select_catalog_role` 権限を使用して作成されます。複数の Warehouse Builder ターゲット・スキーマに同じディメンション・オブジェクトが定義されている場合、Oracle Export がエクスポート・ファイルに複製を作成し、インポート時には、このエラーが発生します。

**処置:** ターゲット・スキーマのエクスポート元である旧バージョンの Oracle Database に SYS ユーザーとして接続します。SQL\*Plus で、`revoke select_catalog_role from OLD_Target_Schema;` という文を入力します。もう一度ターゲット・スキーマを Oracle .DMP ファイルにエクスポートしてから、そのファイルを Oracle Database 10g にインポートします。

### Oracle Database 10g で SQL\*Plus に接続できない

**原因:** Oracle ホームまたはパスが正しく設定されていないか、ネット・サービス名が正しく構成されていません。

**処置:** Oracle Database 10g で Oracle ホームとパスを正しく設定し、ネット・サービス名も正しく構成します。

- Oracle Database 10g で ORACLE\_HOME と PATH が正しく設定されていることを確認します。Oracle ホーム・ディレクトリは OWB\_ORACLE\_HOME を指している必要があります。PATH 変数では、OWB\_ORACLE\_HOME/bin ディレクトリを指定します。このディレクトリは他の Oracle 製品よりも前に指定する必要があります。
- TNSNames.ora ファイルが正しく構成されていることを確認します。

**Windows の場合:** Oracle Database 10g のプログラム・グループから **Net Configuration Assistant** を起動し、[ ローカル・ネット・サービス名の構成 ] を選択して、TNSNames.ora を構成します。

**UNIX の場合:** ORACLE\_HOME と PATH を Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) の OWB\_ORACLE\_HOME に設定し、OWB\_ORACLE\_HOME/bin/netca を実行して、**Net Configuration Assistant** を起動します。[ ローカル・ネット・サービス名の構成 ] を選択して、TNSNames.ora を構成します。

### ORA-04020: オブジェクトをロックしようとしてデッドロックを検出しました。または、ORA-04021: オブジェクトをロック待ちしていてタイムアウトが発生しました。

Runtime Assistant では、ランタイム・オブジェクトの作成時に sys.dbms\_aq をロックしようとする、オブジェクトの作成が停止され、エラー・ログにこのエラーが出力されません。

**原因:** ユーザー・セッションがアドバンスド・キュー・オブジェクトを占有している可能性があります。

**処置:** まず、SQL\*Plus に SYS ユーザーとしてログインし、アドバンスド・キュー・パッケージを占有しているユーザー・セッションを識別する問合せを実行します。たとえば、次のような問合せを実行します。

```
column s.sid format a5;
column s.serial# format a8;
column s.username format a10;
column objectname format a10;

select distinct
  s.sid,
  s.serial#,
  s.username,
  x.kglname as objectname
from
  dba_kgllock l,
  v$session s,
  x$kgllk x
where
  l.kglktype = 'Pin' and
  s.saddr = l.kglkuse and
  s.saddr = x.kglkuse and
  x.kglname in ('DBMS_AQ', 'DBMS_AQADM');
```

この例では、問合せの結果は次のようになります。

SID	SERIAL#	USERNAME	OBJECTNAME
---	-----	-----	-----
9	29623	RTU_4942	DEMS_AQ

SID とシリアル番号を書き留め、次のコマンドを発行してユーザー・セッションを切断します。

```
ALTER SYSTEM KILL SESSION 'SIDNoted, SerialNumberNoted';
```

たとえば、このエラーの出力例で示されているセッションを切断するには、次のように入力します。

```
ALTER SYSTEM KILL SESSION '9,29623';
```

---

---

## Warehouse Builder のサポート言語

表 F-1 に、Warehouse Builder でサポートされている表示言語と、それぞれに対応する国際標準化機構 (ISO) の ID を示します。

**表 F-1 サポート言語の ISO ID**

ISOID	言語
en_US	米語
ar_AE	アラビア語
as_IN	アッサム語
bn_IN	ベンガル語
pt_BR	ポルトガル語 (ブラジル)
bg_BG	ブルガリア語
fr_CA	フランス語 (カナダ)
ca_ES	カタロニア語
hr_HR	クロアチア語
cs_CZ	チェコ語
da_DK	デンマーク語
nl_NL	オランダ語
#ar_EG	エジプト語
ar_EG	エジプト語 (アラビア)
en_GB	英語
et_EE	エストニア語
fi_FI	フィンランド語
fr_FR	フランス語
de_DE	ドイツ語
el_GR	ギリシア語
gu_IN	グジャラト語
he_IL	ヘブライ語
hi_IN	ヒンディー語
hu_HU	ハンガリー語
is_IS	アイスランド語

---

**表 F-1 サポート言語の ISO ID (続き)**

<b>ISOID</b>	<b>言語</b>
in_ID	インドネシア語
it_IT	イタリア語
ja_JP	日本語
kn_IN	カンナダ語
ko_KR	韓国語
es_US	スペイン語 (南米)
lv_LV	ラトビア語
lt_LT	リトアニア語
ms_MY	マレー語
ml_IN	マラヤーラム語
mr_IN	マラーティー語
es_MX	スペイン語 (メキシコ)
no_NO	ノルウェー語
or_IN	オーリヤ語
pl_PL	ポーランド語
pt_PT	ポルトガル語
pa_IN	パンジャブ語
ro_RO	ルーマニア語
ru_RU	ロシア語
zh_CN	簡体字中国語
sk_SK	スロバキア語
sl_SI	スロベニア語
es_ES	スペイン語
sv_SE	スウェーデン語
ta_IN	タミル語
te_IN	テルグ語
th_TH	タイ語
zh_TW	繁体字中国語
tr_TR	トルコ語
uk_UA	ウクライナ語
vi_VN	ベトナム語

# 索引

## 数字

07\_DICTIONARY\_ACCESSIBILITY パラメータ  
Design Repository, A-2

## A

AQ\_TM\_PROCESSES パラメータ  
Runtime Repository, A-5

Assistant

- Browser Assistant, 起動, 2-6
- Browser Assistant, 実行, 2-23
- Repository Assistant, 起動, 2-7
- Repository Assistant, 実行, 2-9
- Runtime Assistant, 起動, 2-7
- Runtime Assistant, 実行, 2-12

ログ・ファイルのロケーション, E-2

## B

Browser

- Design Browser, 概要, 1-6
- Design Browser の起動, 2-7
- OC4J インスタンス, 起動, 2-8
- OC4J インスタンス, 停止, 2-8
- Oracle Application Server との統合, Oracle Database  
パラメータ, A-6
- Oracle Application Server への Design Browser と  
Runtime Audit Browser の統合, 2-22
- Runtime Audit Browser, 概要, 1-6
- Runtime Audit Browser の起動, 2-8
- ネット・サービス名, 構成, 2-21

Browser Assistant

- Browser Assistant の起動, 2-6
- Oracle Application Server への Design Browser と  
Runtime Audit Browser の統合, 2-22
- インストール手順, 2-23
- ログ・ファイルのロケーション, E-2

## C

CD-ROM

- HP-UX でのマウント, B-2
- Linux でのマウント, B-3
- Solaris でのマウント, B-4
- Tru64 UNIX でのマウント, B-4

CLASSPATH 環境変数

- 文字の長さ, 1-8

Client

- Warehouse Builder Client の起動, 2-7

COMPATIBLE パラメータ

- Design Repository, A-2
- Runtime Repository, A-5

Create Any Directory 権限, 2-15

Create Public Database Link 権限, 2-9

## D

DAD, 「Database Access Descriptors (DAD)」を参照

DB\_BLOCK\_SIZE パラメータ

- Design Repository, A-2
- Runtime Repository, A-3

DB\_CACHE\_SIZE パラメータ

- Design Repository, A-2
- Runtime Repository, A-3

DB\_FILE\_MULTIPLE\_BLOCK\_READ\_COUNT パラメータ

- Runtime Repository, A-3

DB\_WRITER\_PROCESSES パラメータ

- Runtime Repository, A-4

DBWR\_IO\_SLAVES パラメータ

- Runtime Repository, A-4

Design Browser

- Design Browser の起動, 2-7
- Oracle Application Server からの削除, 4-2
- Oracle Application Server との統合, 2-25
- Oracle Application Server との統合, インストール・  
インスタンス, 1-7
- 概要, 1-6
- クライアント, 有効化, 2-17

Design Client

- Warehouse Builder の一般的なインストール例, 2-3

Design Repository

- Oracle Database のパラメータ, A-2
- Repository Assistant, 2-9
- SYSDBA 権限, 2-10
- 言語, 2-11
- 削除, 4-3
- 使用可能なロール, E-8
- 接続エラー, E-6
- 表領域, 2-11

DISK\_ASYNC\_IO パラメータ

- Runtime Repository, A-3

-Dlimit パラメータ

- owbclient.bat ファイル, メモリーしきい値, E-8

Drop Any Directory 権限, 2-15

DTupg90to10g  
設計メタデータのアップグレード・スクリプト  
、 3-10  
DTupg92to10g  
設計メタデータのアップグレード・スクリプト  
、 3-10

## E

---

ENQUEUE\_RESOURCES パラメータ  
Runtime Repository, A-4

## G

---

gen\_ext\_dirs.sql スクリプト, 3-7  
GLOBAL\_DBNAME パラメータ  
ネット・サービス名, E-10  
GLOBAL\_NAMES パラメータ  
Oracle Application Server, A-6

## H

---

HTTP Server  
Oracle Database, 1-6  
インストール, 1-6  
起動, 2-17

## I

---

init.ora ファイル  
JAVA\_POOL\_SIZE パラメータ, 2-12  
MAX\_ENABLED\_ROLES パラメータ, E-8  
UTL\_FILE\_DIR パラメータ, A-5  
Internet Explorer  
IE のプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの  
「localhost」の追加, 2-21  
キャッシュ管理, 構成, 2-21  
I/O  
DB\_WRITER\_PROCESSES パラメータ, A-4  
DBWR\_IO\_SLAVES パラメータ, A-4  
DISK\_ASYNC\_IO パラメータ, A-3  
ISO ID  
サポート言語, F-1

## J

---

JAVA\_POOL\_SIZE パラメータ, 2-12  
Runtime Repository, A-4  
JDBC  
EJB 対応バージョンの場所, 2-28, 2-29  
JDBC URL, 2-28, 2-29  
JDBC ドライバ, 2-28, 2-29  
トランザクション関連 (XA) バージョンの場所  
、 2-28, 2-29  
場所, 2-28, 2-29  
JOB\_QUEUE\_PROCESSES パラメータ  
Runtime Repository, A-5  
JServer オプション  
Runtime Assistant, E-6

## L

---

LARGE\_POOL\_SIZE パラメータ

Runtime Repository, A-3  
LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数  
文字の長さ, 1-8  
listener.ora ファイル  
GLOBAL\_DBNAME パラメータ, E-10  
LoadJava エラー  
Runtime Assistant, E-6  
Local RTP Service  
Local RTP Service の起動, 2-8  
Local RTP Service の停止, 2-8  
localhost  
Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リ  
ストへの「localhost」の追加, 2-21  
LOCK\_SGA パラメータ  
Design Repository, A-2  
LOG\_BUFFER パラメータ  
Runtime Repository, A-3  
LOG\_CHECKPOINT\_TIMEOUT パラメータ  
Runtime Repository, A-4  
log.txt 設計メタデータ・アップグレード・ログ, 3-11

## M

---

MAX\_ENABLED\_ROLES パラメータ, E-8  
MDL  
MDL File Upgrade Utility の起動, 2-7  
設計メタデータのインポート, 3-9  
設計メタデータのエクスポート, 3-8  
MDL File Upgrade Utility  
概要, D-2  
Metadata Loader  
MDL File Upgrade Utility の起動, 2-7  
Metadata Loader (MDL)  
ENQUEUE\_RESOURCES パラメータ, A-4  
File Upgrade Utility, 概要, D-2  
File Upgrade ウィザード, D-3  
MLS  
Repository Assistant での言語の定義, 2-11  
サポート言語の ISO ID, F-1  
-mx パラメータ  
owbclient.bat ファイル, 仮想メモリー, E-8

## N

---

Name and Address  
インストール, 2-32  
演算子, 概要, 2-32  
データ・ライブラリ, 2-32  
ベンダー, 2-32  
リージョン・ライブラリが使用不可能, E-7  
Name and Address Server  
Runtime Assistant, 2-14  
インストール手順, 2-12  
Name and Address のクレンジング  
Warehouse Builder の要件, 1-7  
Net Manager  
ネット・サービス名, 構成, 2-21  
Netscape  
Netscape のプロキシ・サーバー・バイパス・リスト  
への「localhost」の追加, 2-21  
キャッシュ管理, 構成, 2-21



## O

### OC4J

- OC4J インスタンスの起動, 2-8
- OC4J インスタンスの作成, 2-26
- OC4J インスタンスの停止, 2-8

### OMB Plus

- OMB Plus の起動, 2-7

### OPEN\_CURSORS パラメータ, A-4

- Design Repository, A-2
- Oracle Application Server, A-6

### OPEN\_LINK パラメータ

- Oracle Application Server, A-6

### OPTIMIZER\_MODE パラメータ

- Runtime Repository, A-3

### Oracle Application Server

- Design Browser と Runtime Audit Browser の統合, 2-22
- Design Browser の削除, 4-2
- Design Browser の統合, 2-25
- Oracle Application Server 10g リリース 1 (9.0.4), スキーマへの Runtime Audit Browser のバインド, 2-29
- Oracle Database のパラメータ, A-6
- Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2), スキーマへの Runtime Audit Browser のバインド, 2-28
- Runtime Audit Browser の削除, 4-2
- Runtime Audit Browser の統合, 2-26
- Warehouse Builder の要件, 1-6
- データ・ソース・クラス, 定義, 2-28

### Oracle Containers for Java

- 「OC4J」を参照

### Oracle Database

- Design Repository, パラメータ, A-2
- HP-UX のサーバー問題, E-4
- HTTP Server, 1-6
- JServer オプション, E-6
- Oracle Application Server, パラメータ, A-6
- Oracle ホームディレクトリ, 複数の製品の共存, 1-7
- Runtime Repository, パラメータ, A-2
- Warehouse Builder と互換性のあるバージョン, 3-2
- Warehouse Builder の要件, 1-5
- 新しいデータベース・インスタンスへの移動, 3-3
- アップグレード, 3-2
- 移行, 3-2
- インストール要件, A-1
- 同じデータベース・インスタンスの保持, 3-4
- 完全なデータベースのエクスポートとインポート, 3-3
- 選択的移行, 3-4
- データベースの移行ユーティリティ, 3-4
- 部分的なデータベースのエクスポートとインポート, 3-4
- ユーザー, Warehouse Builder のユーザー, 2-9

### Oracle Enterprise Manager

- Runtime Repository の表領域の設定, E-7
- Warehouse Builder の要件, 1-7
- インストール, C-1
- 構成, C-2

### Oracle Export

- 監査データ, 移行, 3-6
- 設計メタデータ, 移行, 3-4

### Oracle HTTP Server

- 起動, 2-17

### Oracle Import

- 監査データ, 移行, 3-6
- 設計メタデータ, 移行, 3-4
- ターゲット・スキーマ, 移行, 3-7

### Oracle JVM, 2-12

- JAVA\_POOL\_SIZE パラメータ, 2-12

### Oracle Metabase

- OMB Plus の起動, 2-7

### Oracle Portal

- Oracle Application Server への Design Browser と Runtime Audit Browser の統合, 2-23
- Warehouse Builder メタデータに対するレポートの作成, 2-23

### Oracle Universal Installer (OUI)

- OUI の起動, 1-9
- Warehouse Builder の削除, 4-4
- インベントリ・ディレクトリ, 1-9
- 概要, 1-9
- クライアントのインストール, 2-9
- サーバーのインストール, 2-9
- 他の Oracle ソフトウェアの削除, 4-4

### Oracle Workflow

- UTL\_FILE\_DIR パラメータ, Advanced Queueing System, A-5
- Warehouse Builder の要件, 1-7
- インストール, C-1

### ORACLE\_HOME

- Warehouse Builder のアップグレードに関する考慮事項, 3-2
- 複数の製品の共存, 1-7

### Oracle9i Application Server

- 「Oracle Application Server」を参照

### Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2)

- スキーマへの Runtime Audit Browser アプリケーションのバインド, 2-28
- 「Oracle Application Server」も参照

### Oracle9iAS

- 「Oracle Application Server」を参照, 2-28

### Oracle ホーム・ディレクトリ

- 複数の製品の共存, 1-7

### ORA.INI ファイル

- COMPATIBLE パラメータ, A-2

### OWB\_ORACLE\_HOME

- 共存, 複数の製品, 1-7

### owbclient.bat ファイル

- Dlimit メモリーしきい値パラメータ, E-8
- mx 仮想メモリー・パラメータ, E-8

### owbrt\_sys ユーザー

- Runtime Assistant, 2-12

## P

### PARALLEL\_ADAPTIVE\_MULTI\_USER パラメータ

- Runtime Repository, A-4

### PATH 環境変数

- 文字の長さ, 1-8

### PGA\_AGGREGATE\_TARGET パラメータ

- Runtime Repository, A-4

### PL/SQL

- 最適化, PLSQL\_OPTIMIZE\_LEVEL パラメータ, A-4

ファイル入出力のための UTL\_FILE\_DIR パラメータ  
、 A-5  
PLSQL\_OPTIMIZE\_LEVEL パラメータ  
Runtime Repository, A-4

## Q

QUERY\_REWRITE\_ENABLED パラメータ  
Runtime Repository, マテリアライズド・ビューの生  
成用, A-4

## R

RAC, 「Real Application Clusters (RAC)」を参照  
RAM

Warehouse Builder のハードウェア要件, 1-3

Real Application Clusters (RAC)

RAC 環境への Warehouse Builder のインストール  
、 2-12

REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ

Design Repository, A-2

Runtime Repository, A-4

Repository Assistant

Design Repository の削除, 4-3

Repository Assistant の起動, 2-7

SYSDBA 権限, 2-10

インストール手順, 2-9

言語, 2-11

データベース構成警告, 2-10

表領域, 2-11

ログ・ファイルのロケーション, E-2

RESOURCE\_MANAGER\_PLAN パラメータ

Runtime Repository, A-5

RTP, 「Runtime Platform Service」を参照

Runtime

JOB\_QUEUE\_PROCESSES パラメータ, A-5

Local RTP Service の起動, 2-8

Local RTP Service の停止, 2-8

Runtime Assistant, ランタイム・オブジェクトのイ  
ンストール, 2-12

Runtime Access User

インストール, 2-13

Runtime Assistant

LoadJava エラー, E-6

Runtime Assistant の起動, 2-7

Runtime Repository の削除, 4-3

インストールされるユーザー, owbrt\_sys, 2-12

インストール手順, 2-12

作成されるロール, 2-14

ターゲット・スキーマ, 2-14

ターゲット・スキーマの削除, 4-2

データベース構成警告, 2-14, 2-16

表領域, Runtime Repository, 2-14

表領域, ターゲット・スキーマ, 2-16

ランタイム・アクセス・スキーマ, 2-14

リポート実行, 2-12

ローカル・データベース・サーバー, E-6

ログ・ファイルのロケーション, E-2

Runtime Audit Browser

OC4J インスタンスの作成, 2-26

Oracle Application Server 10g リリース 1 (9.0.4) との  
統合, 2-29

Oracle Application Server からの削除, 4-2

Oracle Application Server との統合, 2-26

Oracle Application Server との統合, インストール・  
インスタンス, 1-7

Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) との  
統合, 2-28

Runtime Audit Browser の起動, 2-8

概要, 1-6

「データベース・リンクの作成」ページ, ネット・  
サービス名, 2-30

Runtime Platform

Local RTP Service の起動, 2-8

Local RTP Service の停止, 2-8

Runtime Platform Service

Local RTP Service の起動, 2-8

Local RTP Service の停止, 2-8

ステータスの管理およびチェック, E-4

ログ・ファイルのロケーション, E-2

Runtime Repository

Oracle Database のパラメータ, A-2

SYSDBA 権限, 2-13, 2-15

インストール, 2-13

インストール手順, 2-12

削除, 4-3

使用可能なロール, E-8

データベース構成警告, 2-14

表領域, 2-14

マテリアライズド・ビュー, 領域不足, E-7

ローカル・データベース・サーバー, E-6

## S

Service

Local RTP Service の起動, 2-8

Local RTP Service の停止, 2-8

SGA\_TARGET パラメータ

Runtime Repository, A-3

SHARED\_POOL\_SIZE パラメータ

Runtime Repository, A-3

Single Sign-On (SSO)

Oracle Application Server への Design Browser と  
Runtime Audit Browser の統合, 2-23

SSO, 「Single Sign-On (SSO)」を参照

STATISTICS\_LEVEL パラメータ

Runtime Repository, A-4

SYSDBA 権限

Design Repository, 2-10

REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ  
、 A-2, A-4

Repository Assistant, 2-10

Runtime Assistant, 2-13, 2-15

Runtime Repository, 2-13, 2-15

SYS ユーザーのチェック, E-5

事前, 2-9

ターゲット・スキーマ, 2-15

SYS アカウント

REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ  
、 A-2

SYS ユーザー

Design Repository, 2-10

REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ  
、 A-2, A-4

Runtime Repository, 2-13

権限の確認, E-5

ターゲット・スキーマ, 2-15

## T

tnsnames.ora ファイル

SERVICE\_NAME パラメータ, E-10

## U

UNDO\_MANAGEMENT パラメータ

Runtime Repository, A-4

UNIX

HP-UX, データベース・サーバー問題, E-4

Warehouse Builder コンポーネントの起動, 2-6

USE\_INDIRECT\_DATA\_BUFFERS パラメータ

Runtime Repository, A-4

UTL\_FILE\_DIR パラメータ

Runtime Repository, A-5

## W

Warehouse Builder

Oracle ホームディレクトリ, 複数の製品の共存, 1-7

Warehouse Builder メタデータに対する Oracle Portal レポート, 2-23

インストールの概要, 2-2

インストールの詳細手順, 2-1

インストール要件, 1-1

環境, コンポーネント (必須、オプション), 1-4

クライアント, 起動, 2-7

クライアント, ログ・ファイルのロケーション, E-2

最新のリリースへのアップグレード, 3-1

削除, 4-1, 4-4

診断およびデバッグ, E-1

必須コンポーネント, 1-6

Warehouse Builder のインストール

一般的なインストール例, 2-3

インストール準備作業, 1-8

クイック・ステップ, 1-2

上級ユーザー, 手順, 1-2

ソフトウェア要件, 1-3

ハードウェア要件, 1-3

要件, 1-1

Warehouse Builder の上級ユーザー

インストール手順, 1-2

Warehouse Builder のソフトウェア要件, 1-3

Name and Address のクレンジング製品, 1-7

Oracle Application Server, 1-6

Oracle Database, 1-5

Oracle Enterprise Manager, 1-7

Oracle Workflow, 1-7

必要な Warehouse Builder コンポーネント, 1-6

必要な製品, 1-4

Warehouse Builder のハードウェア要件, 1-3

Warehouse Builder の要件

UNIX, 1-3

Warehouse Builder のインストール, 1-1

Windows, 1-3

インストール準備作業, 1-8

オペレーティング・システム, 1-3

ソフトウェア製品, 1-4

ソフトウェア要件, 1-3

ハードウェア要件, 1-3

WB\_RT\_MAPAUDIT 権限, 3-7

Windows

Warehouse Builder コンポーネントの起動, 2-6

WORKAREA\_SIZE\_POLICY パラメータ

Runtime Repository, A-5

## あ

アーキテクチャ

Warehouse Builder の概要, 2-2

アカウント

SYS, Design Repository, 2-10

SYS, REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ, A-2, A-4

SYS, Runtime Repository, 2-13

SYS, ターゲット・スキーマ, 2-15

アップグレード

MDL File Upgrade Utility, 概要, D-2

MDL File Upgrade Utility の起動, 2-7

Metadata Loader (MDL) File Upgrade ウィザード, D-3

ORACLE\_HOME に関する考慮事項, 3-2

Warehouse Builder, 3-1

Warehouse Builder の最新バージョンのインストール, 3-2

新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布, 3-15

新しいランタイム環境へのデータの移行, 3-11

外部プロセス, D-2

コマンドライン・ユーティリティを使用したメタデータ, D-4

新機能のためのマッピング構成の更新, 3-16

設計メタデータ, ログ・ファイル, 3-11

ビジネス・エリア, D-2

マッピング, D-3

ランタイム・データ, 3-11

ローカル変数, D-3

アドバンスド・キュー

UTL\_FILE\_DIR パラメータ, A-5

移行

Oracle Database サーバーでのデータベース・オブジェクトのエクスポートとインポートによるデータ, 3-12

Warehouse Builder ユーザー・インタフェースでのデータベース・オブジェクトの再生成によるデータ, 3-11

新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成によるデータ, 3-13

新しいランタイム環境へのデータ, 3-11

アップグレードしたターゲット・スキーマへのマッピングの配布, 3-15

外部ディレクトリ, 3-7

ターゲット・スキーマ, インポート, 3-7

データとメタデータ, 3-1

データベースの移行ユーティリティ, 3-4

フラット・ファイル, 新しいデータベース・インスタンスへのコピー, 3-15

部分的なデータベースのエクスポートとインポート, 3-4

部分的なデータベースのエクスポートとインポート, 設計メタデータ, 3-4

部分的なデータベースのエクスポートとインポート, ランタイム環境, 3-6

## インストール

- Browser Assistant での Warehouse Builder Browser, 2-23
  - JServer オプション, Oracle Database, E-6
  - Name and Address, 2-32
  - Oracle Application Server への Design Browser と Runtime Audit Browser, 2-22
  - Oracle Enterprise Manager, C-1
  - Oracle Workflow, C-1
  - Real Application Cluster (RAC) 環境への Warehouse Builder, 2-12
  - Runtime Access User, 2-13
  - Runtime Assistant, 2-12
  - Runtime Repository, 2-13
  - Warehouse Builder, 詳細手順, 2-1
  - Warehouse Builder のインストールの詳細手順, 2-1
  - アップグレード時の Warehouse Builder, 3-2
  - クライアントのインストール, 2-9
  - サーバーのインストール, 2-9
  - 診断およびデバッグ, E-1
  - 事前, SYSDBA 権限, 2-9
- ### インストール準備
- Warehouse Builder のインストール準備作業, 1-8
  - Warehouse Builder の要件, 1-1
- ### インベントリ・ディレクトリ
- Oracle Universal Installer (OUI), 1-9
- ### インポート
- Warehouse Builder のメタデータのインポートによる設計メタデータ, 3-9
  - 移行時のターゲット・スキーマ, 3-7
  - 大容量 MDL インポートでの ENQUEUE\_ RESOURCES パラメータ, A-4
  - ログ・ファイル, ターゲット・スキーマ, 3-8
- ### ウィザード
- Metadata Loader File Upgrade ウィザード, D-3
  - 「Assistant」も参照
- ### 影響分析レポート
- マテリアライズド・ビュー, エラー, E-7
- ### エクスポート
- Warehouse Builder のメタデータのエクスポートによる設計メタデータ, 3-8
- ### エラー
- Repository Assistant におけるデータベース構成警告, 2-10
- ### オペレーティング・システム
- UNIX, Warehouse Builder の要件, 1-3
  - Warehouse Builder の互換性, 1-3
  - Windows, Warehouse Builder の要件, 1-3

## か

- 仮想メモリー
  - エラー, E-8
- 環境変数
  - Warehouse Builder の文字の長さ, 1-8
- 監査データ
  - 部分的なデータベースのエクスポートとインポートを使用したランタイム環境の移行, 3-6
  - 完全なデータベースのエクスポートとインポート
    - Oracle Database のアップグレード, 3-3
- 管理
  - ランタイム使用率のリソース・プラン, A-5
- ガイド

- Warehouse Builder, ix
- 外部表
  - 移行時に必要な操作, 3-7
- 外部ディレクトリ
  - 新しいデータベース・インスタンスへのコピー, 3-7
- 外部プロセス
  - ユーザー定義のプロセスへのアップグレード, D-2
- 概要
  - Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ, 1-2
  - インストール・コンポーネント, 2-2
- 起動, 2-6
  - Browser Assistant, 2-6
  - Design Browser, 2-7
  - HTTP Server, 2-17
  - Local RTP Service, 2-8
  - MDL File Upgrade Utility, 2-7
  - OC4J インスタンス, 2-8
  - OMB Plus, 2-7
  - Oracle Universal Installer (OUI), 1-9
  - Repository Assistant, 2-7
  - Runtime Assistant, 2-7
  - Runtime Audit Browser, 2-8
  - Warehouse Builder Client, 2-7
  - Warehouse Builder コンポーネント, 2-6
- クイック・ステップ
  - Warehouse Builder のインストール, 1-2
  - クライアントのインストール手順, 2-9
- 系統レポート
  - マテリアライズド・ビュー, エラー, E-7
- 権限
  - Create Any Directory, Drop Any Directory, 2-15
  - Create Public Database Link, 2-9
  - REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ, A-2
  - Runtime Repository 用に作成されるロール, 2-14
  - SYSDBA, Design Repository, 2-10
  - SYSDBA, Runtime Repository, 2-13
  - SYSDBA, 事前, 2-9
  - SYSDBA, ターゲット・スキーマ, 2-15
  - SYS ユーザー, 権限のチェック, E-5
  - WB\_RT\_MAPAUDIT, 3-7
- 言語
  - Design Repository, 2-11
  - Repository Assistant, 2-11
  - 国際標準 ID, F-1
- 更新
  - 「アップグレード」を参照
- 構成
  - Design Browser Client, 有効化, 2-17
  - Design Browser と Oracle Application Server, 2-25
  - Oracle Enterprise Manager, C-2
  - Repository Assistant, 実行, 2-9
  - Repository Assistant におけるデータベース構成警告, 2-10
  - Runtime Assistant におけるデータベース構成警告, 2-14
  - Runtime Audit Browser と Oracle Application Server, 2-26
  - Runtime Audit Browser のネット・サービス名, 2-21, 2-30
  - Web ブラウザのキャッシュ管理, 2-21

- Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの「localhost」の追加, 2-21
- インストールする場合の Oracle Database, A-1
- 新機能のためのマッピング構成の更新, 3-16
- メモリーの owblnt.bat ファイル, E-8
- コネクタ
  - 権限, 2-15
- このマニュアルの Unicode テキスト, ix
- このマニュアルのイタリック Unicode テキスト, ix
- このマニュアルの省略記号, ix
- このマニュアルの大カッコ, ix
- このマニュアルの表記規則, ix
- このマニュアルの太字, ix
- コマンドライン・ユーティリティ
  - メタデータのアップグレード, D-4
- コレクション
  - ビジネス・エリアからのアップグレード, D-2
- コンポーネント
  - Warehouse Builder 環境のコンポーネント (必須、オプション), 1-4
  - Warehouse Builder のインストールの概要, 2-2

## さ

- サーバーのインストール
  - 手順, 2-9
- サービス名
  - サービス名の解決エラー, E-9
- 削除, 4-1
  - Design Repository, 4-3
  - Oracle Application Server から Design Browser, 4-2
  - Oracle Application Server から Runtime Audit Browser, 4-2
  - Oracle ソフトウェア, 4-4
  - Runtime Repository, 4-3
  - Warehouse Builder, 4-1, 4-4
- コネクタ, 権限, 2-15
- ターゲット・スキーマ, 4-2
- 作成
  - OC4J インスタンス, 2-26
  - Warehouse Builder メタデータに対する Oracle Portal のレポート, 2-23
  - コネクタ, 権限, 2-15
  - データ・ソース, 2-29
  - データ・ソース, EJB 対応バージョンの場所, 2-28
  - データ・ソース, JDBC URL, 2-28
  - データ・ソース, JDBC ドライバ, 2-28
  - データ・ソース, 「データ・ソースの追加」ページ, 2-28
  - データ・ソース, トランザクション関連 (XA) パーティションの場所, 2-28
  - データ・ソース, 場所, 2-28
- サマリー
  - Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ, 1-2
- シノニム
  - 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成によるデータの移行, 3-13
- 集計
  - PGA\_AGGREGATE\_TARGET パラメータ, A-4
- 診断, E-1
- スキーマ
  - Runtime Assistant, 作成, 2-12

- ターゲット・スキーマ, 概要, 2-15
- スクリプト
  - DTupg904to10g, 3-10
  - DTupg92to10g, 3-10
  - gen\_ext\_dirs.sql, 3-7
  - OMB Plus の起動, 2-7
- 設計メタデータ
  - アップグレード・ログ・ファイル, 3-11
  - 移行, 部分的なデータベースのエクスポートとインポートの使用, 3-4
- セッション
  - 複数セッションのための OPEN\_CURSORS パラメータ, A-4
- 接続
  - Design Repository, エラー, E-6
  - REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメータ, A-2
  - データベース, 接続エラー, E-9
- ソート
  - PGA\_AGGREGATE\_TARGET パラメータ, A-4
- ソフトウェア製品
  - Warehouse Builder, 必須, 1-4

## た

- ターゲット
  - フラット・ファイル, UTL\_FILE\_DIR パラメータ, A-5
- ターゲット・スキーマ
  - Runtime Assistant, 2-14
  - 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成によるデータの移行, 3-13
  - 新しいランタイム環境へのデータの移行, 3-11
  - アップグレードしたターゲット・スキーマへのマッピングの配布, 3-15
  - 移行時のインポート, 3-7
  - インストール手順, 2-12
  - 概要, 2-15
  - 権限, 2-15
  - 削除, 4-2
  - 使用可能なロール, E-8
  - データベース構成警告, 2-16
  - 表領域, 2-16
- チェックリスト
  - インストール前のチェックリスト, Warehouse Builder, 1-8
- 追加
  - Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの「localhost」, 2-21
  - データベース・アクセス記述子 (DAD), 2-17, 2-18
- 定義
  - データ・ソース, EJB 対応バージョンの場所, 2-28
  - データ・ソース, JDBC URL, 2-28
  - データ・ソース, JDBC ドライバ, 2-28
  - データ・ソース・クラス, 2-28
  - データ・ソース, 「データ・ソースの追加」ページ, 2-28
  - データ・ソース, トランザクション関連 (XA) パーティションの場所, 2-28
  - データ・ソース, 場所, 2-28
- 停止
  - Local RTP Service, 2-8
  - OC4J インスタンス, 2-8

ディスク領域  
Warehouse Builder のハードウェア要件, 1-3  
データ  
新しいランタイム環境へのデータの移行, 3-11  
移行, 3-1  
データ・ソース  
EJB 対応バージョンの場所, 2-28  
JDBC URL, 2-28  
JDBC ドライバ, 2-28  
作成, 2-29  
データ・ソース・クラス, 2-28  
「データ・ソースの追加」ページ, 2-28  
トランザクション関連 (XA) バージョンの場所  
, 2-28  
場所, 2-28  
データ・ソース・クラス  
定義, 2-28  
データの品質  
Name and Address のインストール, 2-32  
データベース・アクセス記述子 (DAD)  
追加, Design Browser Client の有効化, 2-17, 2-18  
データベース構成警告  
Repository Assistant, 2-10  
Runtime Assistant, 2-14, 2-16  
ターゲット・スキーマ, 2-16  
データベースの移行ユーティリティ  
Oracle Database のアップグレード, 3-4  
データベース・リンク  
作成された権限, 2-9  
データ・ライブラリ  
Name and Address, 使用不可能, E-7  
デバッグ, E-1  
統合  
Design Browser と Oracle Application Server, 2-25  
Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle  
Application Server と統合するための Oracle  
Database パラメータ, A-6  
Oracle Application Server への Design Browser と  
Runtime Audit Browser, 2-22  
Runtime Audit Browser と Oracle Application  
Server, 2-26  
登録  
ポートレット・プロバイダ, 2-29  
トポロジ  
Warehouse Builder の一般的なインストール例, 2-3  
トラブルシューティング  
診断およびデバッグ, E-1

## な

---

ネット・サービス名  
Runtime Audit Browser の構成, 2-30  
SERVICE\_NAME パラメータ, E-10  
構成, 2-21

## は

---

バージョン  
Warehouse Builder のバージョンのアップグレード  
, 3-1  
パフォーマンス  
-Dlimit パラメータ, E-8  
パブリック・データベース・リンク

作成された権限, 2-9  
パラメータ  
Design Repository のための Oracle Database パラ  
メータ, A-2  
JAVA\_POOL\_SIZE, 2-12  
Oracle Application Server の Oracle Database パラ  
メータ, A-6  
Oracle Database, 準備, A-1  
Runtime Repository のための Oracle Database パラ  
メータ, A-2

## 表領域

Design Repository, 2-11  
Repository Assistant, 2-11  
Runtime Assistant, Runtime Repository, 2-14  
Runtime Assistant, ターゲット・スキーマ, 2-16  
Runtime Repository, 2-14  
ターゲット・スキーマ, 2-16  
マテリアライズド・ビュー, 割当て, E-7  
ビジネス・エリア  
コレクションへのアップグレード, D-2  
ファイル  
ログ・ファイルのロケーション, E-2  
フラット・ファイル  
新しいデータベース・インスタンスへのコピー  
, 3-15  
ターゲット, UTL\_FILE\_DIR パラメータ, A-5  
ブック

Warehouse Builder, ix  
部分的なデータベースのエクスポートとインポート  
Oracle Database のアップグレード, 3-4  
ブラウザ  
Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リ  
ストへの「localhost」の追加, 2-21  
キャッシュ管理の構成, 2-21  
プラットフォーム  
UNIX 用の Warehouse Builder の要件, 1-3  
Warehouse Builder がサポートしているオペレーティ  
ング・システム, 1-3  
Warehouse Builder の一般的なインストール例, 2-3  
Windows 用の Warehouse Builder の要件, 1-3  
プロキシ・サーバー  
Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リ  
ストへの「localhost」の追加, 2-21

## 変数

アップグレード, D-3  
ページ・ファイル・サイズ  
Warehouse Builder のハードウェア要件, 1-3  
ポートレット  
Oracle Application Server への Design Browser と  
Runtime Audit Browser の統合, 2-23  
ポートレット・プロバイダ, 登録, 2-29  
ポートレット・プロバイダ  
プロバイダ URL, 2-29

## ま

---

マッピング  
アップグレード, D-3  
アップグレードしたターゲット・スキーマへのマッピ  
ングの配布, 3-15  
新機能のための構成の更新, 3-16  
マテリアライズド・ビュー  
QUERY\_REWRITE\_ENABLED パラメータ, A-4

系統および影響分析のレポート, エラー, E-7  
マニュアル  
Warehouse Builder, ix  
メタデータ  
MDL File Upgrade Utility の起動, 2-7  
Warehouse Builder メタデータに対する Oracle Portal  
のレポート作成, 2-23  
コマンドライン・ユーティリティを使用したアップグ  
レード, D-4  
大容量 MDL インポートでの ENQUEUE\_  
RESOURCES パラメータ, A-4  
部分的なデータベースのエクスポートとインポートを  
使用した設計メタデータの移行, 3-4  
メタデータのアップグレード, 3-1  
メタデータのインポート  
設計メタデータ, 3-9  
ログ・ファイル, 3-9  
メタデータのエクスポート  
設計メタデータ, 3-8  
メモリー  
Warehouse Builder のハードウェア要件, 1-3  
バッチ操作中のエラー, E-8

Warehouse Builder メタデータに対する Oracle Portal  
レポート, 2-23  
ロール  
Runtime Repository 用に作成, 2-14  
ログ・ファイル  
log.txt 設計メタデータ・アップグレード・ログ  
, 3-11  
Warehouse Builder のメタデータのインポートのロ  
グ・ファイル, 3-9  
ターゲット・スキーマ・インポート・ログ, 3-8  
ログ・ファイルのロケーション, E-2

## や

ユーザー  
Oracle Database と Warehouse Builder, 2-9  
owbrt\_sys, Runtime Assistant によるインストール  
, 2-12  
SYS, Design Repository, 2-10  
SYS, REMOTE\_LOGIN\_PASSWORDFILE パラメー  
タ, A-2  
SYS, Runtime Repository, 2-13  
SYS, ターゲット・スキーマ, 2-15  
UNIX 動作環境, インストール, 2-9  
Warehouse Builder の上級ユーザー, インストール手  
順, 1-2  
ユーザー定義のプロセス  
外部プロセスからのアップグレード, D-2  
ユーザー・マニュアル  
Warehouse Builder, ix  
要件  
JServer オプション, Oracle Database, E-6  
Oracle Database のパラメータ, A-1  
SYSDBA 権限, 2-9

## ら

ランタイム  
ランタイム・データのアップグレード, 3-11  
リソース使用率, PLSQL\_OPTIMIZE\_LEVEL パラ  
メータ, A-5  
ランタイム・アクセス・スキーマ  
Runtime Assistant, 2-14  
インストール手順, 2-12  
ランタイム環境  
移行, 部分的なデータベースのエクスポートとイン  
ポートの使用, 3-6  
ランタイム・データ  
ランタイム・データのアップグレード, 3-11  
リモート実行  
Runtime Assistant, 2-12  
レポート作成

